(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第45集

箕面市粟生間谷東・茨木市宿久庄所在

徳大寺遺跡

国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

1999年6月

財団法人　大阪府文化財調査研究センター

「建大寺」建物配置のイメージ

遺跡遠景（南から・中央が徳大寺遺跡、西側は栗生間谷遺跡）

「徳大寺」遺構検出状況（5区）（東から）

鋳造土坑２－１周辺遺構検出状況（東から）

落込５－１・集石土坑５－10出土遺物

序　　文

大阪府北部は緑多い山間丘陵地と複雑に入り組んだ谷地形、扇状地といった変化と起伏に富んだ地形からなり、この数十年で急激に都市化した市街地と、いまだのどかな風情を残す山間・田園地帯が混在する生活空間をつくりだしています。

今回調査対象となった茨木市・箕面市には、旧石器時代以来の豊富な文化遺産が多く残されていることが知られてきましたが、旧知の遺跡・未知の遺跡ともに近年の大規模開発等に伴って、徐々にその姿を表しつつあります。徳大寺遺跡は、大阪府と住宅・都市整備公団が施工する国際文化公園都市予定地に位置します。その建設に先立って今回行われた調査で、遺跡名称の由来となった近世の寺院跡のみならず、鋳造土坑や鍛冶炉といった古代から中世にかけての遺構や、縄文時代の住居址を検出するといった、めざましい成果を得ることができました。また谷を隔てて当遺跡の西側の丘陵で行われている粟生間谷遺跡の発掘調査により、古代から中世にかけての集落の変遷や空間利用の状況がより明らかになりつつあります。これらの調査成果をまとめていくことにより、当該地域の歴史を社会組織や生業活動・山間地開発の推移などといった、複合的な視点から分析することが将来的に可能となるでしょう。

最後に、本事業を進めるにあたって御支援・御協力を賜った大阪府教育委員会・住宅都市整備公団関西支社・茨木市教育委員会・箕面市教育委員会・地元関係各位に、深く感謝いたします。今後とも当センターの事業に一層のご理解・御協力を賜りますよう切に希望いたします。

平成11年6月

財団法人　大阪府文化財調査研究センター
理事長　坪　井　清　足

例　　言

1．本書は大阪府箕面市粟生間谷東３丁目に所在する德大寺遺跡および大阪府茨木市宿久庄７丁目に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。

2．調査は国際文化公園都市の整備に伴うもので、住宅・都市整備公団の委託を受け、財団法人　大阪府文化財調査研究センターが実施した。

3．調査は調査部長井藤　徹、参事兼調整課長中西靖人、北部調査事務所長玉井　功、北部調査事務所調査第一係長小野久隆の指示のもと、技師若林幸子・廣瀬時習、非常勤専門調査員重田恭子が担当者として実施した。

4．現地調査は平成８年６月３日から開始し、平成９年７月30日までに復旧工事も含めて終了した。整理作業並びに本書の作成は技師若林幸子と非常勤専門調査員木村健明が平成10年４月から平成11年６月まで行い、全ての作業を完了した。

5．調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、箕面市教育委員会、茨木市教育委員会、住宅・都市整備公団関西支社大阪国際文化公園都市開発事務所、㈱鴻池組、㈱安西工業、㈱日測、地元自治会などの関係諸機関の他、下記の方々からご指導・援助を賜った。

（調査指導）

飯島正明氏・福田　薫氏（箕面市教育委員会）、五十川伸矢氏（京都大学）、奥井哲秀氏・宮脇薫氏（茨木市教育委員会）、大道和人氏（財団法人　滋賀県文化財保護協会）、神崎　勝氏（妙見山麓遺跡調査会）、雑賀次郎氏（箕面市役所）、杉山　洋氏（奈良国立文化財研究所）、中井一夫氏（奈良県立橿原考古学研究所）、庖丁道明氏（美原町教育委員会）、藤沢典彦氏（財団法人　元興寺文化財研究所）、山上　弘氏（大阪府教育委員会）、吉田晶子氏（財団法人　枚方市文化財研究調査会）

（調査参加者）

〈調査員〉

上河善子

〈調査補助員〉

石塚買子、石井　佑、伊礼よしの、勝間悠有子、蒐田知宏、後藤勝徳、高橋　等、辻　康男、常見正幸、殿岡祐介、成田晃一、仲辻晃明、橋本牧子、前田智洋、向井　朗、渡邊健一郎

（整理作業参加者）

〈調査補助員〉

今田明子、奥田直美、黒田優美、佐藤美和、津田春子、中田麻矢、野口佳子

6．調査に際しては前中一晃氏・吉田育代氏（花園大学自然科学研究室）に熱残留地磁気測定を依頼し、その結果を掲載した。

7．調査から本書作成途上においては理事長坪井清足、参事兼普及資料課長福岡澄男、北部調査事務所長藤田憲司、北部調査事務所調査第二係長金光正裕、主査森屋美佐子、技師井藤暁子・鋤柄俊夫・三好孝一・新海正博・森本　徹から適宜指導、助言を得た。

8．調査区全景および遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物写真撮影は北部調査事務所調査第一係主査平井貞子が行った。また巻頭図版の航空写真は㈱日測の撮影によるものである。

9．巻頭図版１のイラストは今田明子によるものである。

10．執筆は主に若林幸子・木村健明が起稿したが、分担は目次に示す通りである。

11．本書の編集は主に木村が行った。

12．本調査に係わる遺物、写真、カラースライド、実測図などの各種記録類は、財団法人　大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

・遺構実測図の基準高については全て東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。

・平面図は国土座標に則った平面直角座標系、第VI座標系に準拠し、挿図における座標の記載は全てメートル単位で表す。また方位の矢印の示す方向は座標北を示す。

・土色に関しては小山正忠・竹原秀夫編1995『新版標準土色帖』（1995年版）農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に準拠した。

・遺構平面図における断面図作成位置は鉤形によって表す。

・遺構番号は各調査区毎に通し番号で設定している。これは必ずしも時代の新しいものから順にはなっていない。

・遺物実測図の縮尺は土器が主に３分の１で、一部に４分の１、６分の１を使用している。また、銅銭は実物大、石製品は２分の１で掲載している。

・遺物写真に記載される遺物の縮尺率は不同である。

・第55・56・62図の遺物に貼っているスクリーントーン111番（ドット）は青磁釉を表している。その他は図中に示している通りである。

巻頭図版目次

巻頭図版１　「徳大寺」建物配置のイメージ
巻頭図版２　遺跡遠景（南から）（上）・５区徳大寺関連遺構検出状況（東から）（下）
巻頭図版３　鋳造土坑２－１周辺遺構検出状況（東から）（上）
　　落込５－１・集石土坑５－10出土遺物

目　　次

序　文
例　言
凡　例

第１章　調査にいたる経緯と経過……（若林幸子）…１
第２章　調査の方法……（若林）…３
第３章　遺跡の位置と歴史的環境　（木村健明）
　第１節　地理的環境……４
　第２節　歴史的環境……４
第４章　調査成果
　第１節　基本層序と調査概要……（若林）…８
　第２節　検出された遺構　（若林）
　　１．縄文時代……27
　　２．古代～中世……32
　　３．近世……44
　　４．時期不明の遺構……64
　第３節　出土遺物　（木村）
　　１．土器……68
　　２．瓦……90
　　３．金属製品……94
　　４．石製品……96
第５章　考察・分析
　第１節　調査のまとめ……（若林）…98
　第２節　鋳造遺構について……（廣瀬時習）…104
　第３節　徳大寺建物配置の復元……（若林・木村）…114
　第４節　徳大寺遺跡炭焼窯焼土試料の考古地磁気測定
　　（花園大学自然科学研究室　前中一晃・吉田育代）…121

挿図目次

第１図　箕面市・茨木市位置図……1
第２図　調査区位置図……2
第３図　徳大寺遺跡と周辺遺跡分布図……5
第４図　調査区区割図……8
第５図　調査区の地区割と断面位置図……9
第６図　１区土層断面図……11～12
第７図　２区土層断面図……13～14
第８図　２区・７区土層断面図……15～16
第９図　２区・３区土層断面図……17
第10図　３区・４区土層断面図……18
第11図　５区土層断面図……19
第12図　５区・６区土層断面図……20
第13図　H77区土層断面図……21～22
第14図　１区・H77区遺構配置図……23～24
第15図　H77区ピット配置図……25～26
第16図　住居址H77－１平面・断面図……28
第17図　住居址H77－１検出ピット断面図……29
第18図　住居址H77－２平面・断面図……30
第19図　住居址H77－３平面・断面図……31
第20図　２区・３区・７区遺構配置図……33～34
第21図　鋳造土坑２－１平面・断面図……35～36
第22図　鋳造土坑２－１と周辺遺構の平面・断面図……37
第23図　鋳造土坑２－１周辺遺構断面図……38
第24図　梵鐘の鋳型と鋳造の様子……39
第25図　梵鐘各部分の名称……39
第26図　鋳造土坑２－１遺物出土状況……40
第27図　炭窯２－１・焼土坑H77－２・ピットH77－54平面・断面図……41
第28図　鍛冶炉３－１平面・断面図……42
第29図　鍛冶炉３－１上遺構平面・断面図……43
第30図　ピット３－11・土坑３－５平面図……44
第31図　土坑３－３平面・断面図……45
第32図　４区・５区遺構配置図……47～48
第33図　３区・５区遺構配置図……49～50
第34図　集石土坑５－１～３・土坑５－24・25平面・断面図……51
第35図　集石土坑５－11～13・集石遺構５－１平面図……52
第36図　土坑５－18・19・20・ピット５－28平面・断面図……54

第37図　落込５－１・集石土坑５－10平面図……55
第38図　集石土坑５－10・ピット５－52平面・断面図……56
第39図　土坑５－50・53・61・68平面・断面図……57
第40図　集石土坑５－５・６・７　土坑５－56・57平面・断面図……59
第41図　土坑５－58・80・集石土坑５－９平面・断面図……60
第42図　溝５－24周辺遺構平面・断面図……61
第43図　道状遺構・土坑３－19・集石土坑２－２平面・断面図……63
第44図　集石土坑２－１・土坑３－14平面・断面図……65
第45図　集石土坑２－３・３－３平面・断面図……66
第46図　焼土坑４－１・集石土坑３－１平面・断面図……67
第47図　平成６年度調査時出土遺物……68
第48図　遺構出土遺物（縄文～中世）……69
第49図　流路１－２遺物出土状況……70
第50図　鋳造土坑２－１出土遺物……70
第51図　鍛冶炉３－１上ピット出土遺物……71
第52図　土坑３－12出土遺物……71
第53図　土坑３－３出土遺物……73
第54図　遺構出土遺物（近世１）……74
第55図　落込５－１・集石土坑５－10出土遺物……76
第56図　遺構出土遺物（近世３）……78
第57図　包含層出土遺物（古代）……79
第58図　包含層出土遺物（古代～中世）……80
第59図　包含層出土遺物（中世）……81
第60図　包含層出土遺物（近世１）……83
第61図　包含層出土遺物（近世２）……85
第62図　包含層出土遺物（近世３）……86
第63図　包含層出土遺物（近世４）……87
第64図　包含層出土遺物（近世５）……89
第65図　包含層出土丹波焼甕……90
第66図　瓦各部名称……91
第67図　遺構出土瓦……92
第68図　包含層出土瓦……93
第69図　出土金属製品……95
第70図　出土貨幣……95
第71図　出土石製品……95
第72図　梵鐘鋳造遺構分布図……104
第73図　梵鐘鋳造工房のシステム復元想定図……105
第74図　奈良県巨勢寺跡検出の梵鐘鋳造遺構……106

第75図　京都大学構内遺跡の梵鐘鋳造土坑 ……107
第76図　滋賀県木瓜原遺跡の梵鐘鋳造土坑 ……108
第77図　徳大寺遺跡梵鐘鋳造遺構周辺の遺構配置図 ……109
第78図　徳大寺遺跡の梵鐘鋳造土坑 ……109
第79図　徳大寺の調査前および調査後の状況 ……114
第80図　徳大寺建物配置復元案（南正面） ……116
第81図　徳大寺建物配置復元案（東正面） ……117
第82図　直交交流消磁図 ……125
第83図　西南日本の永年変化曲線 ……127

表　目　次

第１表　土坑面積計測表 ……103
第２表　梵鐘鋳造土坑一覧表……112・113
第３表　徳大寺の建物の変遷 ……118
第４表　徳大寺試料の帯磁率・残留磁化の強さとその相対比の関係 ……122
第５表　徳大寺試料の消磁前後の残留磁化測定結果 ……123
第６表　徳大寺試料の残留磁化測定結果 ……124
第７表　遺物観察表……129～140

付図目次

付図１　徳大寺遺跡平面図

図版目次

図版１　１区最終面検出状況　１．北半部（東から）　２．北半部（北東から）
３．南半部（東から）　４．南半部（南東から）
図版２　２区最終面検出状況　１．中央部（北から）　２．東端部（北西から）
３．西端部（北から）
図版３　７区最終面検出状況　１．東半部（北西から）　２．東半部近接（北西から）
３．中央部近接（北から）　４．西半部（北東から）
図版４　３区最終面検出状況　１．東半部（北東から）　２．東半部（北西から）
３．西半部（北東から）　４．西半部（北西から）
図版５　４区最終面検出状況　１．南側斜面（南東から）　２．西側斜面（西から）
３．西側斜面棚田部分近接（東から）
図版６　４区・６区最終面検出状況　１．４区南東側斜面（南から）
２．６区東側斜面（東から）

図版７　５区最終面検出状況　１．東半部（北から）　２．東半部（北から）
３．西半部（北東から）　４．西半部（北東から）

図版８　H77区最終面検出状況　１．北半部（南西から）　２．北半部（北西から）
３．南半部（北から）　４．南半部（北から）

図版９　２区遺構検出状況　１．炭窯２－１完掘状況（南から）
２．溝２－２完掘状況（南から）
３．集石土坑２－３完掘状況（南東から）
４．ピット２－34検出状況（東から）
５．ピット２－30断面（西から）

図版10　２区遺構検出状況その他
１．土坑２－７断面（東から）
２．土坑２－７完掘状況（北東から）　３．現地説明会風景
４．鋳造土坑切り取り作業　５．ポリウレタン吹き付け作業

図版11　２区鋳造土坑２－１周辺のピット　１．№１断面（東から）　２．№３断面（東から）
３．№２断面（東から）　４．№４断面（西から）
５．№５断面（北から）　６．№６断面（北から）
７．№25断面（東から）
８．№７・８断面（西から）

図版12　２区鋳造土坑２－１　１．全掘状況(南から)　２．長軸方向断面（北東から）
３．緑釉陶器出土状況(東から)　４．底部近接（南から）
５．底部断ち割り状況(南から)

図版13　３区鍛冶炉３－１　１．中心部の検出状況(南から)
２．落込３－２断面（西から）
３．№11検出状況(北から)　４．№11・12（南から）
５．№11炭化物層(南西から)　６．№11断面（南から）
７．№12断面(南西から)　８．№10（北東から）

図版14　３区鍛冶炉３－１　１．完掘状況(北から)　２．中央部近接（北東から）
３．№11・12完掘状況(南東から)
４．№13完掘状況（北西から）
５．№３・14完掘状況（北から）

図版15　３区遺構検出状況　１．土坑３－３遺物出土状況（東から）
２．土坑３－３断面（北西から）
３．土坑３－12完掘状況（北から）
４．土坑３－３完掘状況（西から）
５．集石土坑３－３完掘状況（北から）
６．集石土坑３－１完掘状況（南から）

図版16　３区・４区遺構検出状況　１．土坑３－19桶出土状況（南から）
２．土坑３－19完掘状況（南から）

3．暗渠５－１（西から）
4．焼土坑４－１（南西から）

図版17　５区遺構検出状況
1．土坑５－80完掘状況（東から）
2．土坑５－80断面（東から）
3．土坑５－68検出状況（東から）
4．土坑５－68完掘状況（南から）
5．土坑５－58完掘状況（東から）
6．土坑５－58断面（南東から）

図版18　５区遺構検出状況
1．集石土坑５－６完掘状況（南東から）
2．土坑５－57完掘状況（南東から）
3．集石土坑５－10検出状況（南西から）
4．集石土坑５－10断面（西から）
5．ピット５－28完掘状況（南から）

図版19　５区遺構検出状況
1．ピット５－52断面（東から）
2．土坑５－24断面（東から）
3．土坑５－53・50（北東から）
4．土坑５－53完掘状況（北東から）
5．土坑５－50完掘状況（北東から）
6．土坑５－60完掘状況（北から）
7．集石土坑５－９完掘状況（北から）
8．集石遺構５－１（南西から）

図版20　H77区住居址H77－１
1．住居址土層断面（北から）　2．ピット１断面（北から）
3．検出状況（北から）　4．ピット６断面（南から）
5．ピット12断面（南から）　6．ピット８断面（東から）
7．ピット15断面（北から）　8．ピット９・10断面（東から）

図版21　H77区遺構検出状況
1．焼土坑H77－１検出状況（西から）
2．石垣H77－１検出状況（北西から）
3．焼土坑H77－２断面（北西から）
4．焼土坑H77－２完掘状況（西から）
5．住居址H77－３検出状況（北東から）
6．住居址H77－２検出状況（北から）

図版22　H77区住居址H77－１他出土土器

図版23　２区鋳造土坑２－１他出土遺物

図版24　３区土坑３－３出土遺物

図版25　包含層出土中世遺物

図版26　集石土坑５－10・落込５－１他出土遺物

図版27　土坑５－96他出土遺物

図版28　包含層出土近世遺物１

図版29　包含層出土近世遺物２
図版30　軒丸瓦・軒桟瓦
図版31　軒平瓦・道具瓦
図版32　石製品・金属製品

第１章　調査にいたる経緯と経過

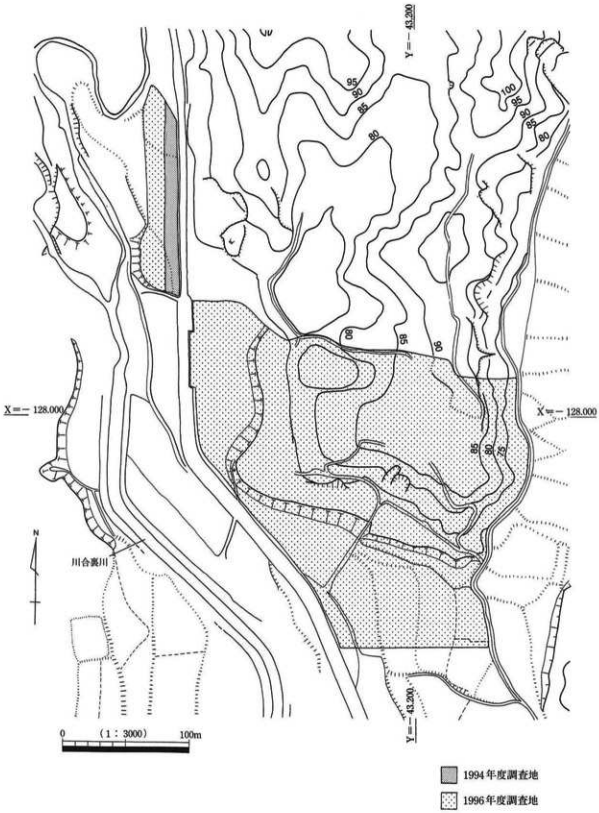
国際文化公園都市は北摂山間丘陵部742.2ha を対象に、1986（昭和61）年に基本構想が打ち出され、1992（平成４）年に都市計画決定がなされるに至ったものである。事業の施工にあたり、1993（平成５）年度に大阪府教育委員会と㈶大阪府埋蔵文化財協会が文化財分布調査を行い、箕面市粟生間谷・茨木市粟生岩阪地内の山中で遺物散布地をマークした。その確認のための試掘調査が翌年1994（平成６）年から1996（平成８）年まで行われ、大阪府教育委員会事務局文化財保護課より発掘調査が必要であるとの行政指導があった地域においては順次、発掘調査が行われている。

第１図　箕面市・茨木市位置図

徳大寺地域における今回の発掘に先立つ調査としては、1994（平成６）年度にH77区の東側に隣接する部分で行われたものがある。この調査では弥生時代後期のピット、古代の柱穴群、中世の柱穴、近世以降の暗渠等の遺構の他、噴砂跡（地震痕跡）を検出した。また包含層から縄文晩期の凸帯文土器や弥生中期の甕の破片が出土しており、実体は不明なものの、当地域における人の活動痕跡が古くまで遡りえることがわかった。

同じ年度に粟生間谷地区で行った調査では、奈良時代（８世紀）から鎌倉時代（13世紀）にかけての掘立柱建物を中心とした建物群・井戸・火葬墓等の遺構を検出した。それらに加えて特筆されるのが、奈良三彩小壷を伴う地鎮土坑の発見である。これは直径18cm、深さ約９ cm の小規模な土坑で、底面近くからほぼ正位の状態の奈良三彩小壷が密封された状態で出土した。小壷の内部には鉛ガラス製の玉が50個以上入れられていた。奈良三彩小壷は奈良時代前葉頃のもので、特定の建物に対する地鎮というよりも、集落全体に対して設けられたものと考えられている。

1995（平成７）年度より㈶大阪府文化財調査研究センターが㈶大阪府埋蔵文化財協会の事業を引き継ぎ、粟生岩阪遺跡の調査を行った。この調査では主として近世の炭窯と、近世～現代水田跡を検出した。1996（平成８）年度には、それより北東約0.2km に位置する粟生岩阪北遺跡で発掘調査が行われた。確認された遺構には近現代の水田とそれに伴う柱穴列、時期は不明であるが焼土坑や炭溜まり土坑をはじめとする土坑がある。また水田造成に伴う整地層に白磁・青磁・須恵器・瓦器など古代から中世にかけての遺物が多く含まれていたことから、遺跡の近辺にこの時期の集落が存在している可能性が高いことがわかった。以上の調査成果から当該地域における古代から中世にかけての集落の変遷や、近世における山間部開発の実態が徐々に明らかになりつつある。


Y=－43,200
X=－128,000
X=－128,000
Y=－43,200
95
90
85
80
100
N
川合渓川
0
(1：3000)
100m
1994年度調査地
1996年度調査地

第2図　調査区位置図

第２章　調査の方法

調査面積は20,045m²を測り、表土・近現代の耕作土と床土・盛土を機械掘削の対象とし、それより下層の遺物包含層は層位毎に人力掘削を行った。なお本文では機械掘削終了面を第１面とし、上から順に面番号を付けた。層名は第１面から第２面までの層を第Ｉ層とし、以下は同様に層番号を付す。なおここでいう「層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、面から次の面までの堆積は土層観察の結果、分層されることがある。

遺構の平面実測はヘリコプターからのRC－10による空中写真測量図化と平板測量により、1/20・1/50・1/100・1/200のスケールで行った。また必要に応じて、遺物出土状況や断面実測図を作成した。区割りについては従来の㈶大阪文化財センターの地区割法を利用し、遺物の取り上げや遺構図の作成作業の基準ラインとした。これは国土座標系の第Ⅵ座標系（東経136度00分、北緯36度00分を原点とする・福井県越前岬付近）を使用したものであり、同一基準を利用することにより、絶対的な遺構の位置・遺物の出土地点を示すことができる。調査時にはこの座標系を利用して10×10＝100m²の方眼を設け、これを最小単位としてアルファベットの小文字と数字の組み合わせによる地区名を付け、位置を示した。方位は地区割りと同様に国土座標に則り、座標北を使用した。

標高の記載はすべてＴ.Ｐ.（東京湾平均海面）を基準としている。なおＴ.Ｐ.と大阪湾平均海面（Ｏ.Ｐ.）とは、Ｔ.Ｐ.＋0.0m＝Ｏ.Ｐ.＋1.3mの関係にある。

次に出土遺物の取り扱いについて説明する。遺構から出土した遺物は遺構毎に取り上げたが、包含層から出土したものは地区ごとに取り上げた。遺物は出土した層位ないし遺構検出面、地区と出土年月日を記入したラベルと共に取り上げ、洗浄・マーキング作業を行い、登録番号を付け、必要なものに関しては実測図を作成したうえで、㈶大阪府文化財調査研究センター北部調査事務所にて保管している。

第３章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　地理的環境

徳大寺遺跡は大阪府北部の茨木市北西部・箕面市東部に位置する粟生・宿久庄地域に所在する。千里丘陵と北摂山脈南麓の老ノ坂山地に挟まれた谷・尾根の入り組んだ谷底平野部に位置している。丘陵の西側には川合裏川が流れており、すぐ南で安威川の支流の一つである勝尾寺川と合流している。調査地の標高は平地部分がＴ.Ｐ.65m、丘陵頂部がＴ.Ｐ.85m である。

川合裏川を挟んで西側には旧石器時代から中世までの複合遺跡である粟生間谷遺跡が所在しており、古代・中世の掘立柱建物や火葬墓などの遺構が検出されている。

第２節　歴史的環境

旧石器時代　茨木市域では山麓部の初田遺跡、丘陵裾部の太田遺跡・耳原遺跡・郡遺跡・東奈良遺跡などで表面採集や後世の遺物包含層中からナイフ形石器・有舌尖頭器が単独ないし数点発見されている。

箕面市域では稲遺跡・粟生間谷遺跡・庄田遺跡などでナイフ形石器や翼状剥片が出土している。

縄文時代　茨木市域では近年遺物の出土している遺跡が増加してきており、東奈良遺跡では前期末の大歳山式やＣ字爪形文土器、晩期後半の大洞Ａ式の浮線文土器や船橋式と長原式の深鉢片、石棒が出土している。また郡遺跡では石刀が出土している。山麓部でも初田遺跡・西福井遺跡・太田遺跡で土器が採取されている。遺構の検出されている遺跡には耳原遺跡と牟礼遺跡がある。耳原遺跡では晩期の滋賀里Ⅲ式期から長原式期までの甕棺墓16基が検出されている。牟礼遺跡では自然流路および井堰・水田が検出され、自然流路からは晩期（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式・船橋式・長原式）の土器が出土している。

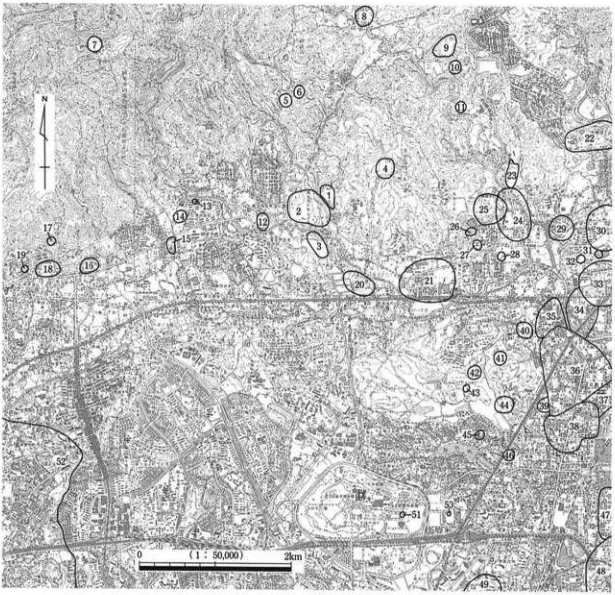
箕面市域では粟生奥・粟生間谷遺跡・庄田遺跡で有舌尖頭器や石鏃・石匙などが出土している。

弥生時代　茨木市域では前期に低湿地に近い東奈良遺跡・目垣遺跡が形成され、前期末には耳原遺跡・郡遺跡にも集落が形成される。特に東奈良遺跡は高槻市安満遺跡と同じく北摂地域における代表的な拠点集落であり、銅鐸鋳型の出土により中期後半には青銅器生産が行われていたことが判明している。東奈良遺跡で出土した鋳型から作られた銅鐸は、兵庫県豊岡市気比３号銅鐸と大阪府豊中市桜塚銅鐸・香川県善通寺市我拝師山銅鐸（後の２個は同氾銅鐸）の３個が現在見つかっている。

中期および後期になると主要河川（安威川・佐保川・勝尾寺川）の両側、丘陵部、山間部などに新たに集落が形成され、遺跡数の急増が認められる。また東奈良遺跡や郡遺跡などの拠点集落では、周囲に小規模な集落が形成される。新たに形成される集落としては見付山遺跡・太田遺跡・溝咋遺跡や、高地性集落である石堂ヶ丘遺跡などがある。また東奈良遺跡の周囲には中条小学校遺跡、郡遺跡の周囲には中河原遺跡・倍賀遺跡・春日遺跡などが存在している。

箕面市域では弥生時代の遺跡が少なく、箕面川左岸の池ノ内遺跡から中期後半の土器が整地層から出土している。また如意谷遺跡から突線紐式銅鐸が出土している。銅鐸は他にも吹田市の山田から外縁付紐式銅鐸が出土している。

古墳時代　古墳時代の遺跡は山麓部と千里丘陵の裾部に多く築造されている古墳と集落遺跡とに分けられる。古墳は前期古墳としては紫金山古墳・将軍山古墳が相次いで築造される。両古墳とも全長約100m



1．**徳大寺遺跡**
2．粟生間谷遺跡
3．庄田遺跡
4．宿久庄北遺跡
5．粟生岩阪遺跡
6．粟生岩阪北遺跡
7．勝尾寺
8．佐保遺跡
9．佐保栗栖山砦跡
10．栗栖山南中世墓群
11．福井北古墳群
12．粟生間谷大日遺跡
13．粟生奥有舌尖頭器出土地
14．善福寺原城跡
15．外院遺跡
16．白島遺跡
17．如意谷中世石組遺構
18．坊島遺跡
19．如意谷遺跡
20．宿久庄西遺跡
21．宿久庄遺跡
22．安威古墳群
23．福井城跡
24．西福井遺跡
25．新屋古墳群
26．紫金山古墳
27．南塚古墳
28．海北塚古墳
29．将軍山古墳群
30．安威遺跡
31．耳原古墳
32．鼻摺古墳
33．耳原古墳
34．五日市遺跡
35．中河原遺跡
36．郡遺跡
37．倍賀遺跡
38．春日遺跡
39．穂積廃寺跡
40．郡山遺跡
41．郡山古墳群
42．地蔵池南遺跡
43．茨木ゴルフ場内窯跡
44．弁天山遺跡
45．松沢池北遺跡
46．上寺山古墳
47．中条小学校遺跡
48．東奈良遺跡
49．新芦屋遺跡
50．山田銅鐸出土地
51．白頭瓦窯跡
52．桜井谷窯跡

第3図　徳大寺遺跡と周辺遺跡分布図

程の前方後円墳である。紫金山古墳の竪穴式石室からは鏡12面・直弧文の刻まれた貝輪・碧玉製腕飾類・翡翠製勾玉・筒形銅器、鉄鏃・鉄刀・短甲等の武具、斧・鉋などの工具といった多種多様な副葬品が出土している。続いて前期末には直径約10m の円墳である安威０号墳、および全長約45m 程の前方後円墳である安威１号墳が築造される。中期には前方後円墳である太田石山古墳・太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵）が築造される。後期になると茨木市内で最も早く横穴式石室を導入した青松塚古墳をはじめとして南塚古墳・海北塚古墳・耳原古墳、カマド塚である上寺山古墳などが単独で築かれる。また山麓部を中心として横穴式石室を主体とする新屋古墳群・安威古墳群・将軍山古墳群などの群集墳が出現する。後期末から終末期にかけては初田古墳・阿武山古墳が築造される。近年平地部の駅前遺跡・郡遺跡・春日遺跡、段丘上の総持寺遺跡などで墳丘を削平された埋没古墳が多数検出されている。

集落遺跡としては東奈良遺跡・中条小学校遺跡・宿久庄遺跡・倍賀遺跡・郡遺跡・溝咋遺跡などがある。東奈良遺跡では古墳時代初頭に大溝が掘削され、溝咋遺跡でも古墳時代初頭の集落と水田が検出されている。また須恵器を焼成するための窯の代表的なものとして千里古窯跡群がある。主に豊中市域の桜井谷窯跡群と吹田市域の吹田窯跡群によって構成されている。茨木市内では茨木ゴルフ場内で窯跡が発見されている。

奈良・平安時代　それまで三嶋郡と呼ばれていた北摂地域は律令の施行された頃より嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の三郡に分割された。徳大寺遺跡の所在する辺りは嶋下郡宿人（久）郷に所属する。嶋下郡には他に新野・安威・穂積の三郷があり、全体で四郷から成っていた。嶋下郡の郡衙は地名と旧山陽道（西国街道）との位置関係より郡遺跡周辺にあったと推定されており、近年の調査で奈良～平安時代にかけての掘立柱建物が検出されている。この時期の掘立柱建物は他に東奈良遺跡・宿久庄遺跡・総持寺遺跡・新庄遺跡などで検出されている。特に新庄遺跡では、緑釉陶器・越州窯系青磁・小型滑石製地鎮具が出土している。また太田廃寺・穂積廃寺・三宅廃寺などの寺院が造立されている。特に太田廃寺からは明治40（1907）年に舎利容器一具を納めた塔心礎・複子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。

箕面市域では粟生間谷遺跡において奈良～平安時代にかけての集落が検出され、約50個の鉛ガラス製の玉と有機物を収めた奈良三彩小壺を埋納した地鎮遺構が検出されている。庄田遺跡においても奈良時代の掘立柱建物が検出されている。平安時代には、勝尾寺と総持寺・忍頂寺が建立されている。

中世　茨木市内には摂関家領およびその氏寺・氏神である興福寺領・春日社領が多く、福井庄・安井庄（安威）・沢良宣庄・新星庄・溝杭庄・垂水東牧などが存在した。摂関家領以外には仁和寺領忍頂寺辺五ヶ庄・造酒司領太田保・長講堂領溝杭庄・総持寺領寺辺領・中宮式領宿久庄などがある。遺跡としては総持寺遺跡・宿久庄遺跡・東奈良遺跡・玉櫛遺跡・葦分神社東方遺跡などで掘立柱建物や井戸などが検出されている。特に玉櫛遺跡からは井戸や掘立柱建物が検出されるとともに、木製品・漆器・和鏡や多量の土器も出土している。近年茨木川左岸において遺跡の発見が相次いでおり、平安時代から中世にかけての様相が明らかになってきている。集落以外の遺跡としては山間部に栗栖山南中世墓群・伏原中世墓地などが点在している。

箕面市域では粟生間谷遺跡・坊島遺跡などで掘立柱建物が検出されており、また山間部の小畑遺跡で墓地群が検出されている。

中世は戦乱の相次いだ時代であり、北摂地域にも多くの城や砦が築かれている。山間部では泉原城・佐保栗栖山砦・善福寺原城などの山城、平地部には太田城や福井城などが築造されている。中世末から

近世にかけては茨木川左岸に茨木城が築造された。城主には中川清秀・片桐且元らがいる。この城は周辺の芥川城・高槻城・池田城・伊丹（有岡）城などとともに北摂地域において拠点的な城であった。しかし、元和元（1616）年の一国一城令によって廃城となり現在に至っており、本格的な発掘調査が行われていないため正確な縄張りも判明していない幻の城となっている。

近世　江戸時代になると交通の急速な発達に伴って庶民の間で西国三十三所巡礼が盛んとなった。北摂には、第二十二番札所である総持寺、第二十三番札所である勝尾寺がある。

遺跡名となっている徳大寺は、総持寺から勝尾寺へと向かう道沿いに所在した黄檗宗寺院である。慶長10（1605）年の『摂津国絵図』に「徳大寺村」と記されていることから近世初頭には存在していたと考えられる。もとは勝尾寺の行願上人開設の真言宗寺院であったと『寺院舊記帳』に記されている。この史料は再興後120年後のものであり、近世初頭以前にも存在していたと言えるわけではない。近世初頭以前の史料が存在していないため実態は不明である。その後『寺院舊記帳』『仏国大僊禅師語録』によると萬福寺の僧了翁によって元禄８（1695）年～10（1698）年にかけて再興されたことがわかる。敷地は、『寺院舊記帳』他の文書に「東西百六間、南北七拾間」と記されている。再興時に建立された建物は方丈、寮舎であった。また鐘楼を建立し、径三尺五寸の鐘を鋳造して納めたとされる。敷地内の建物の種類・規模は明和６（1769）年・天保９（1818）年・慶応４（1868）年の各年に寺院境内建物の御改帳や書上帳として記録されている。観音堂、祖師堂、庫裏、釣鐘堂が基本的な建物で、一部が廊下でつながっていたようである。しかし、寺院の経営は徐々に悪化していき、最後には留守番として入った尼僧とその弟子が慶応３（1867）年に物盗によって殺害されるという事件が起こる。そして無住の寺となってしまい、明治４（1871）年に閉寺願いが高槻県に提出されて閉寺された。調査前には歴代住持の墓石のみが残されていた。

参考文献

1968　『茨木市史』

1990　『平成元年度発掘調査概報』茨木市教育委員会

1992　『平成３年度発掘調査概報』茨木市教育委員会

1993　『倍賀遺跡発掘調査概要報告書－平成４年度発掘調査概報－』茨木市教育委員会

1995　『葦分神社東方遺跡発掘調査概要報告書』茨木市教育委員会

1996　『新庄遺跡』大阪府教育委員会

1996　『粟生岩阪遺跡』財団法人　大阪府文化財調査研究センター

1996　『発掘速報展　大阪'96』財団法人　大阪府文化財調査研究センター

1997　『発掘速報展　大阪'97』財団法人　大阪府文化財調査研究センター

1998　『発掘速報展　大阪'98』財団法人　大阪府文化財調査研究センター

1998　『玉櫛遺跡』財団法人　大阪府文化財調査研究センター

1998　井藤暁子「黄檗宗了翁禅師再興の近世寺院『徳大寺』の歴史調査」『黄檗文華117号』

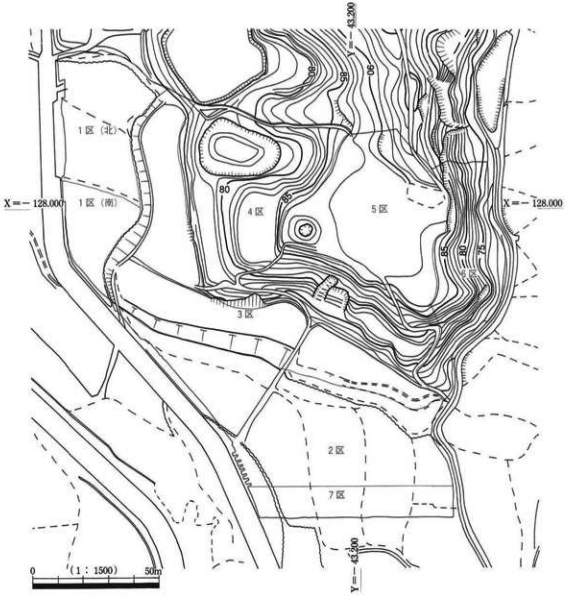
1998　『栗栖山南中世墓群の調査』財団法人　大阪府文化財調査研究センター

第４章　調査成果

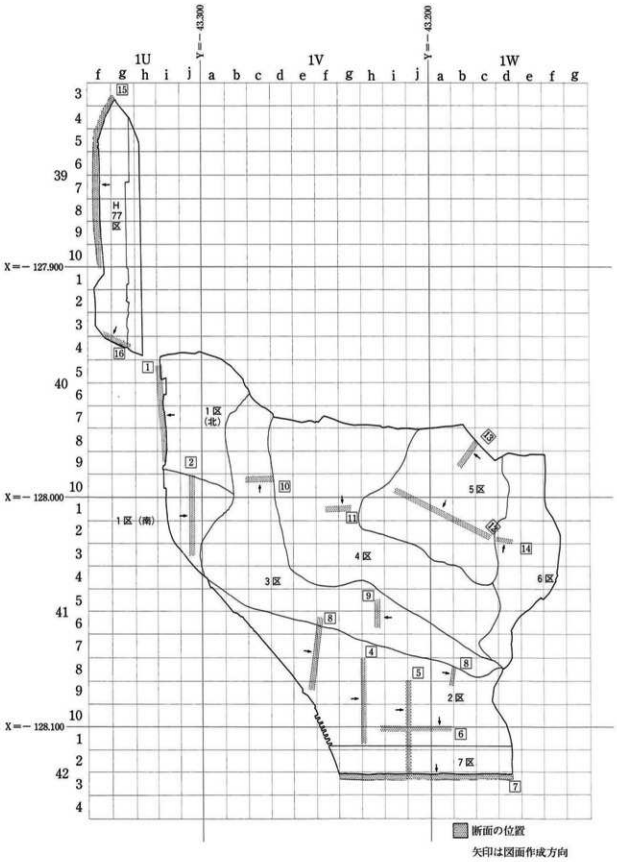
第１節　基本層序と調査概要

本遺跡は大阪府北部の茨木市北西部・箕面市東部に位置する粟生・宿久庄地域に所在し、千里丘陵と北摂山脈南麓の老ノ坂山地に挟まれた谷・尾根の入り組んだ谷底平野部に位置する。今回の調査は南北にのびる丘陵の南端部と、その西側および南側に広がる水田部分を対象として行った。

丘陵頂部の平坦部分に相当する５区では、表土とその下層の整地層をはいだ段階で、遺構が集中する黄灰色のベース面を検出した。４・６区は丘陵頂部に連なる斜面に相当する。南側と東側の斜面は急傾斜のため、所々に崖崩れの明確な痕跡が認められ、頻繁に地形変化が起こったことがわかる。３区は斜面裾部に造成された棚田に相当する部分で、後世の土地改変による影響を大きく受けている。１区・２



第４図　調査区区割図



第５図　調査区の地区割と断面位置図

区・7区・H77区では現代の水田耕作土の下から近世の遺物を多く含む、整地層を伴う水田耕作土層を認めた。さらにその下層には古代末～中世の遺物を含む包含層の堆積が認められる部分があり、ベース面上に堆積する土層は3層に大別できる。

1区（第6図）

水田耕作土および整地土の下から、東西方向ないし南北方向を指向して複雑に蛇行する流路を検出した。1区の北東にある貯水池との位置関係でみると、もとは丘陵の西側に谷が食い込んでいたらしく、それがやがて崩落土や流水の堆積作用などで徐々に埋まり、最終的に流路が残された状況が検出されたと考える。一方、より浸食の深い部分では谷が埋まりきらずに残り、それが後世に貯水池として利用されたと考える。

当調査区内での土地利用の推移を概観すると、中世後半ないし近世前葉の段階まではそれほど大きな土地改変が認められないとともに、流路周辺が居住域として利用された形跡もない。近世以降の水田開発に伴って盛土が施され、現在とほぼ同じ地形になったと考える。遺構はベース面で流路とピット、棚田造成時に設置された土留めの杭の痕跡、暗渠を検出した。

第Ⅰ層　整地土を伴う近世～現代の耕作土と床土。

第Ⅱ層　中・近世の遺物を含むシルト包含層。

第Ⅲ層　ベース土、主に黄褐色の微砂～シルト、もしくはオリーブ灰色の細砂からなる。

2区・7区（第7・8図）

調査以前は水田として利用されており、丘陵の東側をほぼ南北方向にはしる谷水田や川合裏川沿いの水田と一連のものとして造成されたと考えられる。遺構は古代末から中世の遺物を多く含む包含層の上面、およびベース面で検出したが、前者で検出したのは東西もしくは南北方向の鋤溝の痕跡で、主要な遺構は全て後者で検出した。検出した遺構の中で、丘陵裾部の傾斜変換点付近で検出した鋳造土坑とその周囲のピット群や土坑・炭窯が特筆される。

第Ⅰ層　近・現代の耕作土と床土。

第Ⅱ層　近世の遺物を多く含む、整地土を伴う耕作土と床土からなる。耕作土と床土を1つのセットとすると、それが3～4セット伴う互層となっている。

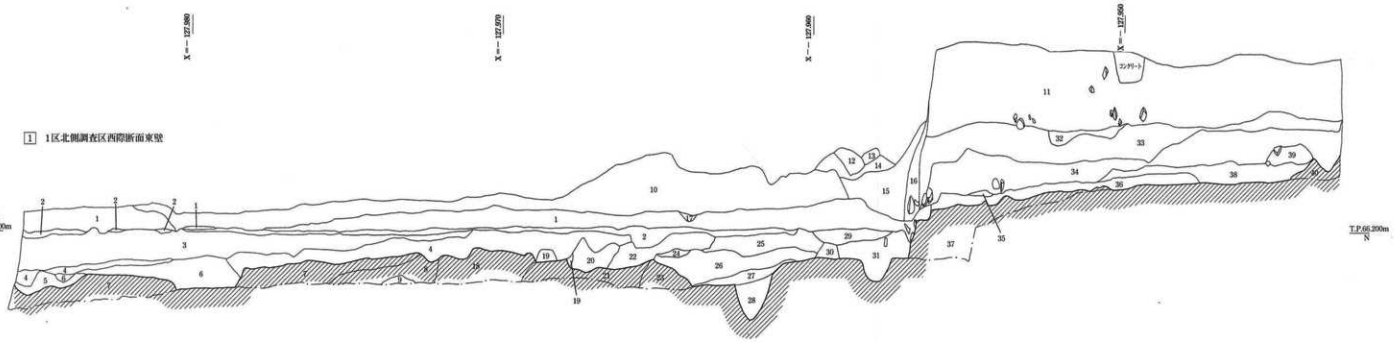
第Ⅲ層　古代末から中世（10世紀後半から11世紀前半）の遺物を多く含む包含層。陶磁器・土師器・瓦器の他、第Ⅲ層除去後に検出した鋳造土坑に関連する溶解炉・羽口の破片や鉱滓も含む。

第Ⅳ層　ベース土、主に黄褐色の微砂～シルトからなる

3区（第9・10図）

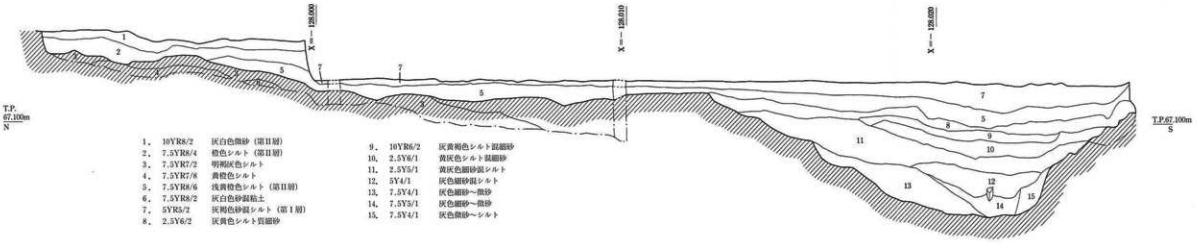
丘陵斜面裾部に取りつくように設けられた矩形の棚田部分に相当する。遺構は主に丘陵南側の、棚田が東西方向に取りつく部分で検出した。棚田の造成以前は、丘陵頂部から連なる斜面の緩傾斜部分で、山側を削平して若干の平坦部を造りだしていた。棚田造成以前の時期の遺構は、概ねその平坦部で検出している。主な成果として、周囲のベース土を掘り込んでマウンド状の高まりを残した部分から、鍛冶炉・集石ピット・埋土に焼土や炭化物を含む土坑などを集中して検出した他、埋土に備前焼の大甕破片を多量に含んだ土坑がある。また4区斜面に近接する部分で近世の墓と思われる数基の土坑を検出して

1 1区北側調査区西隅断面東壁



1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂混粘土（第Ⅰ層）
2. 7.5YR6/6 橙色微砂（第Ⅰ層）
3. 2.5Y5/1 黄灰色シルト（第Ⅱ層）
4. 5Y5/2 灰オリーブ色微砂（第Ⅱ層）
5. 10Y6/1 灰色微砂（第Ⅱ層）
6. 10YR6/1 褐灰色細砂（第Ⅱ層）
7. 2.5Y3/3 黄褐色粘土
8. 10YR4/4 褐色砂混シルト
9. 2.5Y4/1 黄灰色微砂
10. 2.5Y5/6 黄褐色微砂（第Ⅰ層）
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混細砂（現代の耕作土）
12. 5Y4/2 灰オリーブ色微砂（攪乱）
13. 7.5Y5/1 灰色シルト（攪乱）
14. 10GY5/1 緑灰色微砂（攪乱）
15. 2.5Y3/1 黒褐色微砂（攪乱）
16. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂混シルト（攪乱）
17. 10Y3/1 オリーブ黒色微砂
18. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂混シルト
19. 10Y6/1 灰色微砂（第Ⅱ層）
20. 7.5Y5/8 明褐色シルト（第Ⅱ層）
21. 5Y5/3 灰オリーブ色微砂
22. 5Y6/1 灰色微砂
23. 10GY4/1 暗緑灰色微砂
24. 10YR6/1 褐灰色微砂（第Ⅱ層）
25. 10Y4/1 灰色微砂（第Ⅱ層）
26. 10YR7/6 明黄褐色細砂（第Ⅱ層）
27. 5Y6/1 灰色粗砂（第Ⅱ層）
28. 10YR5/1 褐灰色細砂（第Ⅱ層）
29. 5BG5/1 青灰色砂混粘土（第Ⅱ層）
30. 10Y4/1 灰色シルト（第Ⅱ層）
31. 5G6/1 緑灰色極微砂（第Ⅱ層）
32. 5Y6/1 灰色シルト混細砂（第Ⅰ層）
33. 5BG5/1 青灰色粘土（第Ⅰ層）
34. 10BG5/1 青灰色砂混粘土（第Ⅰ層）
35. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色砂混シルト（第Ⅰ層）
36. 5BG4/1 暗青灰色微砂（第Ⅱ層）
37. 2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂
38. 10Y5/1 灰色砂混シルト（第Ⅱ層）
39. 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト混細砂（第Ⅱ層）
40. 5BG6/1 青灰色砂混粘土

2 1区1V－41　aラインから西へ5m西壁



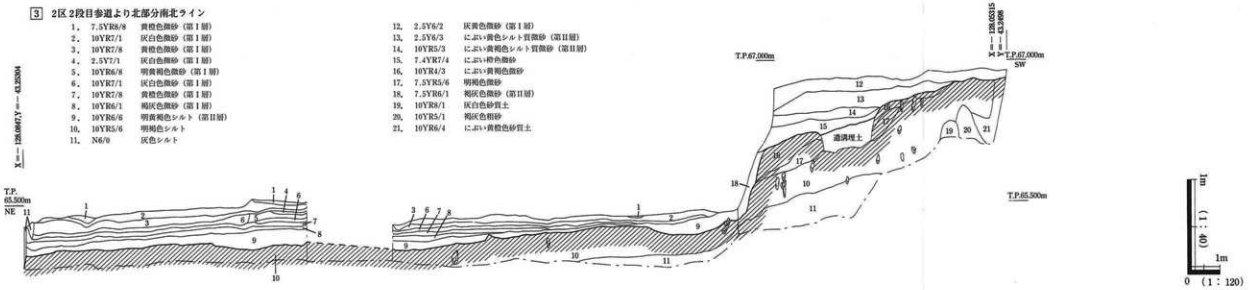
1. 10YR8/2 灰白色微砂（第Ⅱ層）
2. 7.5YR8/4 橙色シルト（第Ⅱ層）
3. 7.5YR7/2 明褐灰色シルト
4. 7.5YR7/8 黄橙色シルト
5. 7.5YR8/6 浅黄橙色シルト（第Ⅱ層）
6. 7.5YR8/2 灰白色砂混粘土
7. 5YR5/2 灰褐色砂混シルト（第Ⅰ層）
8. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質細砂
9. 10YR6/2 灰黄褐色シルト混細砂
10. 2.5Y6/1 黄灰色シルト混細砂
11. 2.5Y5/1 黄灰色細砂混シルト
12. 5Y4/1 灰色細砂混シルト
13. 7.5Y4/1 灰色細砂～微砂
14. 7.5Y3/1 灰色細砂～微砂
15. 7.5Y4/1 灰色微砂～シルト

1m (1：40)
1m
0 (1：120)

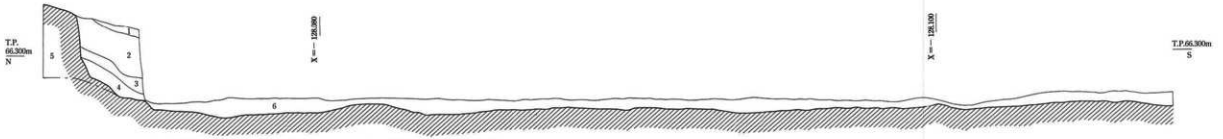
第6図　1区土層断面図

3 2区2段目参道より北部分南北ライン

1. 7.5YR6/8 黄橙色微砂（第Ⅰ層）
2. 10YR7/1 灰白色微砂（第Ⅰ層）
3. 10YR7/8 黄橙色微砂（第Ⅰ層）
4. 2.5Y7/1 灰白色微砂（第Ⅰ層）
5. 10YR6/8 明黄褐色微砂（第Ⅰ層）
6. 10YR7/1 灰白色微砂（第Ⅰ層）
7. 10YR7/8 黄橙色微砂（第Ⅰ層）
8. 10YR6/1 褐灰色微砂（第Ⅰ層）
9. 10YR6/6 明黄褐色シルト（第Ⅱ層）
10. 10YR5/6 明褐色シルト
11. N6/0 灰色シルト
12. 2.5Y6/2 灰黄色微砂（第Ⅰ層）
13. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質微砂（第Ⅱ層）
14. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質微砂（第Ⅱ層）
15. 7.4YR7/4 にぶい橙色微砂
16. 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂
17. 7.5YR5/6 明褐色微砂
18. 7.5YR6/1 褐灰色微砂（第Ⅱ層）
19. 10YR8/1 灰白色砂質土
20. 10YR5/1 褐灰色粘砂
21. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質土

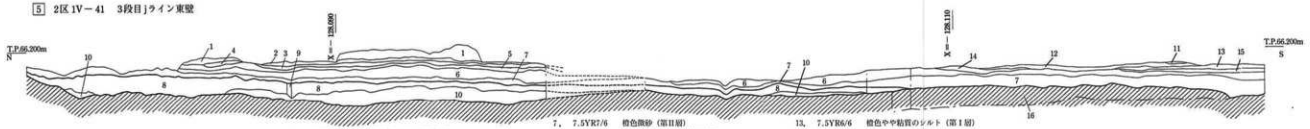


4 2区1V－41 2段目hライン東壁



1. 10YR6/3 にぶい黄色砂（第Ⅰ層）
2. 10YR6/2 灰黄褐色砂（第Ⅱ層）
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂（第Ⅱ層）
4. 10YR5/1 褐灰色砂（第Ⅱ層）
5. 10YR5/6 黄褐色砂
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂（第Ⅱ層）

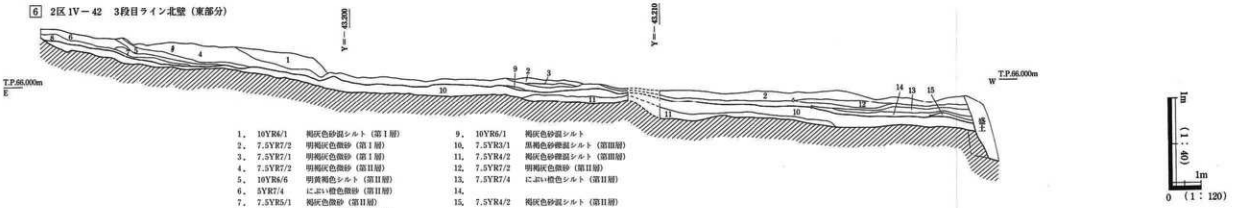
5 2区1V－41 3段目jライン東壁



1. 5YR7/2 明褐灰色シルト（第Ⅰ層）
2. 5YR7/8 橙色シルト（第Ⅰ層）
3. 7.5YR6/1 明褐灰色シルト（第Ⅰ層）
4. 10YR5/1 褐灰色シルト（第Ⅰ層）
5. 7.5YR7/8 黄橙色微砂（第Ⅰ層）
6. 7.5YR7/2 明褐灰色微砂（第Ⅱ層）
7. 7.5YR7/6 橙色微砂（第Ⅱ層）
8. 7.5YR3/1 黒褐色砂混シルト（第Ⅲ層）
9. 7.5YR4/3 褐色砂混シルト（第Ⅲ層）
10. 7.5YR4/2 黒褐色砂混シルト（第Ⅲ層）
11. 7.5YR5/6 明褐色やや粘質のシルト（第Ⅰ層）
12. 10YR5/4 にぶい黄褐色やや粘質のシルト（第Ⅰ層）
13. 7.5YR6/6 橙色やや粘質のシルト（第Ⅰ層）
14. 10YR5/6 黄褐色粘土（第Ⅰ層）
15. 10YR5/3 にぶい黄褐色やや粘質のシルト（第Ⅰ層）
16. 10YR4/4 褐色やや粘質のシルト

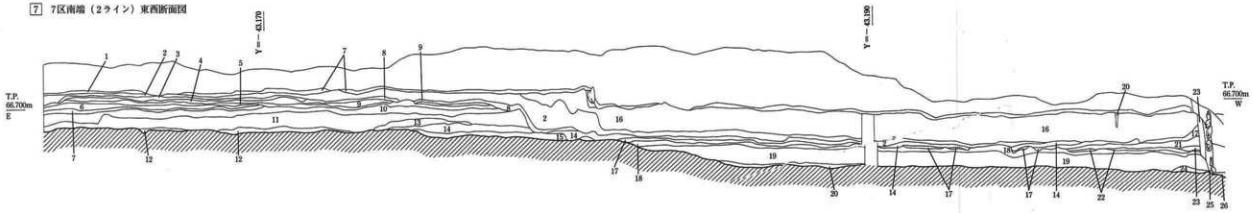
第7図 2区土層断面図

6 2区 IV－42 3段目ライン北壁（東部分）

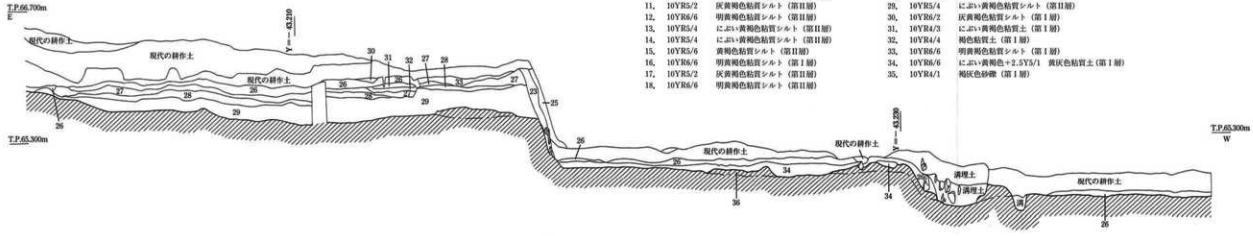


1.	10YR6/1	褐灰色砂質シルト（第Ⅰ層）	9.	10YR6/1	褐灰色砂質シルト
2.	7.5YR7/2	明褐灰色微砂（第Ⅰ層）	10.	7.5YR3/1	黒褐色砂礫質シルト（第Ⅲ層）
3.	7.5YR7/1	明褐灰色微砂（第Ⅰ層）	11.	7.5YR4/2	褐灰色砂礫質シルト（第Ⅲ層）
4.	7.5YR7/2	明褐灰色微砂（第Ⅱ層）	12.	7.5YR7/2	明褐灰色微砂（第Ⅱ層）
5.	10YR6/6	明黄褐色シルト（第Ⅱ層）	13.	7.5YR7/4	にぶい橙色シルト（第Ⅱ層）
6.	5YR7/4	にぶい橙色微砂（第Ⅱ層）	14.		
7.	7.5YR5/1	褐灰色微砂（第Ⅱ層）	15.	7.5YR4/2	褐灰色砂質シルト（第Ⅲ層）
8.	5YR6/4	にぶい橙色微砂（第Ⅱ層）			

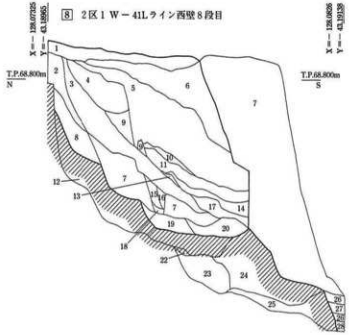
7 7区南端（2ライン）東西断面図



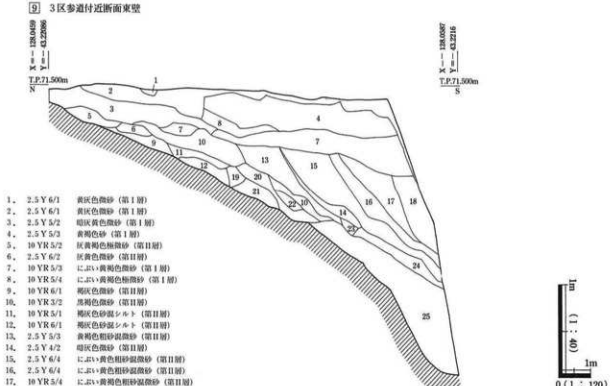
1.	10YR6/6	明黄褐色粘質シルト	19.	10YR4/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）
2.	10YR6/2	灰黄褐色粘質シルト	20.	10YR5/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）
3.	7.5YR5/3	にぶい褐色粘質シルト	21.	10YR6/1	褐灰色粘質シルト（第Ⅱ層）
4.	10YR6/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	22.	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）
5.	10YR6/6	明黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	23.	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質砂（第Ⅱ層）
6.	10YR6/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	24.	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）
7.	10YR6/8	明黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	25.	10YR4/2	灰黄褐色粘質砂（第Ⅱ層）
8.	10YR6/6	明黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	26.	10YR6/6	明黄褐色粘質シルト（第Ⅰ層）
9.	10YR6/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	27.	10YR6/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅰ層）
10.	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	28.	7.5YR5/3	にぶい褐色粘質シルト（第Ⅰ層）
11.	10YR5/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	29.	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）
12.	10YR6/6	明黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	30.	10YR6/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅰ層）
13.	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	31.	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土（第Ⅰ層）
14.	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	32.	10YR4/4	褐色粘質土（第Ⅰ層）
15.	10YR5/6	黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	33.	10YR6/6	明黄褐色粘質シルト（第Ⅰ層）
16.	10YR6/6	明黄褐色粘質シルト（第Ⅰ層）	34.	10YR6/6	にぶい黄褐色＋2.5Y5/1 黄灰色粘質土（第Ⅰ層）
17.	10YR5/2	灰黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）	35.	10YR4/1	褐灰色砂礫（第Ⅰ層）
18.	10YR6/6	明黄褐色粘質シルト（第Ⅱ層）			



第8図 2区・7区土層断面図

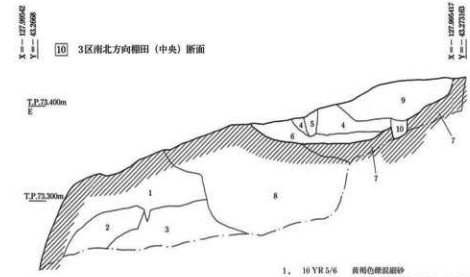


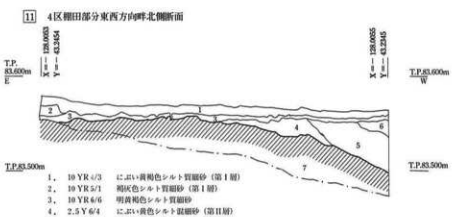
1、 7.5YR6/8 黄橙色微砂（第Ⅰ層）
2、 7.5YR6/8 黄橙色シルト（第Ⅱ層）
3、 7.5YR6/6 橙色シルト（第Ⅱ層）
4、 5YR4/3 にぶい褐色微砂（第Ⅱ層）
5、 7.5YR4/4 褐色砂質シルト（第Ⅱ層）
6、 5YR7/8 橙色シルト（第Ⅱ層）
7、 N7/0 灰白色シルト（第Ⅰ層）
8、 2.5YR5/3 黄褐色シルト質微砂（第Ⅱ層）
9、 5YR6/4 にぶい橙色シルト（第Ⅱ層）
10、 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト（第Ⅱ層）
11、 7.5YR4/3 褐色シルト（第Ⅱ層）
12、 10YR5/4 にぶい褐色粗砂混シルト
13、 2.5YR5/6 明赤褐色シルト（第Ⅱ層）
14、 5YR5/8 明赤褐色砂質シルト（第Ⅱ層）
15、 10YR6/3 にぶい黄褐色微砂（第Ⅱ層）
16、 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（第Ⅱ層）
17、 5YR5/1 灰褐色シルト（第Ⅱ層）
18、 M6/0 灰色砂混シルト（第Ⅱ層）
19、 2.5YR5/2 暗灰黄色シルト（第Ⅱ層）
20、 N5/0 灰色シルト（第Ⅱ層）
21、 N7/0 灰色粘土
22、 5Y6/1 灰色砂混シルト
23、 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色粗砂混シルト
24、 10YR3/3 暗褐色砂混シルト
25、 2.5Y6/6 明黄褐色シルト
26、 5Y7/2 灰白色微砂
27、 5YR3/2 暗赤褐色微砂
28、 7.5YR6/1 褐灰色粗砂



1、 2.5Y6/1 黄灰色微砂（第Ⅰ層）
2、 2.5Y6/1 黄灰色微砂（第Ⅰ層）
3、 2.5Y5/2 暗灰黄色微砂（第Ⅰ層）
4、 2.5Y5/3 黄褐色砂（第Ⅰ層）
5、 10YR5/2 灰黄褐色微砂（第Ⅱ層）
6、 2.5Y6/2 灰黄色微砂（第Ⅱ層）
7、 10YR5/3 にぶい黄褐色微砂（第Ⅰ層）
8、 10YR5/4 にぶい黄褐色極微砂（第Ⅰ層）
9、 10YR6/1 褐灰色微砂（第Ⅱ層）
10、 10YR3/2 黒褐色微砂（第Ⅱ層）
11、 10YR5/1 褐灰色砂混シルト（第Ⅱ層）
12、 10YR6/1 褐灰色砂混シルト（第Ⅱ層）
13、 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
14、 2.5Y4/2 暗灰色微砂（第Ⅱ層）
15、 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
16、 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
17、 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
18、 10YR4/4 褐色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
19、 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
20、 2.5Y5/1 黄灰色極微砂（第Ⅱ層）
21、 2.5Y3/1 黄灰色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
22、 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
23、 10YR5/1 褐灰色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
24、 10YR4/1 褐灰色粗砂混微砂（第Ⅱ層）
25、 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混微砂（第Ⅱ層）

第9図　2区・3区土層断面図





第10図　3区・4区土層断面図

いることから、3区に多量の盛土を施し、平坦面を拡張して棚田とするようになったのは近世半ば以降のことと考えられる。

第Ⅰ層　近・現代の遺物を含む耕作土と床土。耕作土と床土を一つのセットとすると、それが2～3セット伴う互層となっている。

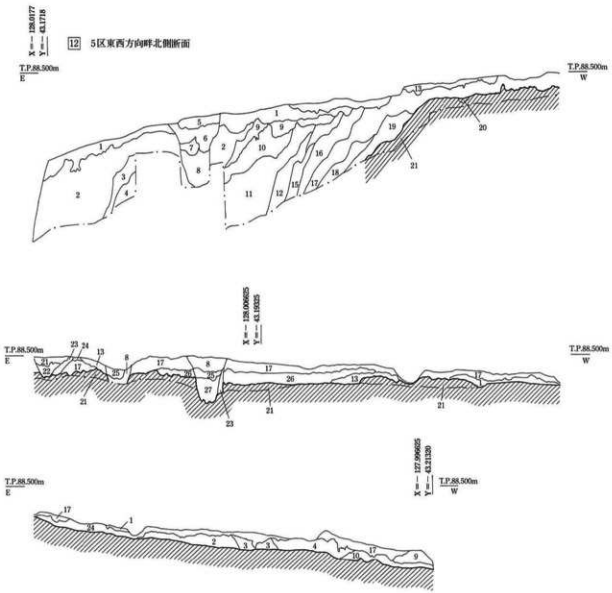
第Ⅱ層　棚田の造成に伴って盛土された整地土層。

第Ⅲ層　中世後半の陶磁器・土師器を多量に含む包含層。2区と接する斜面裾部に堆積する。

第Ⅳ層　ベース土、主に黄灰色のシルトからなる。

5区（第11・12図）

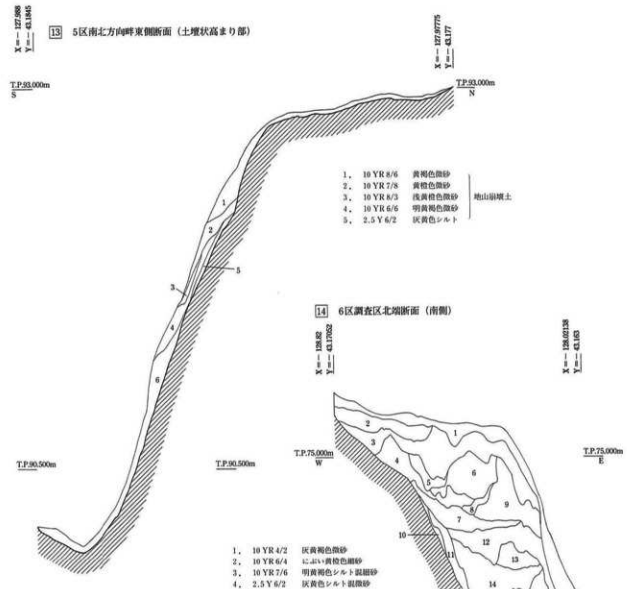
丘陵頂部の平坦面に相当する部分である。本来は調査区北側の、幅の狭い尾根筋と同様の地形であっ



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質微砂
2. 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂混シルト
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト混細砂
4. 10YR5/6 黄褐色細砂
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混微砂
7. 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂混シルト
8. 10YR5/3 にぶい黄灰色シルト混微砂
9. 10YR6/6 明黄褐色シルト
10. 10YR6/8 明黄褐色細砂混シルト
11. 10YR6/6 明黄褐色シルト混微砂
12. 2.5Y6/2 灰黄色微砂混シルト
13. 7.5YR3/2 黒褐色シルト質微砂
14. 2.5Y6/4 にぶい黄色微砂混シルト
15. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質微砂
16. 10YR6/4 にぶい黄灰色シルト質微砂
17. 10YR5/6 黄褐色微砂
18. 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂
19. 2.5YR6/4 にぶい黄色微砂
20. 10YR6/6 明黄褐色微砂
21. 2.5Y6/4 にぶい黄灰色シルト
22. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト混微砂
23. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂混シルト
24. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質微砂
25. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質微砂
26.
27. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混細砂

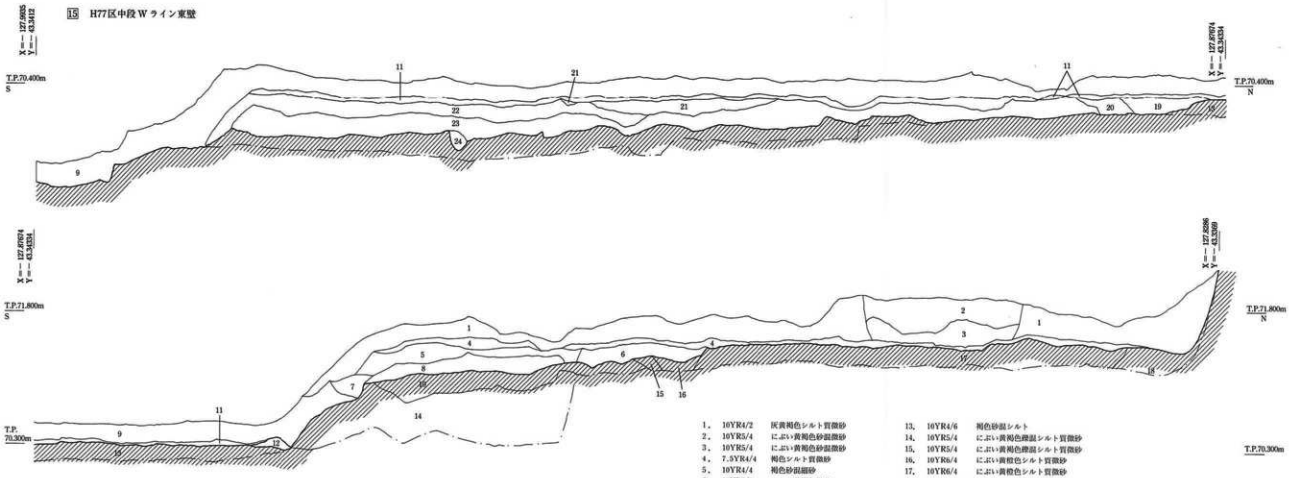
1m
(1:60)
1m
0
(1:120)

第11図　5区土層断面図



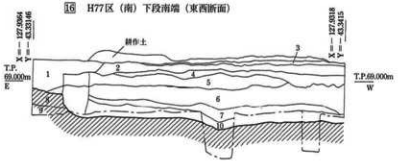
第12図　5区・6区土層断面図

15 H77区中段Wライン東壁

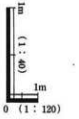


1.	10YR4/2	灰黄褐色シルト質微砂
2.	10YR5/4	にぶい黄褐色砂混微砂
3.	10YR5/4	にぶい黄褐色砂混微砂
4.	7.5YR4/4	褐色シルト質微砂
5.	10YR4/4	褐色砂混細砂
6.	10YR5/3	にぶい黄褐色微砂
7.	2.5Y5/2	暗灰黄色微砂
8.	10YR4/4	褐色シルト質微砂
9.	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト質微砂
10.	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト質微砂
11.	5YR5/8	明赤褐色砂礫混粘質土
12.	2.5Y3/2	黒褐色砂質土
13.	10YR4/6	褐色砂混シルト
14.	10YR5/4	にぶい黄褐色礫混シルト質微砂
15.	10YR5/4	にぶい黄褐色礫混シルト質微砂
16.	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト質微砂
17.	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト質微砂
18.	10YR5/6	黄褐色の風化した岩盤
19.	2.5Y4/2	暗灰黄色砂礫混砂質土
20.	2.5Y4/4	オリーブ褐色砂礫混土
21.	2.5Y5/3	黄褐色砂混シルト
22.	2.5Y5/6	オリーブ褐色粘質シルト
23.	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト
24.		

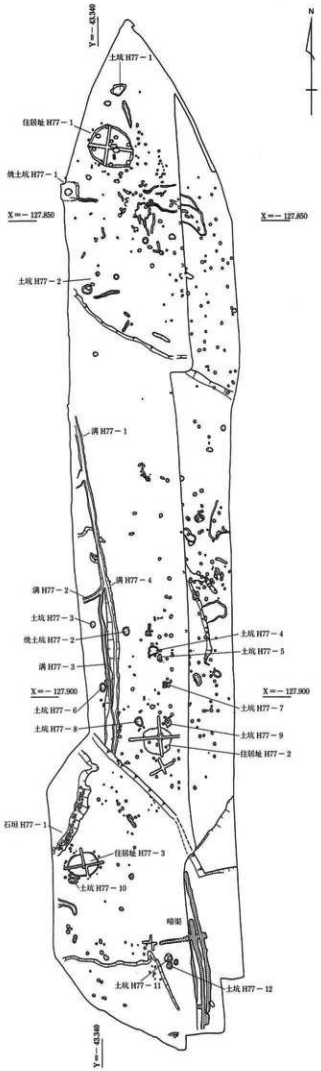
16 H77区（南）下段南端（東西断面）

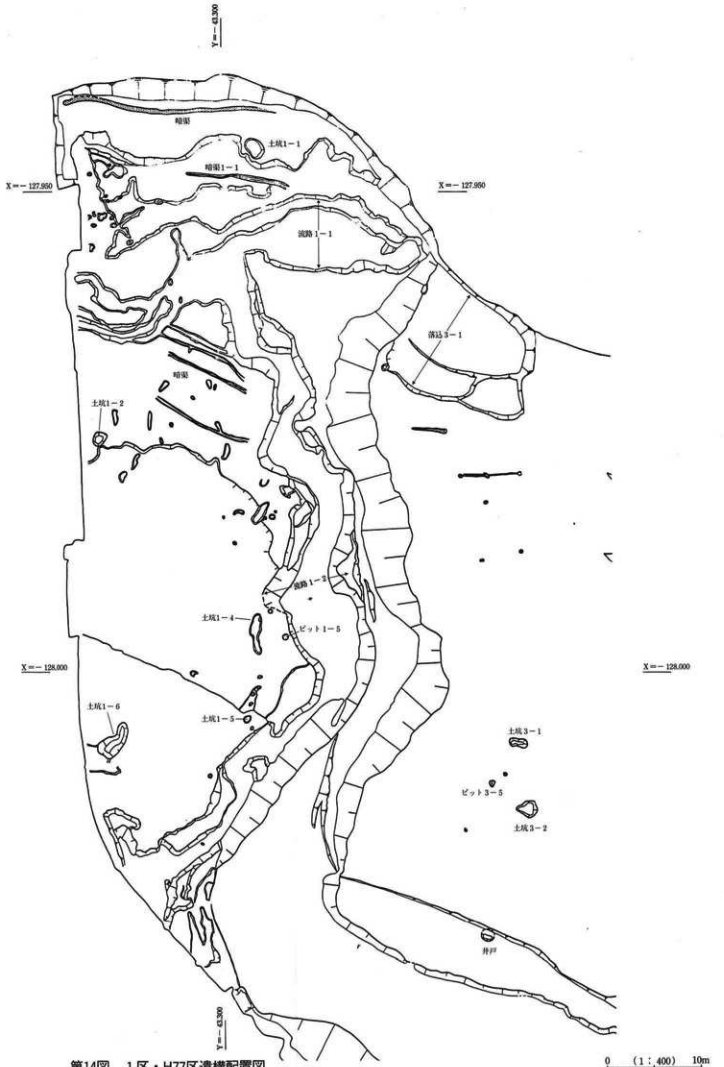


1.	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂礫混シルト
2.	2.5Y5/3	黄褐色砂礫混シルト
3.	7.5YR5/6	明褐色砂礫混シルト
4.	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂礫混シルト
5.	10YR5/3	にぶい黄褐色砂礫混シルト
6.	10YR4/2	灰黄褐色砂礫混シルト
7.	7.5YR5/8	明茶色＋10YR4/1 黄灰色砂礫混シルト
8.	2.5Y5.3	黄褐色砂礫混土
9.	2.5Y5/3	黄褐色粘質土
10.	10YR3/3	暗褐色砂礫混土



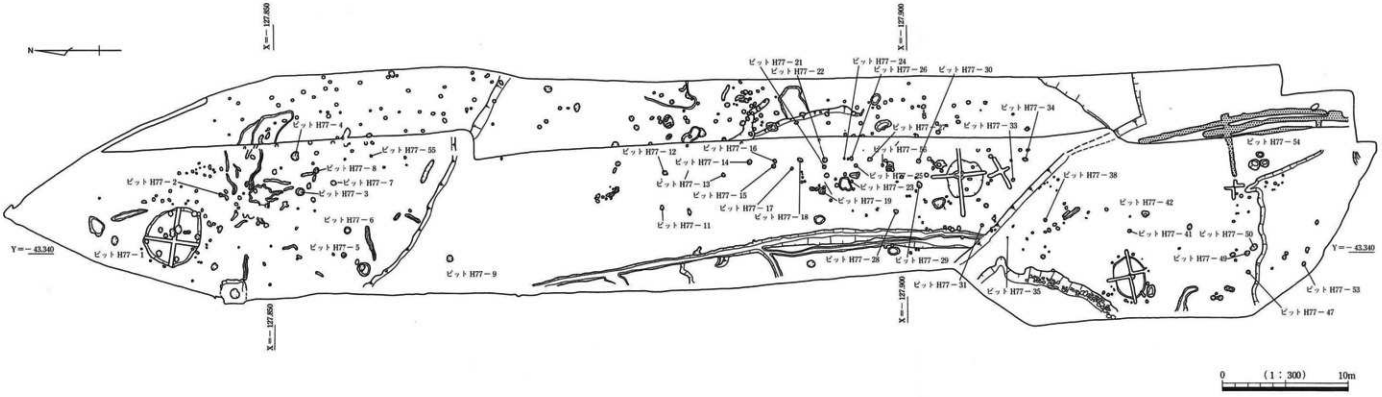
第13図　H77区土層断面図





第14図　1区・H77区遺構配置図

0　(1：400)　10m



第15図　H77区ピット配置図

たと考えられる。頂部を削平し、その土を谷状に窪んだ東西の斜面に盛土して平坦面を拡張しているのが確認できた。

徳大寺に関連すると考えられる近世の遺構は全てベース面で検出した。多数の土坑・ピットの他、円形もしくは方形に石組を施した土坑や、東西ないし南北方向を指向する溝を検出した。土坑の中には、棺材は残っていないものの土壙墓と考えられる遺構が含まれる。調査以前には戦後に行われた杉の植林に伴う碁盤の目状の溝が5区全域に広がっており、このような土地改変によって遺構面はかなり削平を受けたと考えられる。

第Ⅰ層　杉の植林によって土壌化した層および整地層。近世～現代の陶磁器・瓦を多く含む。

第Ⅱ層　ベース土、主に灰黄色のシルトからなる。

4区・6区（第10・12図）

4区西側斜面の棚田部分で、整地土層を除去した後に検出したベース面で土坑ないし溝を検出した他は、土留めの杭列もしくは石列を検出したのみである。当初、丘陵頂部の寺院へ取りつく参道の存在を予測していたが、崖斜面の後世の崩落のために消失したか、里道状の細い通路を利用していたと考えられ、それに相当する遺構は検出しなかった。

第Ⅰ層　土壌化層および崩落土。近・現代の陶磁器・瓦を多数含む。

第Ⅱ層　ベース土、主に灰黄色のシルトからなる。

H77区（第14・15図）

川合裏川によって開析された谷部に相当し、調査以前は棚田として利用されていた。そのため整地層を伴う耕作土・床土の堆積が全域で認められた。これらの層を除去した段階で、古代末～中世の遺物を多く含む包含層を部分的に認めた。遺構はその包含層の上面と、それを除去した後に検出したベース面で検出した。前者ではピットや鋤溝をわずかに検出したが、埋土に遺物を含むものはなかった。竪穴住居址・柱穴・土坑・溝・ピットといった主な遺構は全てベース面で検出した。

第Ⅰ層　近世ないし現代の水田耕作土と床土。

第Ⅱ層　近世の遺物を含む整地土層。

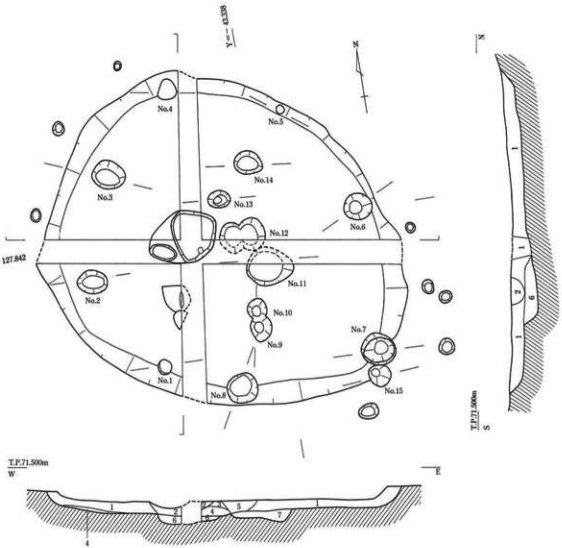
第Ⅲ層　古代末～中世の遺物を多く含む包含層。2・3区の第Ⅲ層に相当する。

第Ⅳ層　ベース土、主に黄褐色のシルトからなる。

第2節　検出された遺構

1．縄文時代

H77区で竪穴住居と思われる円形の遺構を計3基検出した。うち調査区の北側で検出した1基（H77－1）は床面とわずかな壁面および柱穴を検出したが、他の2基は削平が著しく中央の焼土ピット以外の痕跡は明確な状態で検出することはできなかった。



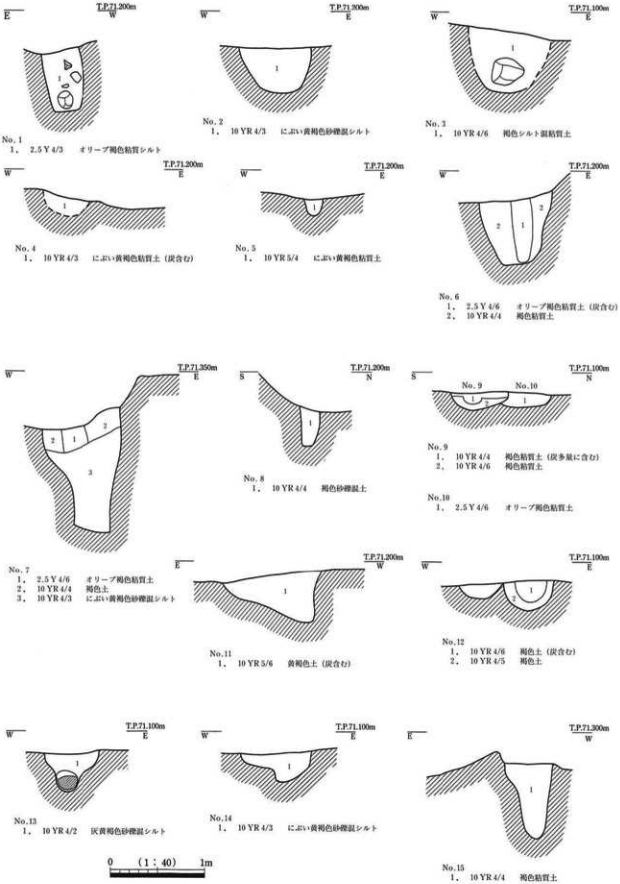
1、 10YR 4/4　褐色粘質土（炭含む）
2、 10YR 3/3　暗褐色砂混粘質土（炭・焼土含む）
3、 7.5YR 5/4　にぶい褐色砂混粘質土
4、 7.5YR 5/4　にぶい褐色土
5、 10YR 4/6　褐色土（炭含む）
6、 7.5YR 4/3　暗灰色砂礫土
7、 10YR 5/8　褐色砂混土

0　(1：20)　50cm

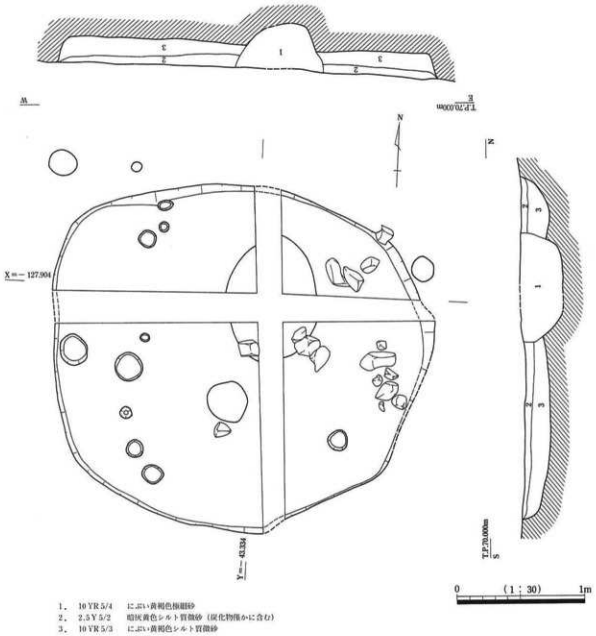
第16図　住居址H77－1平面・断面図

住居址 H77－1（第16・17図）

平面形態は楕円形で長径が5 m、短径が4.1m である。長軸上の中央からややそれたところに炉址と考えられるピットを検出した。ピットの埋土上部には焼土ないし炭化物が含まれていたが、ピットの壁面には火を受けた痕跡はそれほど顕著に認められなかった。壁際に柱穴となるピットを8個検出した他、焼土ピットの周囲にも数個のピットを認めた。柱穴はほぼ垂直に立ち上がることから、これらは垂木および梁・桁を支えた柱であったと考えられる。側壁の周囲に認められる直径5～6 cm のピットは垂木尻痕跡の可能性があるが、建物の周囲を取り囲む状況では検出しておらず、断定はできない。このタイプの住居が垂木を地面まで葺き下ろす形態のものであったか否かについては、類例との比較検討が必要となろう。住居址の埋土には縄文晩期と考えられる土器片が2点含まれていた他、細かい炭化物が比較的



第17図　住居址H77－1検出ピット断面図

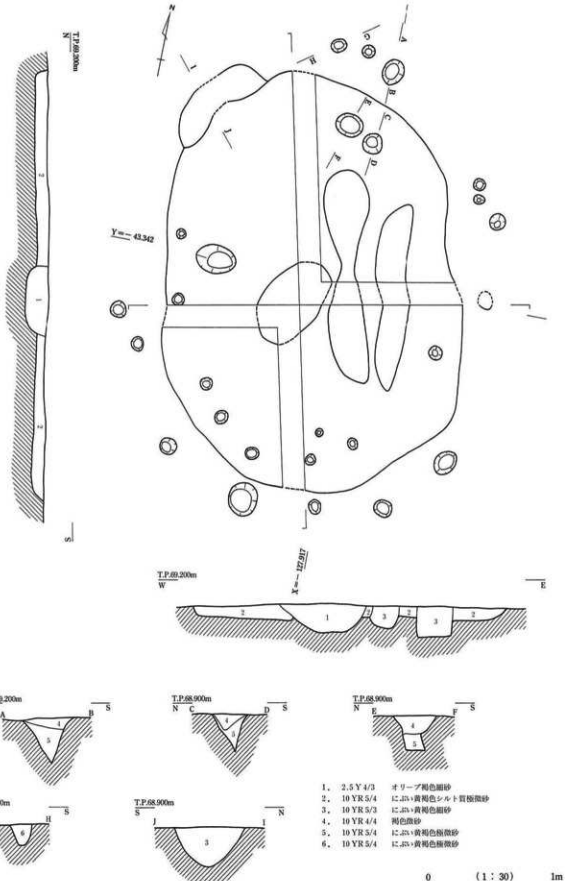


第18図　住居址H77－2平面・断面図

多く含まれていた。

住居址 H77－2（第18図）

平面形態は楕円気味の不整円形で長径は3.3m、短径は2.7m である。埋土の上層には細かい炭化物が含まれていた。また円の中心からややそれたところに長径１ｍ弱・短径50cm 程度の焼土坑を検出した。これらの点が住居址 H77－１と類似するため、この遺構も同時期の住居址である可能性を指摘できるが、埋土から遺物が出土しなかったため時期決定はできなかった。なお遺構の内部もしくは周囲から、規則的な配列を確認できるピット類を検出することができなかった。



第 19 図　住居址 H 77－3 平面・断面図

住居址 H77－3（第19図）

平面形態は楕円形で長径は3.3m、短径は2.4m である。長軸上で長径75cm・短径45cm の楕円形の埋土に焼土を含むピットを検出した。これらの点が住居址 H77－1と類似することから、当遺構も同時期の住居址である可能性を指摘できるが、後世の削平が特に著しくその痕跡を表層的に検出したにすぎないものと考える。埋土から遺物を検出しなかったため、帰属時期を判断することができなかった。遺構本体の周囲に認められる、径10cm 前後の数個のピットは垂木尻痕跡の可能性があるが、その他に配列に規則性を持つ柱穴と考えられるピットは検出しなかった。

当調査で検出した縄文時代の遺構、もしくはその時期の可能性のある遺構は以上の3つである。この他に当該期の遺物と考えられるものとして、同じく H77区でピット H77－17から垂飾と考えられる加工痕のある石器を検出した。これは淡緑色の硬質な石材を素材とするものである。また遺構は検出しなかったが H77区に隣接する平成6年度の調査区で、包含層から縄文晩期の突帯文土器の口縁部の破片が3点出土している。これらのことから今回の調査で中位段丘の末端に位置する河岸段丘上に、少なくとも縄文晩期まで遡る時期の居住域が存在したことを明らかにすることができた。

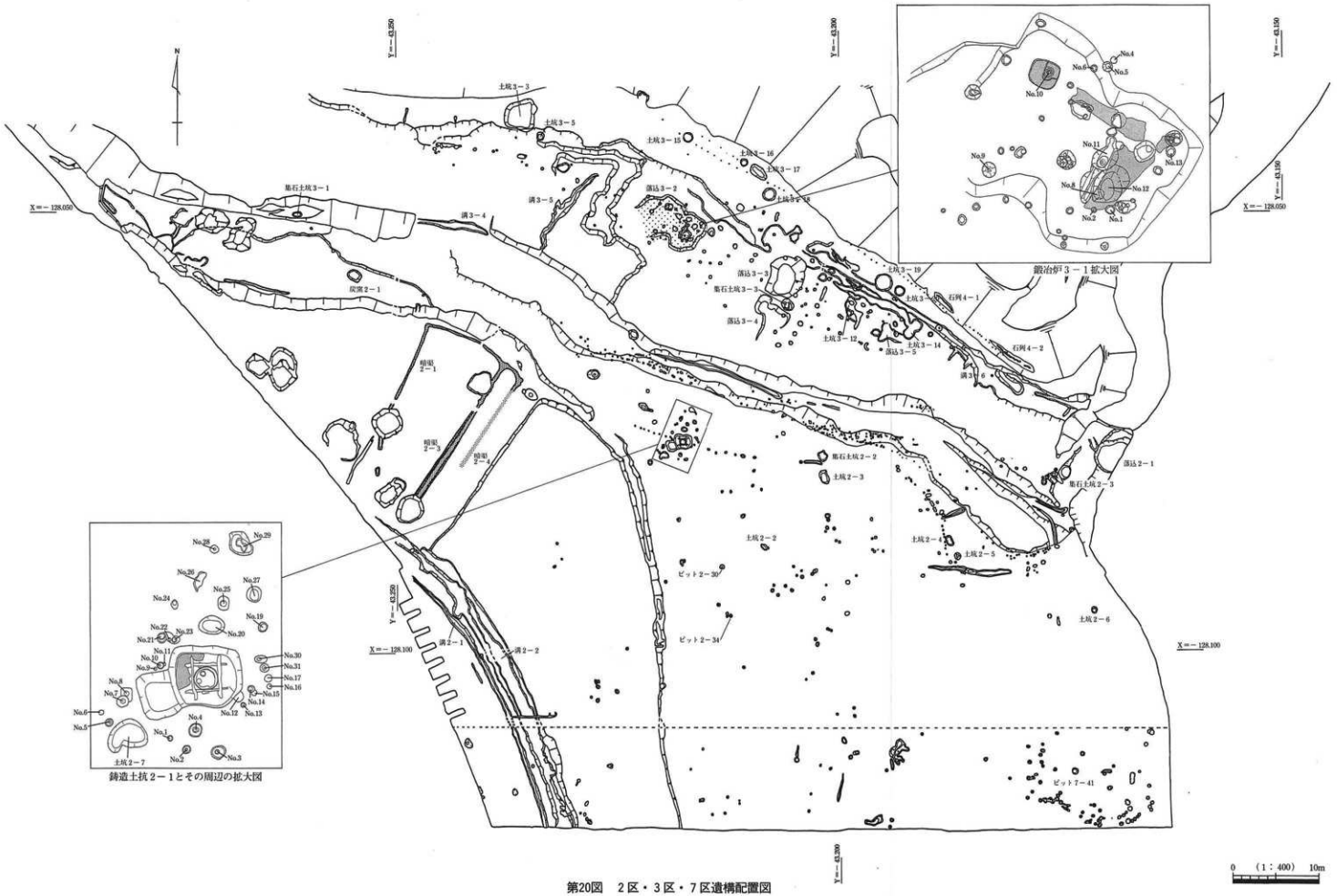
2．古代～中世

当該期の遺構でメインとなる時期は10世紀後半～11世紀前半と13世紀～14世紀で、2区・3区・7区・H77区で遺構・遺物を検出した。1区の流路の底部から出土した7世紀後半の把手付甕はこれらに先駆ける時期のものであるが、同時期の遺物ないし遺構が他にみられないことから、この時期の人々の活動状況は不明である。2区・H77区では第Ⅲ層から、8世紀ないし9世紀の須恵器や10世紀前半代の黒色土器が出土したが、いずれも細片で器種構成や正確な器形を特定するまでには至らなかった。またこの時期に属する遺構も検出しなかった。

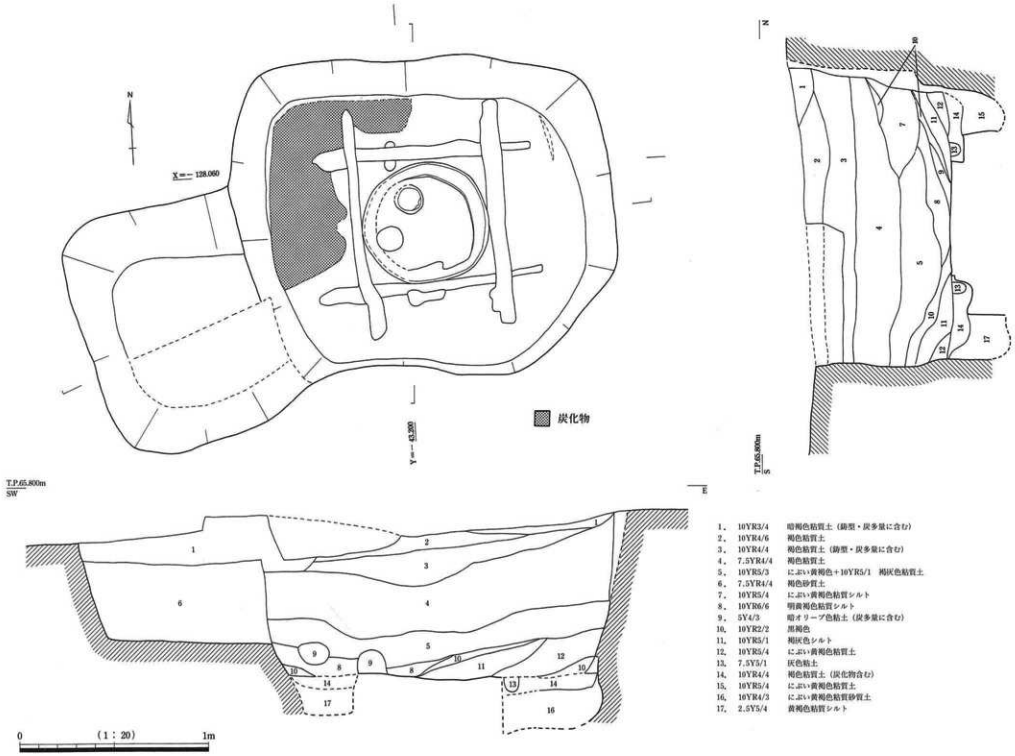
鋳造土坑2－1（第21～26図）

これは梵鐘を鋳造したと考えられる遺構で、長軸2.0m・短軸1.6m・深さ1.14m を測る隅丸方形の土坑である。土坑の西南の隅には、鋳造作業の際に機能したと考えられる深さ60cm・長辺1.3m・短辺1 m 前後の隅丸方形の土坑が取りついていた。この土坑に関しては、鋳型の据付けに伴って掘削されたもの、もしくは鋳造品を抜き取る際に掘削されたもの等の可能性が考えられる。土坑の底部には円形の鋳型の底部と、鋳型を上下から加圧して固定するために井桁状に組まれた丸太の痕跡が良好に残存していた。井桁部分にはわずかに木質遺物が残存していたが、大部分は腐食してグライ化した粘土に置き変わっていた。鋳型・井桁部分はその周辺も含めて、埋土の土圧により若干の凹凸が見られるが、本来は水平であったと考えられる。埋土は上半部において土坑中央部に向かって流れ込んだ様相を呈する。鋳型片は土坑埋土の各層から出土したが、土坑の検出面直下で集中して検出した部分があった。また鋳造土坑底部の西北隅には、厚さ5 cm に及ぶ炭層が堆積していた。

時期判別が可能な遺物として、土坑埋土から出土した緑釉陶器と黒色土器がある。前者は2個の破片が接合したもので、口縁部がわずかに欠けるがほぼ全体の形状を復元できるものである。胎土が粗く濃緑色の釉が施されたもので、10世紀後半の近江系の土器と考えられる。焼成は甘く、釉もほとんど剝落していた。黒色土器は高台部分のみを検出しており、全体の形状は不明であるが、高台の断面が台形で、

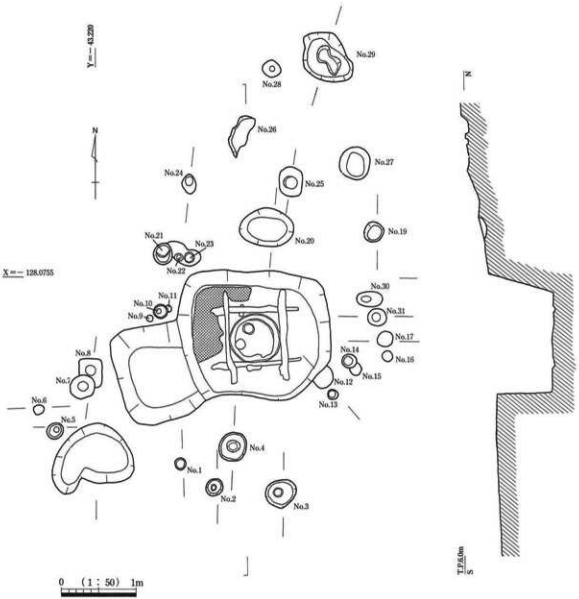


第20図　２区・３区・７区遺構配置図



1、 10YR3/4 暗褐色粘質土（鋳型・炭多量に含む）
2、 10YR4/6 褐色粘質土
3、 10YR4/4 褐色粘質土（鋳型・炭多量に含む）
4、 7.5YR4/4 褐色粘質土
5、 10YR5/3 にぶい黄褐色＋10YR5/1 褐灰色粘質土
6、 7.5YR4/4 褐色砂質土
7、 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト
8、 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト
9、 5Y4/3 暗オリーブ色粘土（炭多量に含む）
10、 10YR2/2 黒褐色
11、 10YR5/1 褐灰色シルト
12、 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
13、 7.5Y5/1 灰色粘土
14、 10YR4/4 褐色粘質土（炭化物含む）
15、 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
16、 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質砂質土
17、 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト

第21図　鋳造土坑２－１平面・断面図



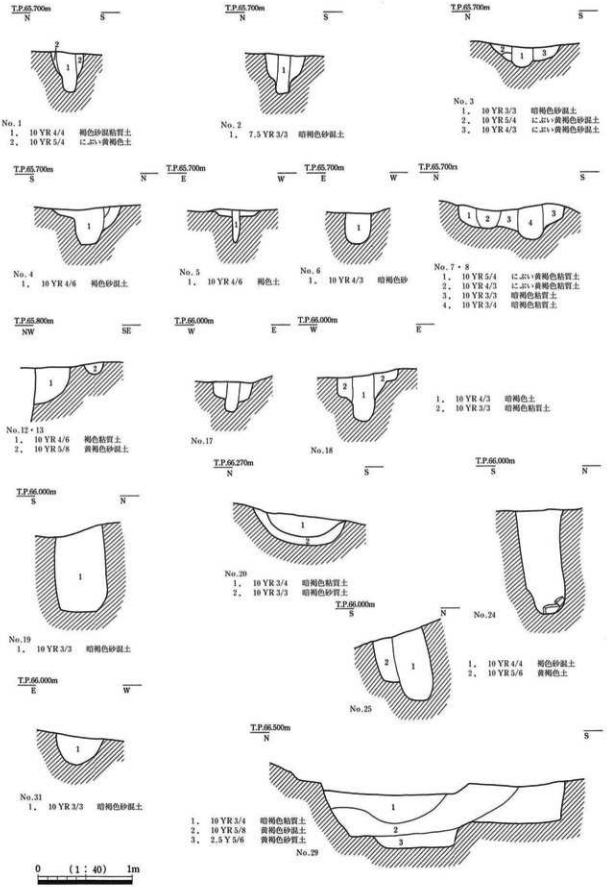
第22図　鋳造土坑２－１と周辺遺構の平面・断面図

かなり低くなっていることから、ほぼ同時期のものとみてよいと考える。

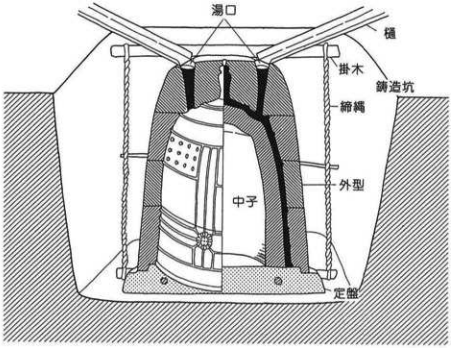
本遺構は井桁と鋳型底部を検出した面で切り取り保存したため、それより下部の詳細な観察は行っていない。井桁と土坑壁面との間の部分をトレンチ掘りして断面を観察したところ、砂礫・炭化物を含む粘質土の堆積を認めたが、版築などによる土台形成の痕跡は見られなかった。

土坑の周辺から複数の土坑・ピットを確認した。湿気を嫌う鋳造土坑の性質から、ピットの中には雨等を防ぐために建てられた覆屋の柱穴が含まれると考える。また鋳造土坑と接するように検出したピットは、梵鐘の取り出しの際に機能した支柱などの施設に係わるとみられる。これらのピットの埋土には炭化物・焼土などが含まれていたが、土器は出土しなかった。この他に鋳造土坑周辺でいくつかの土坑も検出したが、溶解炉・鞴座などの関連施設として確認できる痕跡および遺物は検出しなかった。

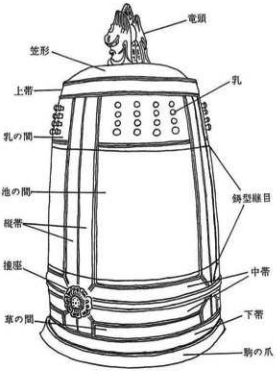
２区では他に、ピット２－30・34の埋土から焼土塊や炉壁片が出土しており、鋳造土坑と同時期もしくは近い時期に存在していたと考えられる。



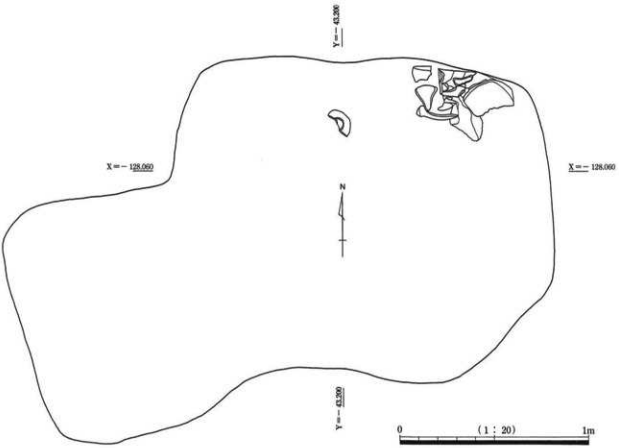
第 23 図　鋳造土坑２－１周辺遺構断面図



第 24 図　梵鐘の鋳型と鋳造の様子（五十川伸也　「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 46 集　1992）



第 25 図　梵鐘各部分の名称（坪井良平『日本の梵鐘』1970）



第26図　鋳造土坑２－１遺物出土状況

炭窯２－１（第27図）

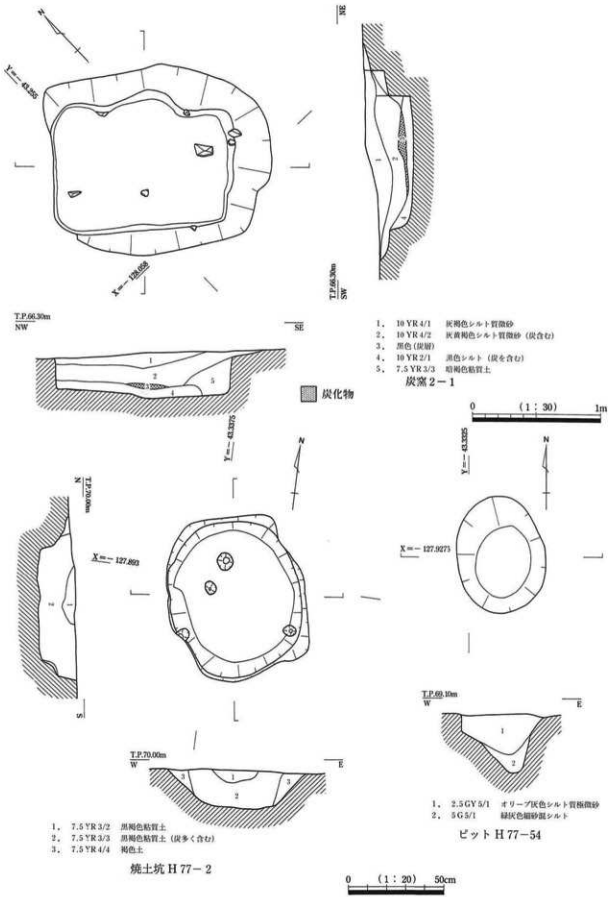
長軸1.43m・短軸1.1m・深さ58cmの長方形の土坑である。土坑の壁面は熱を受けて半還元状態であるが、床面ではそれほど顕著な変化を認めなかった。土坑埋土の下部には炭化物の単純層があり、その上に焼土ブロックを含む暗褐色の微砂が堆積していた。時期判断が可能な遺物は出土しなかったが、熱残留地磁気年代測定により、11世紀前半という測定結果を得た。これは長方形の平面形態をもつ炭窯が中世に主要なものであり、近世以降には残存しないこととも矛盾しない。

焼土坑 H77－２（第27図）

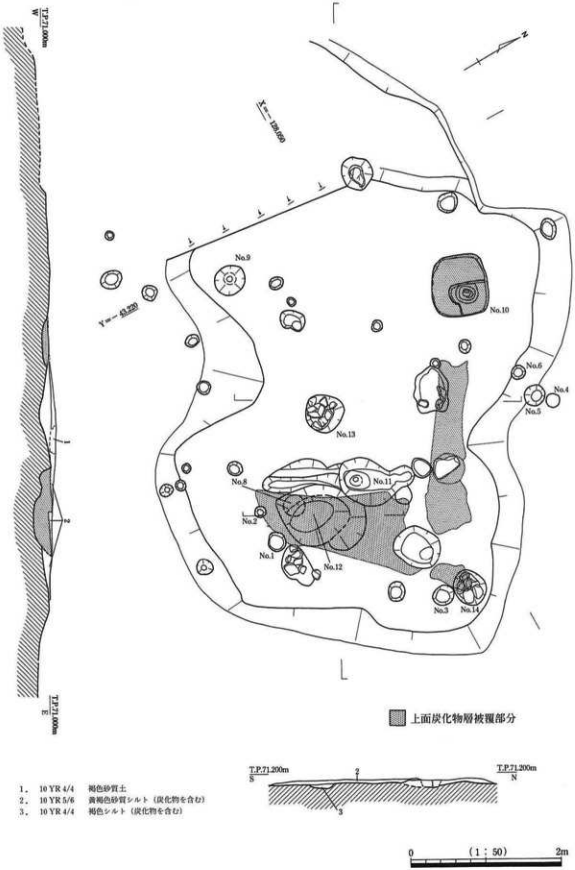
長径86cm・短径73cm・深さ20cmの楕円形の土坑である。埋土に炭化物が多く混入していたのに加え、炭化物層の堆積も認められた。底部にはピットが３ヵ所認められ、全体的に赤変していたことから火を受けたとみられる。平面形態は炭窯に似るが、そうであれば面積が狭すぎるきらいがある。時期判断が可能な遺物は出土しなかったが、第Ⅲ層を除去した段階で検出したことから、10世紀後半ないし11世紀前半を下限とする時期の遺構である可能性が高い。

鍛冶炉３－１（第28・29図）

幅１～２ｍ・深さ20cmほど周囲の地山を削り込むことにより東西6.3m・南北5.4mで、上面が平坦な台状の高まりを造りだしている。高まりの中央東寄りに位置する楕円形の土坑は埋土に２層の炭化物層を含み、その下から鍛冶炉の底面と推定される部分を検出した。炉床面の南西寄りの部分は円形に熱を

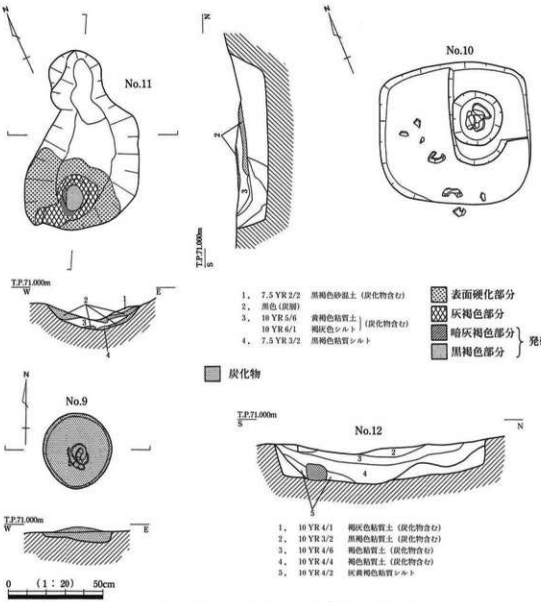


第27図　炭窯２－１・焼土坑Ｈ77－２・ピットＨ77－54平面・断面図



1. 10 YR 4/4　褐色砂質土
2. 10 YR 5/6　黄褐色砂質シルト（炭化物を含む）
3. 10 YR 4/4　褐色シルト（炭化物を含む）

第 28 図　鍛冶炉３－１平面・断面図

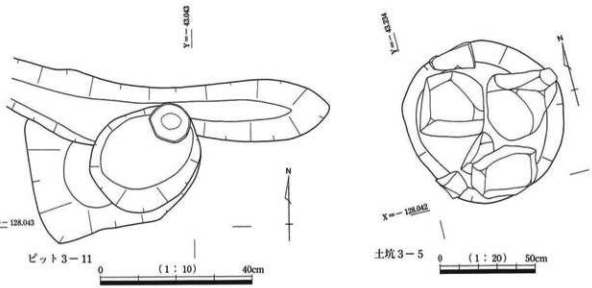


第 29 図　鍛冶炉 3 － 1 上遺構平面・断面図

受けて暗灰色に変色するとともに、ガチガチに焼け締まっていた。その様子からかなりの高温を受けたと推察される。これは鍛冶炉北東部から突き出た羽口から送風を受けたために高温が生じた結果と考えられる。従って羽口座は鍛冶炉北東部に設置されていたと推定できる。また埋土の炭化物の単純層を洗浄したところ鍛造剝片が出土した。このことからも、この場で何らかの鍛冶作業が行われていたと考えられる。

高まりの上部からはこの他にも幾つかのピットを検出した。その中には完形の土師皿がピットの中央に正位に置かれたものや、石を敷き詰めたものもみられた。後者には明らかに石の面を揃えるように底部に石を敷き並べた後、土坑の壁面に沿わせるように石を並べたものがある。また平たい角礫をピットの底部に 1 点だけ、平坦面を上向きにして据えたものもあった。

高まりの上面を精査した段階では、鉤形に炭化物を多く含む層を確認した。これを除去し、部分的に堆積する焼土・炭化物等が混じるシルトの層を掘り下げた段階で、上記の遺構を検出した。従ってこれらの遺構はほぼ同時期のものと考えられる。



第30図　ピット3－11・土坑3－5平面図

ピット3－11（第30図）

長径30cm・短径26cm・深さ約30cmの楕円形のピットで、東西方向にのびる溝3－3の東端と切り合う状態で検出した。埋土上部からピットの側壁に接するように完形の瓦器椀が、口縁をほぼ水平にした状態で1点出土した。

土坑3－5（第30図）

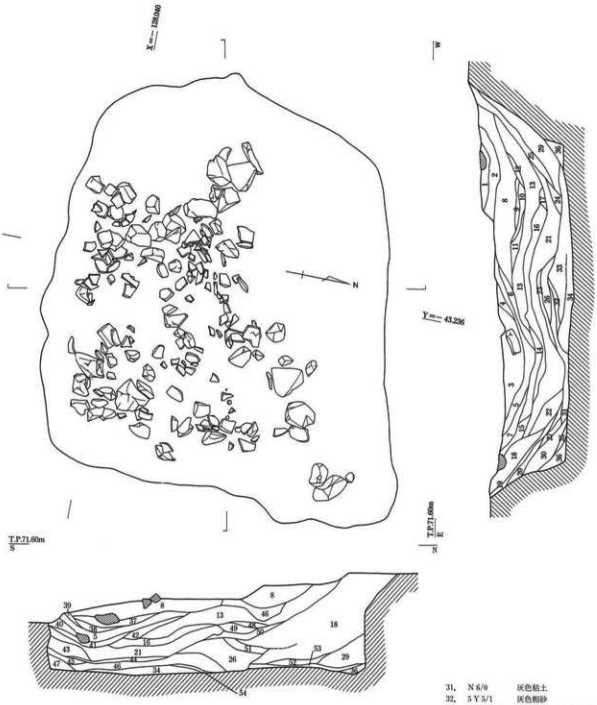
直径42cmの円形の土坑である。土坑内から30～40cm大の角礫が6個出土した。これらの礫には平坦面を揃えて土坑内に据えた様子は見られず、礫の大きさにもばらつきがあった。従ってこれらが意図的に据えられたものとは考えにくいが、もともと周囲のベース土に含まれているものではないことから、人為的に運び上げられたものと考える。

土坑3－3（第31図）

長辺9.5m・短辺8.0m・深さ0.8mで、やや不整な長方形の素掘りの土坑である。埋土から多数の土器片、こぶし大～人頭大の角礫が出土した。粗砂～シルトの薄い層が土坑の中央に向かって流れ込むように、幾重にも折り重なって堆積している。その様子からこの遺構は、流水作用を受けて運ばれた土砂によって埋没したと推定される。出土した土器片の主なものは備前焼で、かなり厚みのある口縁部なども細かく割れた状態で出土した。それらを接合したところ大型の甕が数個体分含まれていたことがわかった。埋甕土坑であった可能性があるが、出土した土器の中で原位置を保つものは無かった。土坑の底部から土師皿が3個体重なって出土した。

3．近世

近世の遺構は各区画で検出したが、徳大寺に関連すると思われる主要な遺構はほとんどを5区で検出した。5区では平坦部分でほぼ全域にわたって遺構を検出したが、その中でも中央部分と南東部分で遺構密度が高いのがみてとれる。検出した遺構はほぼ全てが土坑や溝・ピットで、建物に伴う柱の据付け穴なども少数確認した。植林などに伴って削平を受けたことにより、建物に関連する遺構の多くは後世に取り除かれた可能性がある。ただ5区の南西部分や南東部にみられる2方向にのびる矩形の溝は、建



1、 10 YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂
2、 5 YR 5/6 明褐色粗砂混シルト
3、 7.5 YR 5/1 褐灰色粘土（炭化物含む）
4、 10 YR 5/2 灰黄褐色粗砂
5、 10 YR 5/2 灰黄褐色粘土（炭化物含む）
6、 10 YR 5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
7、 10 YR 5/1 褐灰色粘土
8、 10 YR 5/2 灰黄褐色粗砂
9、 10 YR 5/6 黄褐色微砂
10、 2.5 Y 5/2 暗灰黄色微砂
11、 7.5 Y 4/2 灰褐色粘土
12、 7.5 Y 4/3 にぶい褐色粘質シルト
13、 10 YR 3/1 黒褐色粘質シルト
14、 10 YR 4/2 灰黄褐色粗砂
15、 7.5 YR 4/1 褐灰色粘土
16、 10 YR 4/2 灰黄褐色微砂
17、 2.5 Y 6/4 にぶい黄色微砂
18、 2.5 Y 6/3 にぶい黄色微砂
19、 10 YR 5/4 にぶい黄褐色粗砂
20、 7.5 YR 4/2 灰褐色微砂・粗砂
21、 2.5 Y 6/4 にぶい黄色微砂
22、 10 YR 5/6 黄褐色微砂
23、 7.5 YR 4/2 灰褐色粘土（炭化物含む）
24、 10 YR 5/6 黄褐色微砂・10 YR 4/2 灰黄褐色粘質シルト
2.5 Y 5/6 黄褐色地山ブロック・5 YR 5/6 明黄褐色微砂
25、 10 YR 4/2 灰黄褐色砂礫混シルト
26、 10 YR 4/1 褐灰色粘土
27、 10 YR 5/8 黄褐色微砂・10 YR 5/2 灰黄褐色シルト質微砂
10 YR 4/4 褐色シルト質微砂
28、 10 YR 4/2 灰黄褐色シルト質粘土
29、 10 YR 4/4 褐色微砂
30、 7.5 YR 4/1 黒褐色シルト質微砂
31、 N 6/0 灰色粘土
32、 5 Y 5/1 灰色粗砂
33、 10 YR 5/2 灰黄褐色シルト混微砂
34、 10 YR 6/2 灰黄褐色粗砂
35、 7.5 YR 5/6 明褐色微砂
36、 10 YR 4/2 灰黄褐色シルト混微砂
37、 10 YR 5/3 にぶい黄褐色微砂
38、 10 YR 4/6 褐色微砂
39、 7.5 YR 4/2 灰褐色粗砂
40、 10 YR 6/2 灰黄褐色粘土
41、 7.5 YR 4/2 灰褐色粘土（炭化物含む）
42、 5 G 6/1 緑灰色粘土（炭化物含む）
43、 10 YR 6/2 灰黄褐色微砂
44、 10 YR 5/4 にぶい黄褐色微砂
45、 10 YR 5/3 にぶい黄褐色微砂
46、 10 YR 5/8 黄褐色微砂・粗砂
47、 10 YR 6/4 にぶい黄橙色微砂・粗砂
48、 10 YR 6/2 灰黄褐色微砂

第 31 図　土坑 3 － 3 平面・断面図

物もしくはその区画を取り巻く溝であった可能性がある。平坦部の北側に位置し、丘陵尾根へと連なる斜面部分には、調査以前に12基の墓碑が残存していた。それらの墓碑は川合集落の共同墓地に改葬するため、掘削開始前に下部構造を確認しながら撤去作業を行った。墓碑を移転した後、表土をはいで地山面を検出したところ、斜面部分から更に８基の座棺を掘えたとみられる円形の土坑やその遺跡と思われる遺構を検出した。これらの遺構は前述した墓碑と位置的には対応しないが、近接する時期の遺構と考えられる。

集石土坑５－３（第34図）

長径1.3m・短径1.0m・深さ５～10cm の浅い不整円形の掘方の底部に、一辺80cm の正方形を縁取るように一段の石組みが据えられている。石組みの北側の一辺は土坑５－24に南接している。石は柱状の角礫を使用しており、礫の長辺がほぼ一線状に並ぶように、また天端のレベルがほぼ一定になるように据えられている。

土坑５－24・25（第34図）

土坑５－24は長径2.5m・短径1.0m の楕円形で、深さは50cm である。北側を土坑５－25が、南側を集石土坑５－１がこの遺構を切り込むように接する。土坑５－25は直径50cm のほぼ正円形で、深さは約10cm と浅い。いずれの遺構も壁面を保護するような施設は認められず、時期判別が可能な遺物も出土しなかった。

集石土坑５－１（第34図）

平面形態は長径１ｍ・短径0.8m の楕円形である。深さは５～20cm で断面皿状の浅い土坑である。土坑の壁面および底面にこぶし大から人頭大の角礫を敷並べていたようで、底面の石は平坦面を揃え、頂部のレベルがほぼ一定になるように置かれていた。

集石土坑５－２（第34図）

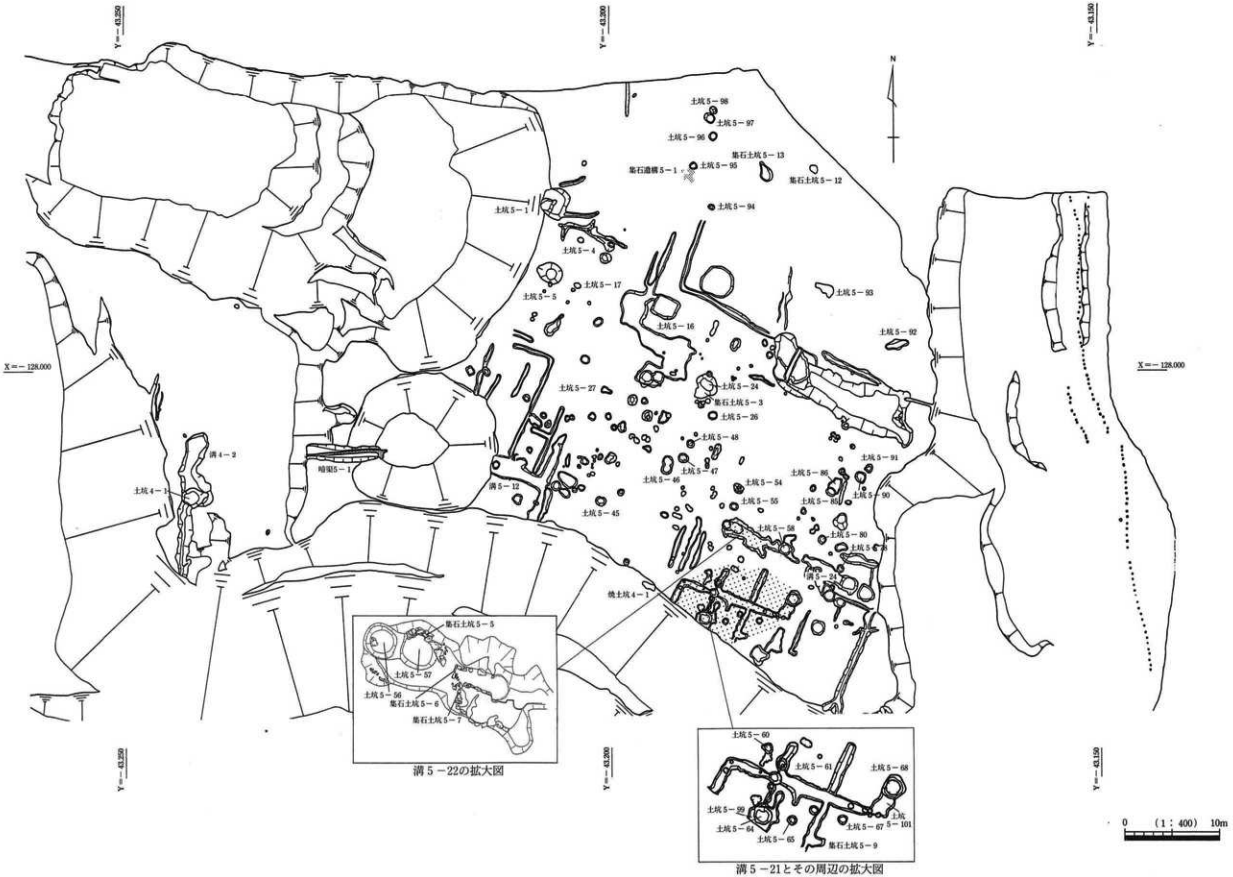
平面形態は長径94cm・短径84cm の楕円形である。深さは約10cm と浅く、断面皿状である。集石土坑５－１から４ｍほどしか離れていないのに加え、大きさも似ていることから両者には何らかの関連性が求められるかもしれない。礫は平坦面を揃えて頂部のレベルがほぼ一定になるよう緻密に置かれており、意図的に敷詰めたものと考えられる。

集石土坑５－11（第35図）

平面形態は長径3.5m・短径3.1m の楕円形で、他の集石土坑と比べると突出した規模を有する。それに対して深さは10cm ほどと浅いことから、掘方の上部はかなり削平を受けている可能性がある。底部全面にこぶし大～人頭大の角礫が敷並べられていたが、もとはもっと緻密に敷詰められていたのかもしれない。時期判断が可能な土器は出土しなかった。

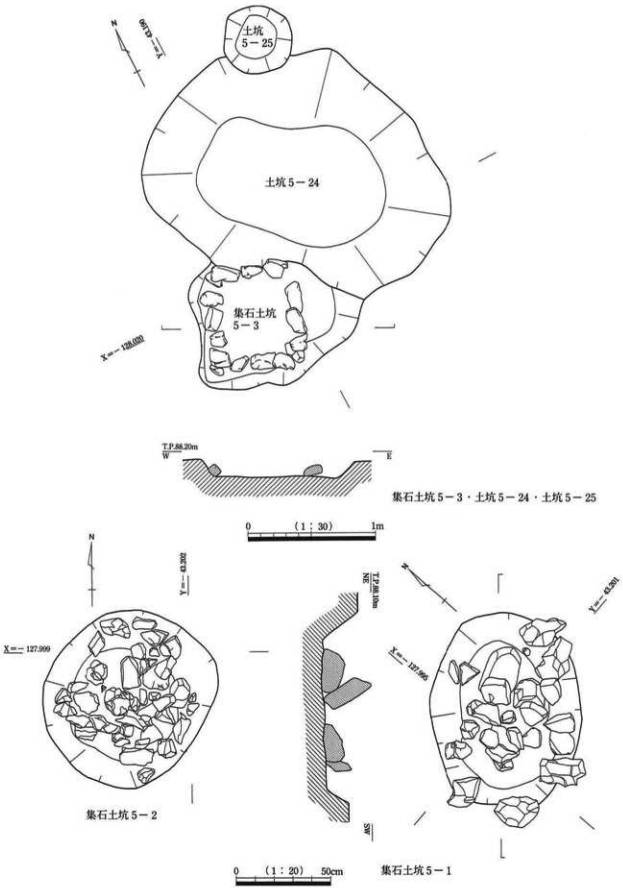
集石土坑５－12（第35図）

平面形態は長径80cm・短径60cm の不整円形である。石の周囲でわずかに窪みを認める程度で、土坑

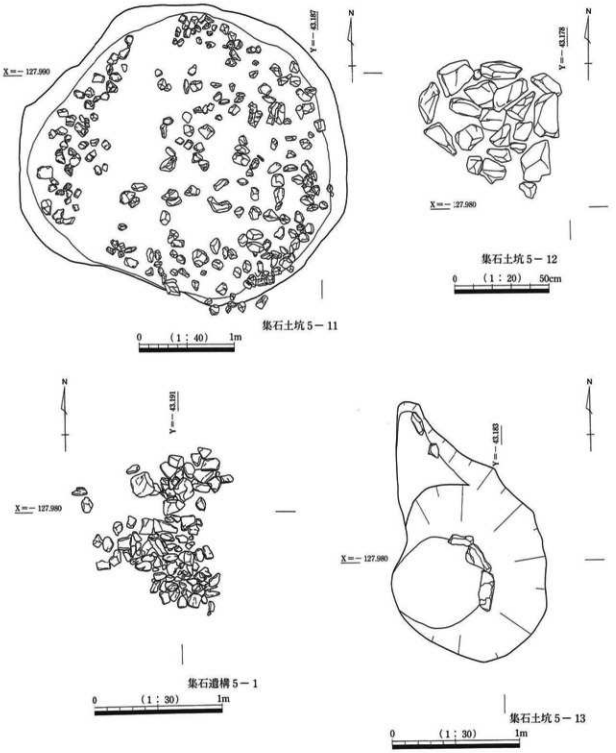


第32図　4区・5区遺構配置図

第33図　3区・5区遺構配置図



第34図　集石土坑5－1～3・土坑5－24・25平面・断面図



第35図　集石土坑５－11～13・集石遺構５－１平面図

の上部はほとんど削平されている。従って検出した角礫はもとは土坑の底部に敷並べたもので、土坑の立ち上がり部分は削り取られて残存していないと考える。石は外側のものがやや大きく、礫の長辺が土坑の輪郭を縁取るように配置されている。根石を込めた柱穴の痕跡である可能性が高いが、この土坑と対となりそうな遺構は検出しなかった。

集石土坑５－13（第35図）

掘方の平面形態は長径2.1m・短径1.3m の長楕円形である。ただ斜面の谷側にあたる西半分は崩落もしくは削平を受けており、本来の形状とは異なっているとみられる。掘方の南側は、直径約1.5m の円形土坑の形状を呈し、山側の底面で３個の柱状の角礫を検出した。これらは平坦面のレベルを揃えると伴に、礫の長辺で土坑底部の輪郭を縁取るように配置されており、意図的に置かれたのは明らかである。石列は土坑が原型を止めないことからみて、もとは底部全周に配されていたと考えられる。円形土坑の北側に長楕円形の浅い落ちが取りつくことから、両者は切り合い関係を持つ２つの土坑であったとも考えられる。調査前に確認されていた近世墓碑と近い時期のもので、根石を込めた柱穴とも様子が異なることから土壙墓の底部である可能性も考えられる。

集石遺構５－１（第35図）

1.3m×0.8m の不整長方形である。５区北端の丘陵尾根に連なる傾斜部分に位置する。石は大きさの揃ったものが、天端のレベルを揃えるような状態で、緊密に置かれていた。遺構の周辺で土坑の立ち上がり等は認められなかったが、近接して検出した土坑５－95も極めて浅くしか残存していなかったことから、この部分は後世に著しく削平を受けた可能性が高い。従って検出した石敷は、もともと土壙墓の底部に敷並べていたものであった可能性が高い。

土坑５－19・20（第36図）

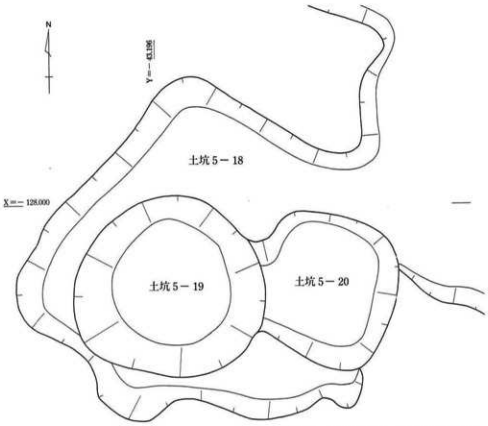
長辺2.8m×短辺2.3m、深さ15cm の長方形の土坑５－18の底部からほぼ同一のレベルで検出した。土坑５－19は直径1.5m・深さ40cm のほぼ正円形の土坑である。対して土坑５－20は一辺１ m・深さ30cm の方形の土坑である。土坑５－19・20は土坑５－18の内部にすっぽりと納まっていることから、両者は一つの掘方内に同時に設けられた土壙墓であった可能性が高い。しかし埋土内から棺材や副葬品等の遺物は検出しなかった。

ピット５－28（第36図）

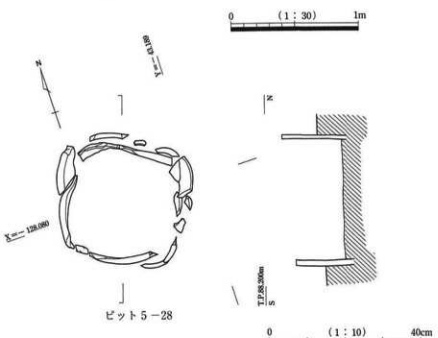
平面形態は一辺約70cm のほぼ正方形である。土坑の輪郭を縁取るように平瓦を、凹面を内側にして垂直に差し込み、１重もしくは２重の衝立状に並べている。これは土坑の壁面を補強するためのものと考えられ、土坑５－68で同様の施設を認めた。平面形態が狭小なため棺を埋設したとは考えにくいが、火葬骨などを埋設した遺構である可能性はある。

落込５－１、集石土坑５－10（第37・38図）

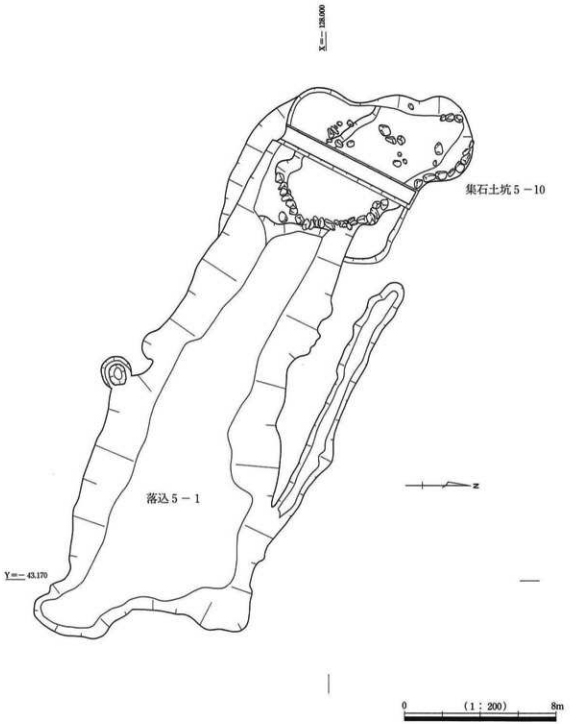
落込５－１は16m×1.3m(最大)、深さ0.7～1.0m の溝状の落込で、西側端部に取りつくように長径5.5m・短径3.5m の長楕円形の集石土坑５－10を検出した。これらの遺構は５区の北側に位置していた壇状の高まりの裾部分に沿うような形で検出した。落込部分は素掘りの遺構で、底部や壁面を保護する施設は認めなかった。埋土は停水性の堆積土からなり、大量の瓦や磁器などを含んでいた。これらにはあまり時期幅を感じさせるものはなく、遺構内部は比較的短期間の内に埋まったようである。落込部分が埋まった後は、集石土坑部分のみが再度掘削されたが、やがてそれも埋まった後は落込部分とあわせて全体的に浅い窪みが残り、最終的にはそれも埋まったと考えられる。



土坑５－18・土坑５－19・土坑５－20



第36図　土坑５－18・19・20・ピット５－28平面・断面図

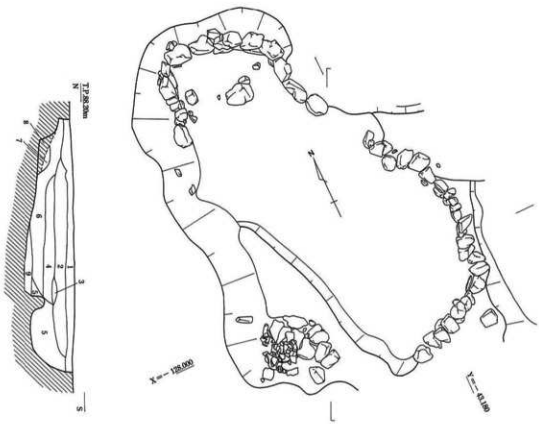


第 37 図　落込５－１・集石土坑５－10 平面図

集石土坑５－10はこぶし大～人頭大の角礫を敷詰めて長楕円形の輪郭を造りだしたもので、これらはおそらく壁面の保護のために置かれたものと考えられる。この遺構の埋土からも多量の瓦・磁器等が出土した。出土した磁器類には碗や皿・水滴に加えて紅皿など、日常雑器が多く含まれていた。

ピット５－52（第38図）

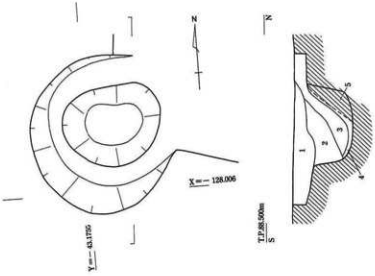
掘方を有する柱穴で、落込５－１が埋没した後に設けられた遺構である。直径約80cm の正円形で、深さは30cm ほどである。この柱穴に対応して規則的に配置されると思われる遺構は認められなかった。



1．　2.5Y 6/4　　にぶい黄色シルト混微砂
2．　2.5Y 6/3　　にぶい黄色シルト混微砂
3．　2.5Y 6/2　　灰黄色細砂
4．　2.5Y 7/3　　浅黄色シルト
5．　2.5Y 6/4　　にぶい黄色細砂混シルト
6．　2.5Y 6/2　　灰黄色細砂混シルト
7．　10YR 6/2　　灰黄褐色細砂混シルト
8．　2.5Y 6/2　　灰黄色シルト（地山）
9．　2.5Y 6/2　　灰黄色細砂混シルト

集石土坑５－10

0　（1：100）　5m

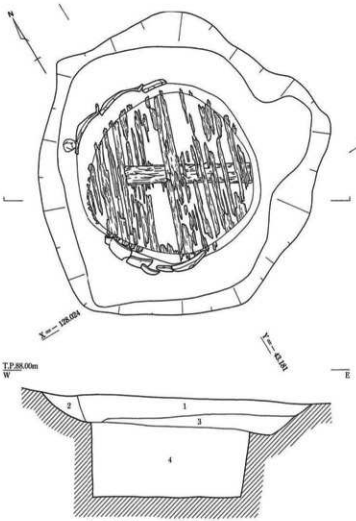


1．　2.5Y 6/3　　にぶい黄色細砂
2．　2.5Y 4/6　　オリーブ黄色粘質シルト
3．　10YR 5/6　　黄褐色粘質シルト
4．　7.5YR 4/1　　褐灰色粘質シルト（有機質堆積）
5．　2.5Y 6/4　　にぶい黄色細砂（地山）

ピット５－52

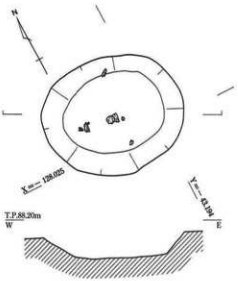
0　（1：20）　50cm

第38図　集石土坑５－10・ピット５－52平面・断面図

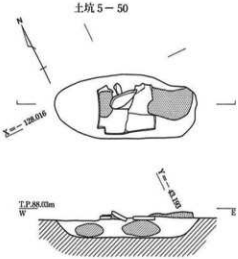


1. 10 YR 5/4 にぶい黄橙色砂礫混シルト
2. 10 YR 4/6 褐色砂礫混シルト
3. 10 YR 4/4 褐色シルト混微砂
4. 10 YR 5/6 黄橙色シルト混微砂

土坑5－68

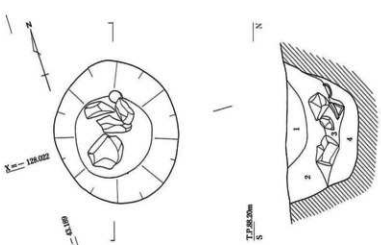


土坑5－50



土坑5－53

炭化物



1. 10 YR 4/2 灰黄褐色シルト質微砂
2. 10 YR 5/2 灰黄褐色細砂混シルト
3. 10 YR 4/1 褐灰色シルト混微砂
4. 10 YR 4/1 褐灰色砂礫混シルト

土坑5－61

0 (1：20) 20cm

第39図 土坑5－50・53・61・68平面・断面図

土坑５－50（第39図）

長径74cm・短径62cm・深さ約10cm の楕円形の土坑である。土坑の底面および壁面を、木炭の燃え残りを含んだ炭化物層が覆っていた。この土坑から南東方向に1.2m 離れた所に、やはり炭化物層を多く含んだ土坑５－53が位置しており、両者には何らかの関連性がうかがえる。

土坑５－53（第39図）

長径75cm・短径34cm の長楕円形で、深さは10cm である。土坑底部に円礫が２個据えられていたのに加え、土坑の検出面では平瓦が凹面を上にして、水平に置かれていた。平瓦が焼けていること、平瓦の上や周辺に炭化物層が堆積していること、土坑埋土に焼土が多く含まれていたことからみて炉址など、火に関連した遺構であったと考えられる。

溝５－22（第40・41図）

落込５－１にほぼ平行する方向の溝である。これはまた東側にほぼ隣接する溝５－24と同じ方向を指向するのに加え、南に約６ m 離れる溝５－21の東西方向部分ともほぼ平行する位置関係を有し、次に挙げる遺構を東西につなぐような形で検出した。長さ8.6m・幅１～２ m・深さ約10cm で断面形状は皿型の比較的浅い溝である。もとは溝５－24と同一の遺構であった可能性もある。

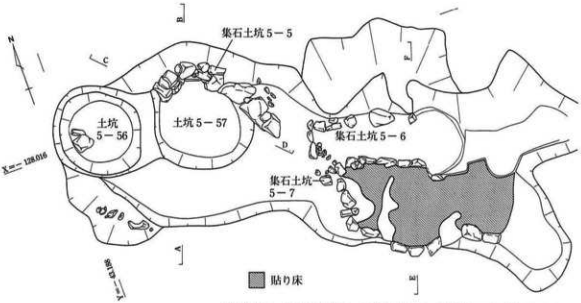
土坑５－56は直径90cm・深さ60cm、土坑５－57は直径１ m・深さ1.0m である。いずれもほぼ正円形の素掘りの土坑で、溝５－22の底部からほぼ同一のレベルで検出した。両者に切り合い関係は認められず、同時併存した可能性が高い。

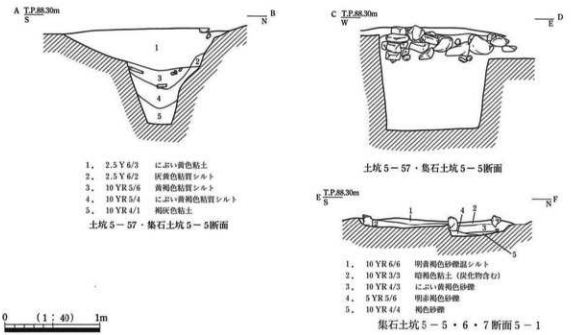
土坑５－56は底部で人頭大の角礫を２個検出したのに加え、埋土から磁器・陶器類を検出した。土坑５－57は平面図でみると集石土坑５－５と部分的に重なっており、同一の施設のように見える。しかし土坑部分が円形なのに対して集石部分は矩形を呈していることから、土坑部分と集石部分は区別して捉え、後者は集石土坑５－５・７とより強い関連性を有するものと考える。なお土坑５－57から遺物は検出しなかった。

集石土坑５－５は短辺50cm・長辺1.3m の矩形で検出したが、もとは石組みが４周を巡る長方形の土坑であったと考えられる。用いられているのは20～30cm 大の角礫で、土坑の内法に向けて平坦面を揃え、直線的な面を造りだしている。

集石土坑５－６・７は東西方向を指向する長方形を呈し、溝５－22の底部にすっぽりと納まるような形で縦列して位置する。集石土坑５－６は南辺が、集石土坑５－７の北辺と共通する。前者は東側のコーナー部分の石が抜け落ちていたが、わずかに残っていた掘方とあわせてその規模を測ると短辺50cm・長辺1.6m である。石列は径10～20cm の角礫を使用し、長辺の平坦面が一線状に並ぶように配置されている。それに対して後者は、短辺90cm・長辺1.8m と前者より一回り大きな礫を配置して土坑の輪郭を造りだしている。ただ南辺と北辺に凹凸が認められ、前者ほど整った長方形ではない。石列に使用されている角礫は、西辺と南辺に用いられているものが径20cm で前者より均一な大きさのものである。いずれの遺構も内部に、細かい炭化物を多く含んだ粘土質の壌土の堆積が認められたが、集石土坑５－７ではその上に、明黄褐色の砂礫を含んだシルト層が堆積していた。この土層はそれほど厚くないものの、極めて均質で安定した土が固く叩き締められた状態で堆積しており、意図的に貼床されたものと考える。

土坑５－58は溝５－22の東端に近い部分を切る形で検出した。直径1.1m で深さ90cm の円形の土坑で





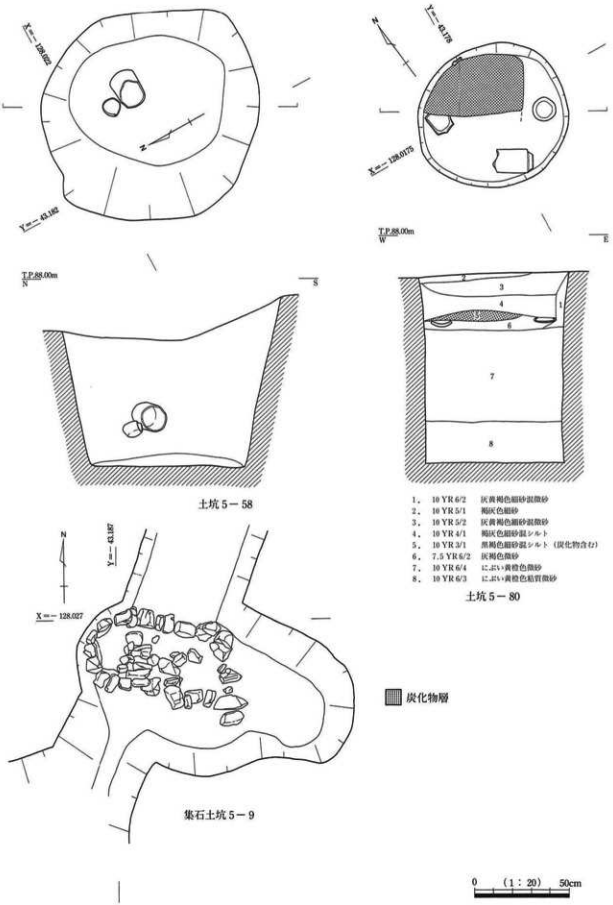
第40図　集石土坑5－5・6・7　土坑5－56・57平面・断面図

ある。土坑はほぼ垂直に掘り込まれており、底部に近い埋土中から完形の備前焼の水指と、京焼系の碗が一点ずつ出土した。棺材等は検出しなかったが、遺物の出土状況からみて土壙墓の可能性が高いと考える。

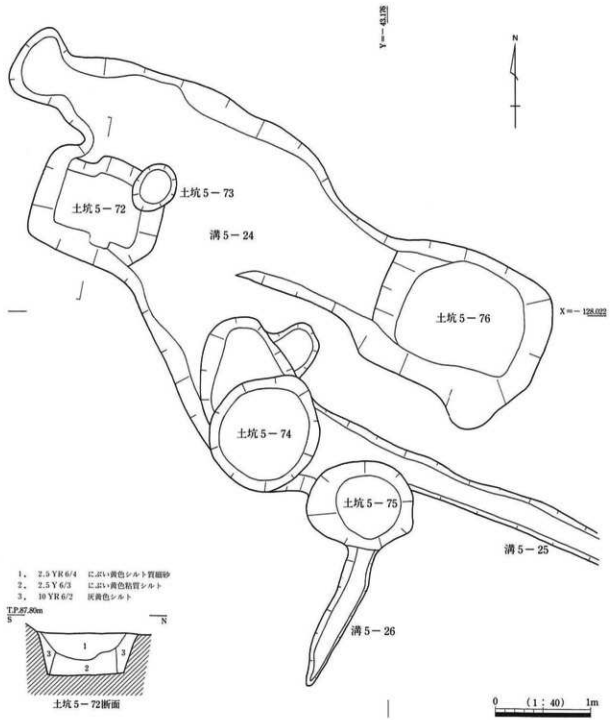
溝5－24（第42図）

幅1.7m・深さ10cmで断面皿状の浅い溝である。溝5－22とほぼ平行するのに加え、複数個の土坑をつなぎあわせるように溝が位置する点が共通しており、両者は本来同一の溝であった可能性もある。この溝からはほぼ同じ方向を示す溝5－25と、直行する方向の溝5－26が派生している。

土坑5－72・土坑5－76はいずれも溝5－24の底面を検出した段階で、ほぼ同一レベルから検出した。



第41図　土坑5－58・80・集石土坑5－9平面・断面図



第42図　溝5－24周辺遺構平面・断面図

これらの土坑はいずれも平面形態が長方形で、大きさは前者が長辺1.4m・短辺1.2m・深さ60cm、後者は長辺1.8m・短辺1.5m・深さ36cmである。どちらもほぼ垂直に掘り下げられていたが、土坑5－72の壁面には全面に渡って極めて均質な灰黄色のシルトが巡らされていた。このシルトは土坑の壁面を覆うために、意図的に貼り足されたものと考えられる。

土坑5－80（第41図）

溝5－22の東端および溝5－24の西端から北に約2.5m離れた所に位置する。直径80cmのほぼ正円形

で、深さ約１ｍである。土坑はほぼ垂直に掘り込まれており、埋土の上部で炭化物を極めて多く含んだシルト層を検出した。またその層の直下から完形の丸瓦２点と土師質の土器を１点検出した。土坑内から棺材等は検出しなかったが、遺物の出土状況などからみて土壙墓の可能性が高いと考える。土坑内に座棺が置かれていたとすれば、遺物は位置的にみて棺の蓋に置かれていたと考えるべきだろう。

溝５－21（第39・41図）

溝５－22とほぼ平行する東西方向部分と、それに直行する南北方向部分とからなる。溝の幅は50～100cm・深さは約20cm で、断面皿形の浅い溝である。長さは東西方向で約11m あり、南北方向の溝は東西方向部分を３分割するような間隔で２ヵ所、およびその西端で検出した。溝５－22と同様、複数個の土坑および集石土坑をつなげるような形で横たわる。以下にそれらの一部の遺構について詳述する。

土坑５－61は溝５－21の東西方向部分と、中央の南北方向との分岐部分に位置する。長径75cm・短径67cm・深さ約40cm で平面形態は楕円形である。中程の深さの所から、完形の磁器の蓋が１点と、数個の拳大の角礫が出土した。

土坑５－68は長辺1.6m・短辺1.2m のやや不整形な方形の掘方の中央に、直径約１ｍの円形の土坑が位置する。深さは円形の土坑の最深部分で約50cm である。円形土坑の検出面では輪郭に沿って平瓦を衝立状に並べていた。これは土坑の壁面上部を補強するためのものと考えられる。円形土坑はほぼ垂直に掘り込まれており、内部には土坑とほぼ同じ大きさの木桶が置かれていた。ただ桶自体はかなり腐食が進み、その痕跡を認めたにすぎない。他遺跡の類例と照らしてみると、これは桶を利用した便所遺構である可能性が高い。

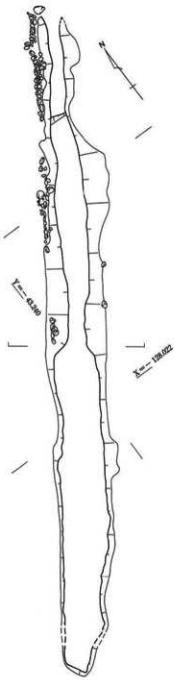
集石土坑５－９は溝５－21の東寄りで、南北方向部分の南端に近い部分に位置し、溝に直行するような形で掘方を検出した。掘方の形状は長径1.5m・短径95cm の長楕円形で、深さは10cm と極めて浅い。掘方の底部に90cm×45cm の範囲で拳大の角礫を敷並べている。掘方の壁際に置かれているものは壁面にもたせかけるように立て並べているが、このような状態の石列は石敷の四周を取り巻くわけではない。従って石敷きは現存で掘方より一回り小さくなっているが、もとは土坑底部全面におよんでいた可能性もある。

土坑３－19（第43図）

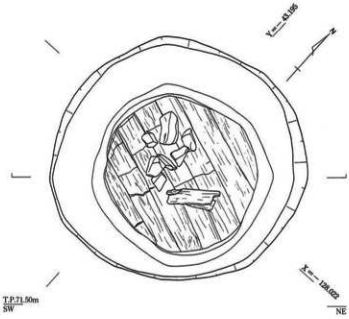
掘方は直径約2.0m の正円形で、深さは30cm である。その中央部に直径1.4m の円形の土坑が穿たれている。その土坑の底部には幅18cm の木の板を敷並べて、直径1.2m の円形の床面を造りだしていた。その様子はまるで、木桶の底のみを置いたような状況である。床面の直上から人頭大の角礫を７点検出した他、埋土中から焼けた巴文軒丸瓦の破片１点と、備前焼の大甕かと思われる土器の破片が２点、丹波焼の壷かと思われる土器の破片が２点出土した。土器はいずれも細片で、土器の形態を復元するには至らなかった。軒丸瓦の破片は巴が左巻きで、珠文が14個あったと復元でき、６区で出土したものと同タイプと推定できる。

集石土坑２－２（第43図）

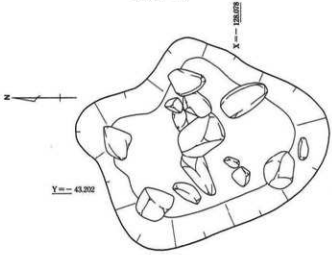
長径1.2m・短径90cm の不整楕円の土坑である。底部から人頭大の礫を数点検出した他に、細片のため図化できなかったが磁器の破片を検出した。礫は意図的に据置かれたような状況ではなかったが、も



道状遺溝平面図



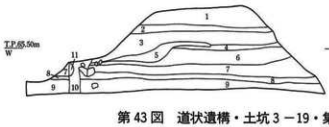
土坑3－19



集石土坑2－2

0 (1：200) 5m

0 (1：30) 1m



1、	10 YR 4/4	褐色微砂	7、 7.5 YR 6/3	にぶい褐色微砂
2、	10 YR 5/6	黄褐色砂質土	8、 7.5 YR 7/3	にぶい橙色微砂
3、	10 YR 6/6	明褐色微砂	9、 7.5 YR 6/1	褐灰色砂質シルト
4、	10 YR 6/1	褐灰色砂質シルト	10、 N 7/0	灰白色微砂
5、	5 YR 6/2	褐灰色砂質土	11、 7.5 YR 7/6	橙色微砂
6、	7.5 YR 5/1	褐灰色微砂		

道状遺溝断面図

0 (1：40) 1m

第43図　道状遺構・土坑3－19・集石土坑2－2平面・断面図

ともと周囲のベースの土に含まれているものではないうえに、大きさもほぼ揃っていることから、人為的に持ち運ばれたものと考えられる。

道状遺構（第43図）

暗渠２－３より南東方向に約２ｍ離れた所で、暗渠２－３・４に平行する道状遺構を検出した。遺構の南端に近い部分を溝２－２に切られているが、２区の西側を占める最もレベルの低い棚田を横断し、３区に取りつくような形で位置する。基底幅は３ｍ・上端幅は2.5m・最大高は１ｍである。道状遺構の北西に位置する暗渠２－１～４は近世の床土の直下で検出したのに対し、道状遺構はその床土の直上から立ち上がりを認めている。従ってこの遺構は地盤の掘削や整地・暗渠の設置など、棚田の造成のための基礎作業が終了した段階で造られたと考える。遺構の中心には、極めて均質なシルト～微砂を台状に積み上げた土層が認められており、これを芯にして造られたものである。

溝２－１・２

棚田の輪郭に沿ってほぼ平行にはしる溝である。溝２－１は幅50cm・深さ20cmほど、溝２－２は幅約２ｍ・深さ20～40cmで、いずれも北から南に向けて水が流れるようになっている。いずれの溝も棚田の造成時から現代に至るまでの期間に渡って使用されたもので、特に後者の埋土からは、瓦や磁器をはじめとする近世から現代にかけての遺物が多数出土した。また溝の底部には土留めの杭の跡を多数検出した。

暗渠

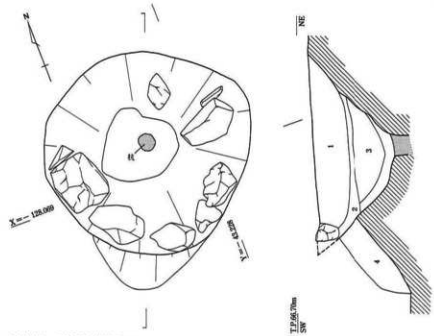
１区・２区・５区・H77区で検出した。主なものは幅50cmの浅い溝の中に、こぶし大の川原石を詰め込んだもので、周辺の棚田でも一般的に行われているものである。これは降雨時に水が溜まって土壌が流されるのを防ぐ目的で施されたものである。１区で検出した暗渠１－１は幅40～50cmの溝の中に、溝の幅に切った直径５ｃｍ大の木を詰めたものだったが、その機能は前述のものと変わらないであろう。暗渠５－１は幅1.7m、溝の底部に、筒形の土管を１列に並べたものである。これは５区の西端に位置する池に溜まった水を、さらにその西側に位置する４区の棚田に落とすために設置したものと考えられ、暗渠東端の底部のレベルは池の最深部のレベルにほぼ等しい。

これらの暗渠の内、浅い溝にこぶし大の川原石を詰め込むタイプのものは近世における棚田の造成当初からこの地域で作られていたものであろう。このような暗渠と併用して、近現代に至っては木を詰めたものや、土管を用いたものが設置されたと考える。

４．時期不明の遺構

集石土坑２－１（第44図）

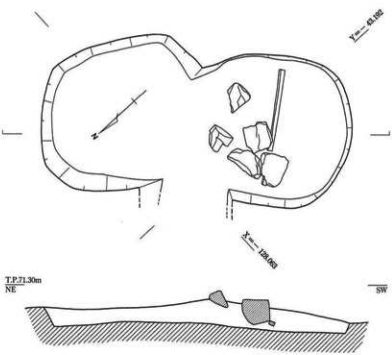
直径約1.5mの円形で、深さは40cmである。土坑の肩の落ち際の部分に、人頭大の角礫を土坑の輪郭に沿って半月状に並べていた。土坑の断面形状は漏斗状で、中央の最深部に直径10cmほどの杭が１本打ち込まれていた。



1、 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂混粘質シルト
2、 7.5YR 5/6 明褐色砂質土
3、 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂混粘質微砂
4、 10YR 5/2 灰黄褐色細砂

集石土坑２－１

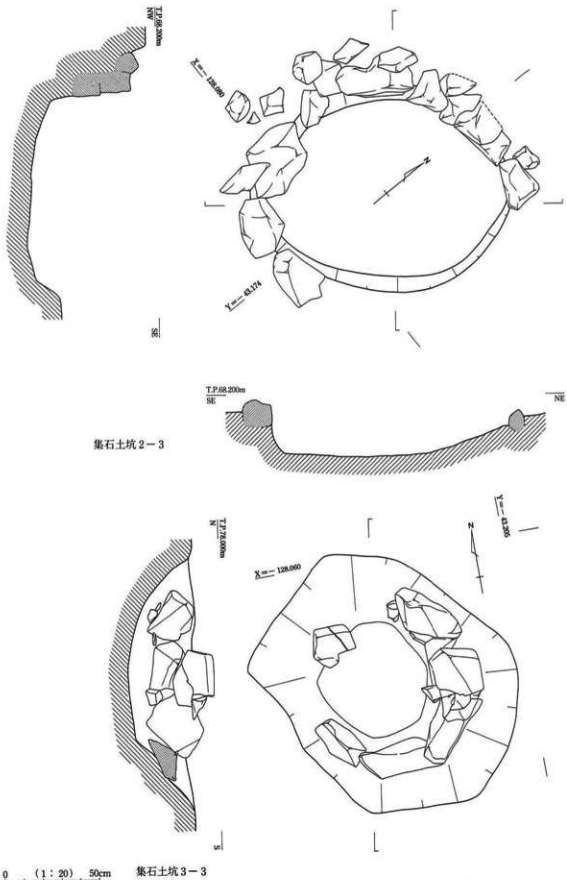
0 （1：20） 50cm



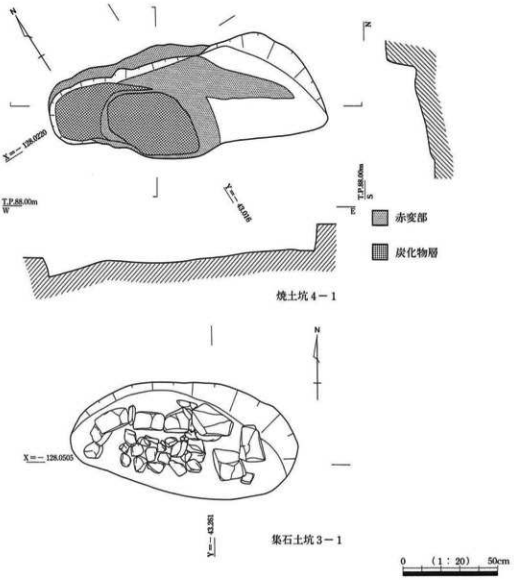
土坑３－14

0 （1：30） 1m

第44図　集石土坑２－１・土坑３－14平面・断面図



第45図　集石土坑２－３・３－３平面・断面図



第46図　焼土坑４－１・集石土坑３－１平面・断面図

土坑３－14（第44図）

長辺2.5m・短辺1.2mの中央部がややくびれる長方形で、深さは15cmである。東西方向の溝状の落ちの先端に取りつく遺構である。土坑埋土には人頭大の角礫が数個と、角材状の木製品が１点含まれていた。角礫は周囲のベースの土に含まれるものではなく、人為的に持ち運ばれたことは明らかである。ただその検出状況からみて、意図的に配置されたものとは考えにくく、元来この遺構の上部構造に伴っていたものかどうかも不明である。

集石土坑２－３（第45図）

長径1.3m・短径１ｍの楕円形で、深さは40cmである。３区の棚田の裾に取りつくような形で検出した。人頭大の角礫を、土坑の壁際を保護するような形で１～２段積み上げている。石は平坦な面を土坑の内法に向けて揃えるように並べており、それほど顕著な凹凸は認められない。井戸もしくは集水遺構の基底部のみが残存したものである可能性が高い。

集石土坑３－３（第45図）

長径1.4m・短径60cm の楕円形で、深さは34cm である。土坑の内部に人頭大の角礫を並べて、土坑の輪郭より一回り小さい円形を造りだしている。角礫は平坦な面を内側に向ける形で配置している。

焼土坑４－１（第46図）

平面形態は長辺1.4m・短辺70cm の不整長方形である。４区南側斜面の頂部付近からの落ち際で検出した。斜面を掘り込んで奥壁ないし床面を造りだした半地下構造の炭窯だったと考えられるが、大部分が削平されて奥壁付近の床面と立ち上がり部分をわずかに検出したにすぎない。壁面は高熱を受けたために赤変するとともに、床面には炭化物層が部分的に残存していた。これらの特徴からみて炭窯と考えられるが、埋土から遺物が出土しなかったのに加えて後世の削平が著しく、平面形態も不明なために帰属時期は判断できない。

集石土坑３－１（第46図）

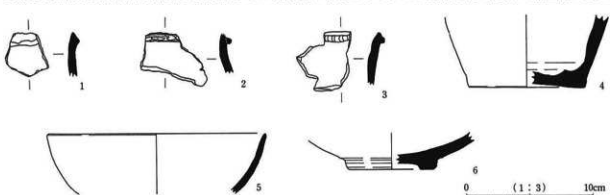
残存形態は長径1.2m・短径60cm の楕円形であるが石敷部分の形状からみて、もとは長楕円形か長方形の土坑であったと考えられる。傾斜地を掘り込んで平坦面を造りだし、長方形の石敷を設けたとみられるが、後世の削平により谷側の土坑の肩と石敷は消失したと考える。石敷は10～20cm のやや大きめの角礫を立て並べて長方形の輪郭を作り、その内部を充填するように径10cm 以下の河原石を敷並べている。輪郭に用いている石は、平坦面を内側に向けるようにして配置している。同様な特徴を有する石敷は集石土坑５－９で認められる。

第３節　出土遺物

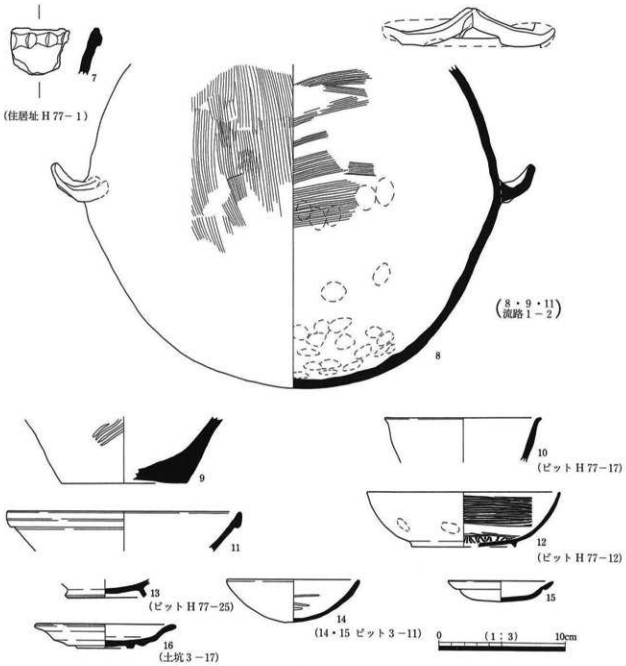
１．土器

１）平成６年度調査時出土遺物（第47図　１～６）

１～６は平成６年度に㈶大阪府埋蔵文化財協会によって H77区の東側で行われた調査で出土した遺物である。１～３は縄文時代晩期の長原式土器の口縁部で、いずれも突帯を一条もつ。刻み目はヘラで刻まれているが表面が磨滅しており、痕跡が残っている程度である。胎土はいずれも生駒西麓のものではなく在地のものである。４は平安時代のものと思われる須恵器の壺である。５はピット132より出土した黒色土器椀Ａ類で、内外面とも磨滅しており調整は不明である。６は唐津焼碗で内面に胎土目が見ら



第 47 図　平成６年度調査時出土遺物



第 48 図　遺構出土遺物（縄文～中世）

れることから、16世紀末～17世紀初頭のものである。

2）遺構出土遺物

縄文時代

H77区　住居址 H77－1（第48図　7）

7は縄文時代晩期の長原式土器の口縁部である。幅の広い突帯を一条持ち、指で押さえて刻み目を作っている。胎土は在地のものである。もう一片体部の破片が出土している。(図版22の右上の破片)

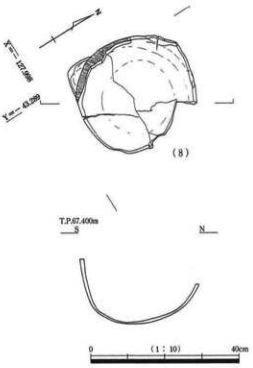
古代～中世

1区　流路1－2（第48図　8・9・11）

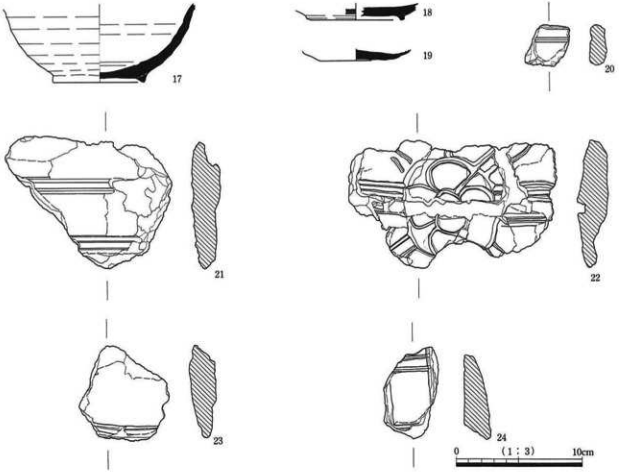
8は流路の底から出土した7世紀後半頃の土師器の把手付甕である。口縁部は欠損している。体部外面および内面上部にハケメが認められる。内面下部にはハケメは認められず指頭圧痕が認められる。外面下半には煤が付着している。9は平安時代末～鎌倉時代の須恵器の甕もしくは壺である。外面にタタキが認められる。11は白磁碗a類である。口縁部に玉縁を持っている。

H77区　ピットH77－17（第48図　10）

10は緑釉陶器椀で洛西産であると思われる。硬質のもので、口縁部の釉はほとんど剝げてしまっているが内面には良好に残っている。



第49図　流路1－2遺物出土状況



第50図　鋳造土坑2－1出土遺物

2区　鋳造土坑2－1（第50図　17～24）

17は近江系の緑釉陶器椀である。焼成はやや甘めであり、胎土は土師質に近い状態である。釉もほとんど剝離している。見込みに凹線がみられる。18は黒色土器椀ないし皿で外面にミガキがみられる。内面の調整は不明である。19は断面も含め全体的に磨滅がひどく、長期間地表で風雨にさらされていたようである。そのために後に混入したものと考える近世の土師皿である。底部に回転糸切りの痕跡がかすかに残っている。

20～24は鋳型である。いずれにも凹線が刻まれている。これは鋳上がった梵鐘では逆の凸線となって帯の部分になる。特に21では約3 cm間隔で二条一組の凹線が刻まれていることが確認できる。22は4弁ないし8弁の花文部分である。花文の中心部分で割れてしまっているが、花文の直径は約7 cmである。撞座にしては少し小さいように思われるが、周囲に残る凹線の様子からすると撞座とみるのが妥当であろう。いずれの鋳型にも胎土内にスサが入れられていたようであり、炭化物を含んでいる。

また、図版などは掲載していないが、埋土中より直径4～8 mmの鉄粒（湯玉）が出土している。

H77区　ピットH77－12（第48図　12）

12は黒色土器椀A類で内面には細かいミガキが密に施されている。見込みにはジグザグのミガキが施されている。外面にはミガキは施されておらず指頭圧痕のみが認められる。

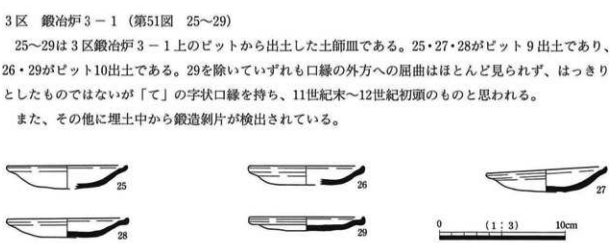
H77区　ピットH77－25（第48図　13）

13は土師器杯で高台端部に沈線が一条施されている。外面に黒斑が見られる。

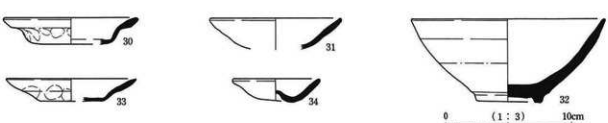
3区　鍛冶炉3－1（第51図　25～29）

25～29は3区鍛冶炉3－1上のピットから出土した土師皿である。25・27・28がピット9出土であり、26・29がピット10出土である。29を除いていずれも口縁の外方への屈曲はほとんど見られず、はっきりとしたものではないが「て」の字状口縁を持ち、11世紀末～12世紀初頭のものと思われる。

また、その他に埋土中から鍛造剝片が検出されている。



第51図　鍛冶炉3－1上ピット出土遺物



第52図　土坑3－12出土遺物

3区　ピット3－11（第48図　14・15）

14は瓦器椀で和泉型Ⅳ期のものと思われる。形はかなり歪んでおり、調整は内面に平行線のミガキがわずかに認められる程度である。15は土師皿で体部に段がつけられている。あまり見かけない形態のものである。二次焼成を受けていて器表面が荒れているため、確実なことはいえないが一般的な手づくね成形とは違う成形のようで、型を用いて作られたものかもしれない。

3区　土坑3－12（第52図　30～34）

30・31・33・34は土師皿である。30・33は口縁部の外方への屈曲が強く、屈曲部には指頭圧痕が明瞭に残る。34はいわゆる「へそ皿」で、15世紀頃のものである。

32は内面及び外面上部に緑色釉を施した陶器碗である。高台は削り出しで作られている。釉色および胎土が違っているが、形態的には135・136の瀬戸陶器碗と似ている。

3区　土坑3－17（第48図　16・第54図　61）

16は瀬戸陶器皿である。内面に重ね焼きの際の目跡が残っている。内面および外面に黄緑色の釉がかけられている。61は染付皿で見込みに印判で五弁花文が押されている。口縁内面には半菊花文などが描かれている。外面には唐草文が描かれ、高台内には「大明年製」銘が書かれている。また口縁に鉄釉による口紅を着せている。

3区　土坑3－3（第53図　35～48）

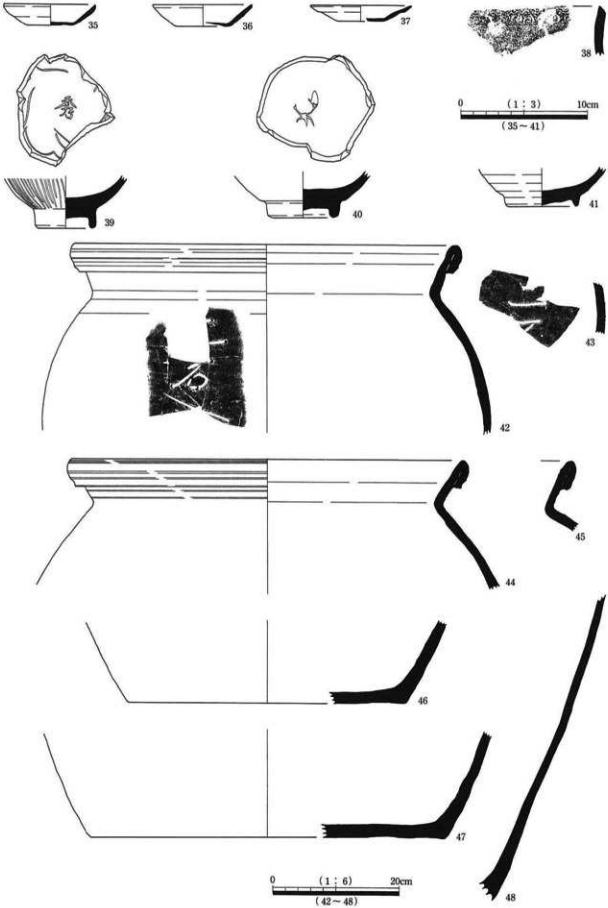
35～37は土師皿である。35は口縁端部に2ヵ所煤けた部分があり、灯明皿として使用されたものかもしれない。体部の底部からの立ち上がりが明瞭である。36も同様に体部の立ち上がりが明瞭である。分析を行っていないために確実なことは言えないが、外面に漆と思われる付着物が見られる。

38は小型の瓦質製品の口縁部であると思われるもので、表面がかなり磨滅しているため、残存部が口縁部なのかどうかも分からないが、外面に右巻の巴文のスタンプが複数押されている。またその周囲にも何らかの模様があるようではあるがはっきりしない。巴の尾が全周していない、巴の頭部にくびれがある、という巴の形より類推すると16世紀後半のものと思われる。

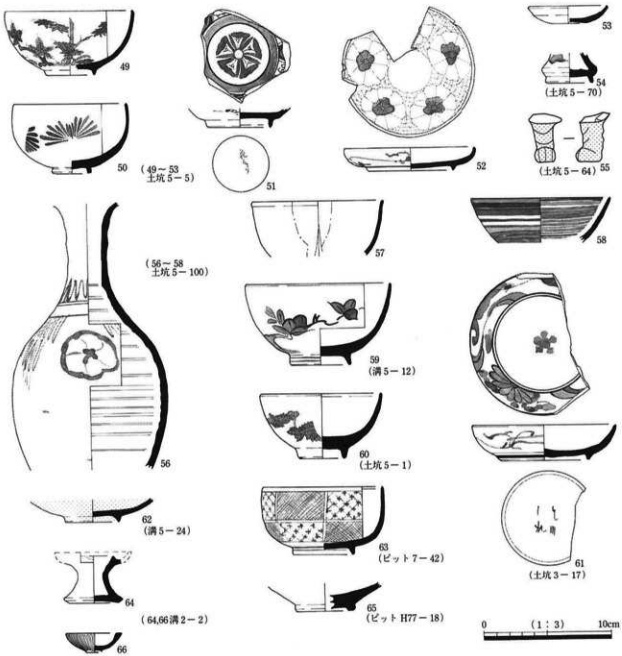
39は龍泉窯系の青磁碗で、外面に細線蓮弁文、内面に刻花が描かれ、さらに見込みには「秀」の字を白泥で書いている。釉は高台内までかかっている。15世紀末～16世紀初頭のものである。40は青磁碗で見込みに牡丹を描いている。釉色は青みがかった色になっている。

41は瀬戸陶器碗である。高台内面に重ね焼きの痕跡が残る。高台の端から垂れた釉がそのままになっているため水平に置くことはできなくなっている。

42～48は備前焼の大甕で、42・43には一部欠けているが、共に「二石入」と刻まれているのであろう。土坑3－3から出土した大甕には二個体ないし三個体分の破片が混じっているものと思われる。口縁部3点・底部2点を掲載しているが、どれとどれが対応するものであるのかは定かではない。また、42と44の2つが違う個体であるのは明らかであるが、45は口縁部と体部との傾きが異なるため掲載したものであり、成形時もしくは焼成時に変形してしまったどちらかの口縁の一部分である可能性もある。48は底部付近の破片であり、最も高い位置まで接合できたものである。これらの大甕は、16世紀後半のものである。



第53図　土坑3－3出土遺物



第54図　遺構出土遺物（近世1）

近世

H77区　ピットH77－18（第54図　65）

65は唐津焼陶器皿で見込みに砂目積みの痕跡が残っている。17世紀中頃のものである。

以下は、18世紀代のものであり、1698年の再興後に使用されていたものであろう。

5区　土坑5－5（第54図　49～53）

49は染付碗で外面に松竹梅文様が描かれている。高台内面に銘が書かれている様であるが、一部しか残っていないので、何と書かれていたのかは不明である。50は陶器碗で赤・青・緑の3色を用いて上絵付で菊花を描く。横から見たものと上から見たものとが描かれている。51は染付碗で見込みに花が描か

れている。見込みの周囲の残りが悪いので確かなことは言えないが、芙蓉手に作られている可能性もある。外面には唐草文様が描かれ、高台内には3～4文字の字が書かれている。52は氷裂菊花文の染付皿である。外面には唐草文様が描かれている。81と同一文様であり、セットになっていたと思われる。53は伊賀・信楽焼灰釉灯明皿である。口縁部の釉が変色しており、見込みに砂粒が付着している。

5区　土坑5－70（第54図　54）

54は御神酒徳利である。高台端部に砂粒が付着している。外面の文様は一部分しか残っていないので不明であるが植物を描いているものと思われる。

5区　土坑5－64（第54図　55）

55は青磁獣脚で、香炉ないし盤の脚部である。接地面には施釉されていない。

5区　土坑5－100（第54図　56～58）

56は染付瓶である。外面には網目文様と朝顔と思われる花が描かれている。内面にも部分的に釉が垂れており、削った痕も内面に明瞭に残っている。57は陶器碗で、赤褐色の部分と淡黄色の胎土の色が見えている部分とに分けられている。その胎土が見えている部分には透明な釉がかけられており、その釉が赤褐色部分に及んでいる部分は黒くなっている。58は唐津焼陶器碗で内外面共にハケで横方向の帯を描いている。基本的には白と茶褐色の二色の帯であるが、内面の方が帯の幅が狭い。白色部分を先に塗っていたようで若干盛り上がっている。

5区　溝5－12（第54図　59）

59は染付碗で外面に樹木を描いている。やや厚手のものである。

5区　土坑5－1（第54図　60）

60は染付碗で外面に樹木を描いているようではあるが文様が滲んでいてはっきりしない。全体的に厚手に作られている。

5区　溝5－24（第54図　62）

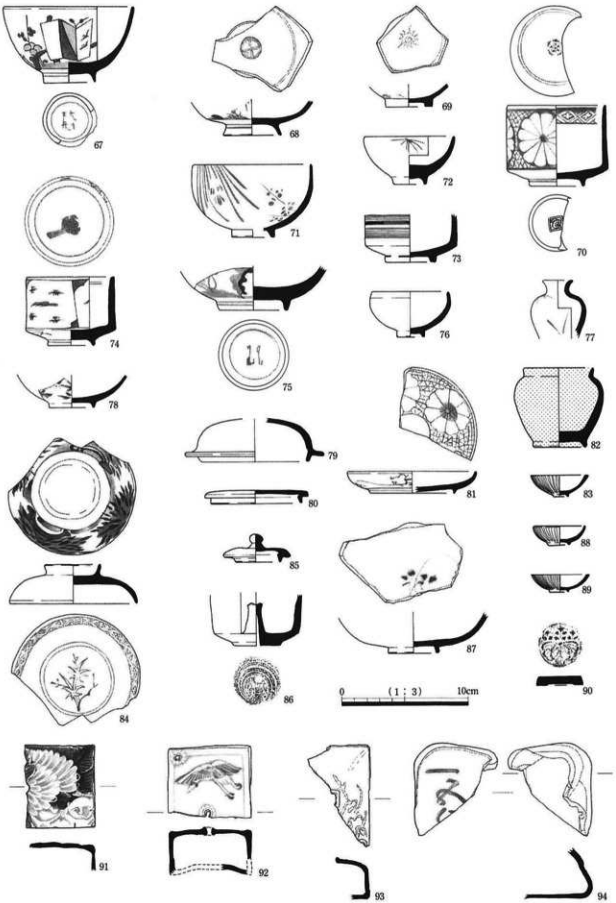
62は青磁皿で高台端部を除いて高台内面まで施釉されている。薄手の小皿である。

7区　ピット7－42（第54図　63）

63は染付蓋物で、外面に石畳地文様が描かれている。口縁端部内面に釉が5 mm幅でかけられていない部分があり、本来は蓋が伴っていたと思われる。器壁は全体的に薄く作られている。

2区・7区　溝2－2（第54図　64・66）

64は陶器有脚受皿である。底面と受皿の端部、内面の一部以外に灰釉がかかっている。底面には煤が付着している。66は白磁紅皿で型抜きによる整形である。



第 55 図　落込 5 － 1 ・集石土坑 5 －10 出土遺物

5区　集石土坑５－10・落込５－１（第55図　67～94）

この２つの遺構は調査時には１つの番号をつけていたが、整理段階で２つの番号を付けたのでどちらの遺構出土のものか区別できないために併記している。

67～69・71・72・76・78は碗である。67は外面に梅と屏風を描いているが、他の染付と違って胎土が茶色を呈し、文様も緑色で描かれている。高台内には「大明年製」銘がある。68は碗としているが蓋である可能性もある。見込みに轡文が描かれている。69は高台の幅が広いものであり、見込みに火炎文が描かれている。71は陶器で、外面に梅と柳？が緑・朱・青を用いて上絵付で描かれている。72は小型碗で外面に竹葉を１つ描いている。

70・73・74は筒形碗である。70は外面に氷裂菊花文を描き、高台内に「福」の字を書き、内面に五弁花を描いている。73は陶器で、外面に刷毛で帯を描いている。74は外面に山水風の絵を描く。見込みに五弁花を描いているが絵の具が滲んで大部分が潰れてしまっている。

77は御神酒徳利で外面の頸部に竹葉を描き、胴部にも葉を描いている。

79・80・84・85は蓋である。79は白磁で壺の蓋である。80は白磁で鉦はなく器高の低いものである。84は外面に花を、内面に四方襷、見込みに樹枝を描いている。85は二次焼成を受けており、外面にかけられている釉が劣化している。かけられている釉は緑色であったと思われる。

81・87は皿である。81は52と同一の柄であり、セット関係にあるものであろう。87は見込みに鉄絵で花が描かれている。

82は青磁小壺である。口縁端部に釉がかけられておらず本来は蓋が伴っていたものと思われる。内外面とも濃い緑色の釉がかけられている。高台端部には釉はかけられていない。

83・88・89は白磁紅皿で型抜き整形によるものである。86は乗燭である。底部には直径0.6cm・深さ約2.5cmの穴が開けられている。この穴は行灯や提灯の底板に打ちつけてある釘に差し込むためのものである。また回転糸切り痕が残る。外面および内面に濃緑色釉がかけられている。胎土は土師質である。

90は表面に桐の文様が型押しされている泥面子である。桐は左右に三つ、中央に五つの花を持つ五三の桐である。裏面中央を若干窪ませている。

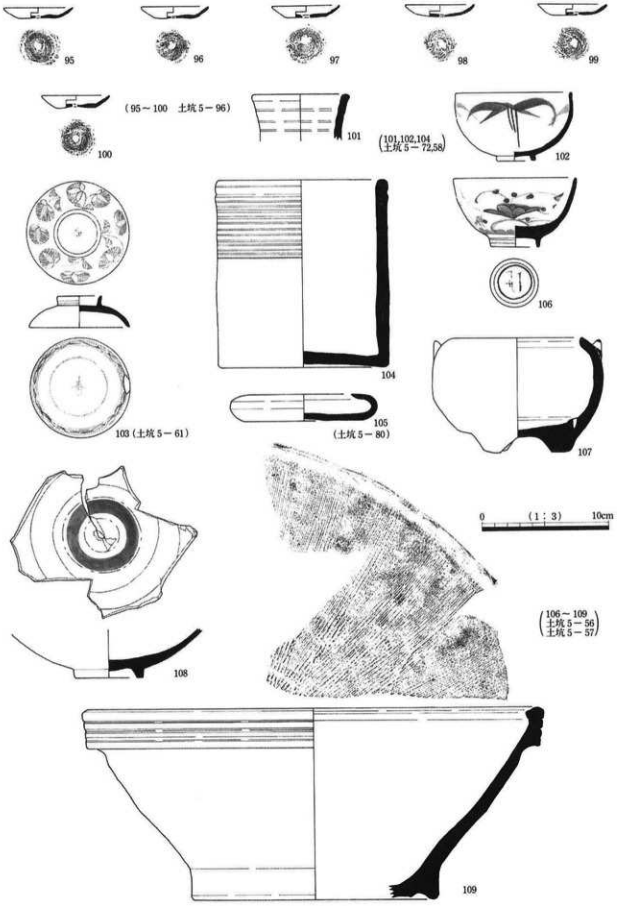
91～94は水滴である。91・92・94が磁器で、93が陶器である。91は花と布袋とその頭に止まったトンボが描かれているようである。緑や青の色が付けられている。92は飛んでいる鶴を描いており、羽に青色釉がかけられている。周囲に菊座を伴った穴が２ヵ所残っている。93は樹木が描かれていて、平面形が四角の穴が開けられている。中央部が盛り上がる形をしている。94は他のものと違って長方形ではなく隅丸の複雑な形をしている。動物などの形をしていたと思われる。底面には文字が書かれている。またこの水滴は二次焼成を受けており、器表面は非常に荒れている。

5区　土坑５－96（第56図　95～100）

95～100は土師皿である。焼成後、底部中央に内側から穿孔されている。内外面に薄く釉がかけられている。灯明皿として作られたものと思われる。底部に回転糸切り痕が残る。枚数が６枚で、墓からの出土ということで六文銭的な性格を持つものかもしれない。

5区　土坑５－72・土坑５－58（第56図　101・102・104）

101は土坑５－72出土の瀬戸美濃陶器碗で内外面に鉄釉がかけられている。表面は風化している。102



第56図　遺構出土遺物（近世3）

は土坑５－58出土の陶器碗で全体に灰白色の釉がかけられ、外面に朱色・緑色・白色？の三色で４つの竹葉が描かれている。104は土坑５－72・土坑５－58出土の破片が接合した備前焼の水指である。外面には口縁の下に凹線が施され、さらにその下に12本の沈線が施される。

５区　土坑５－61（第56図　103）

103は染付蓋である。外面では、鈕内に変形字を四角で囲んだものを書き、鈕の周りに葵を描く。内面は中央に「寿」を書き、その周りに二重の圏線を巡らせる。さらに口縁の周囲に弧線文を描いている。

５区　土坑５－80（第56図　105）

105は土師質の用途不明品である。器高が低くて、口縁部が内側に向かって折れていることから、取り出す必要のあるようなものを入れるための器ではないであろう。出土遺構が墓と考えられているものであることから葬送に関係するようなものである可能性が高い。

５区　土坑５－56・土坑５－57（第56図　106～109）

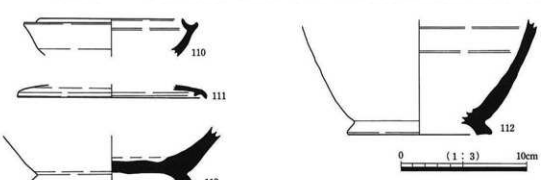
106は土坑５－56出土の染付碗で外面に花が描かれる。高台内面に「大明年製」銘が書かれており、高台の端部には砂粒が付着している。107は土坑５－57出土の瓦質三足火鉢である。口縁の両側に耳が付いており本来は把手が付いていた可能性がある。足を付ける際の印であるのか足のある位置の内面に穴が穿たれている。また外面には漆が塗られていたものか薄い皮膜状のものが付着している。108は土坑５－56出土の陶器皿で見込み部分の釉を丸く剝ぎ、その部分に朱をいれている。109は土坑５－56・土坑５－57・集石土坑５－10・落込５－１出土の破片が接合した堺擂鉢（堀内分類Ⅱ－ａ類）である。一条の櫛本数は10本であり、上端はナデ消されて揃えられている。高台付のもので高台の内側は断面形ドーム状の幅広沈線風に成形されている。口縁部外面に２条の凹線が入れられている。18世紀初頭のものである（堀内1992）。

３）包含層出土遺物

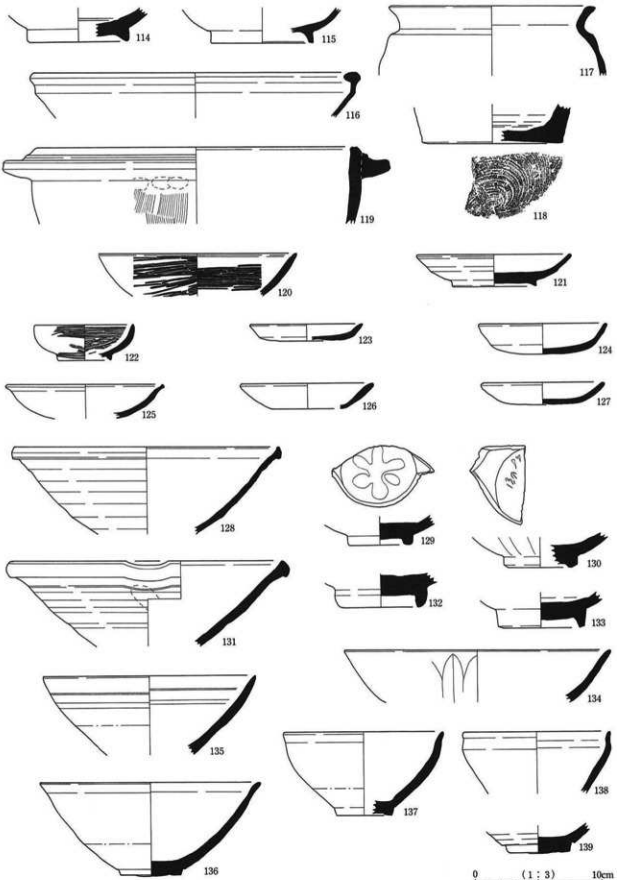
古代～中世（第57～59図　110～151）

110は７世紀後半の須恵器の杯身である。111も同様に７世紀後半の須恵器の蓋であるが、焼け歪んでいた部分であるのか、器高がかなり低くなっている。

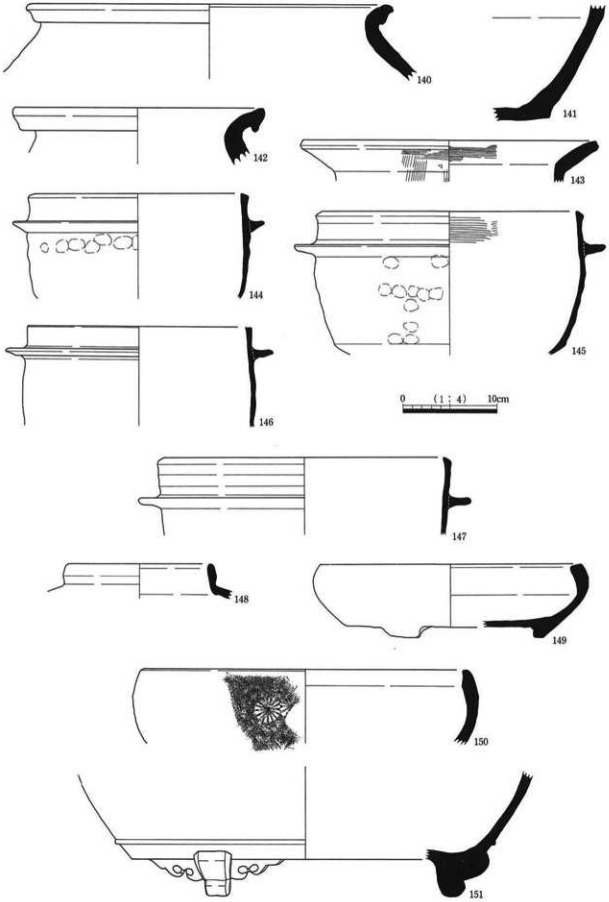
112・113は８世紀後半から９世紀の須恵器の長頸壺である。112の外面には自然釉が垂れている。



第57図　包含層出土遺物（古代）



第 58 図　包含層出土遺物（古代～中世）



第 59 図　包含層出土遺物（中世）

114・115は緑釉陶器椀である。114は近江系で、115は洛西産であると思われる。114は軟質で釉がほとんど剝がれていて部分的に残っているだけである。胎土は土師質である。115は硬質のものである。高い高台を持ち、釉は外面は剝がれかかっているが内面には良好に残っている。

116は須恵器鉢で口縁部を丸く作るものである。117は土師器甕で、口縁部に内外面ともナデられている。北岡遺跡（藤井寺市教育委員会1996）での分類のⅢ類のものである。116・117とも９世紀～10世紀のものである。118は須恵器瓶子で底に回転糸切りの痕跡が残る。119は菅原分類における摂津Ｃ２型の土師器羽釜で、10世紀のものである（菅原1983）。120は黒色土器椀Ｂ類で11世紀のもので、内外面ともに細かいミガキが施され、口縁内面の端部付近に沈線が巡らされている楠葉産のものである。121は陶器皿である。形は灰釉陶器の H72窯式期の皿であるが、釉が全くかけられていない。胎土は灰白色を呈しており、高台内には回転糸切りの痕跡も認められる。釉がかかっていない以外は灰釉陶器であるが、釉がかけられていない以上は灰釉陶器とは呼べないであろう。しかし、生産地から離れた場所で出土している限りは、製品として出荷されたものであろう。10世紀後半～11世紀初頭のものであると思われる。

122は瓦器小椀である。内外面に細かいミガキが施されており、外面は一部剝離しているが分割ヘラミガキが施されているようである。内面のミガキはほとんど隙間なく施されている。瓦器椀の出現期（11世紀中頃～後半）のものであろう。高槻市上牧遺跡でも本例よりは大きいものであるが、Ⅰ期の楠葉型瓦器椀と共伴している例がみられる。123・124は瓦器皿である。いずれも表面が磨滅しておりミガキなどの調整は認められない。

128・131は東播系片口鉢で128は森田編年における第Ⅱ期－１段階(12世紀中葉～後半)、131は第Ⅱ期－２段階（12世紀末～13世紀初頭）である（森田1986）。

129・130・132・134は青磁碗である。129は見込み部分に浅い窪みが認められ、印花の可能性もある。また高台の内面だけが成形後に別の土を充填しているような感じで断面の色が違っている。132は高台内面を丸く釉剝ぎしている。厚手の高台を持ち、端部にも施釉されている。134は外面に蓮弁文様が施されている。133は白磁碗Ⅳ－１類で同安窯系のものである。内面に圏線を巡らしている。

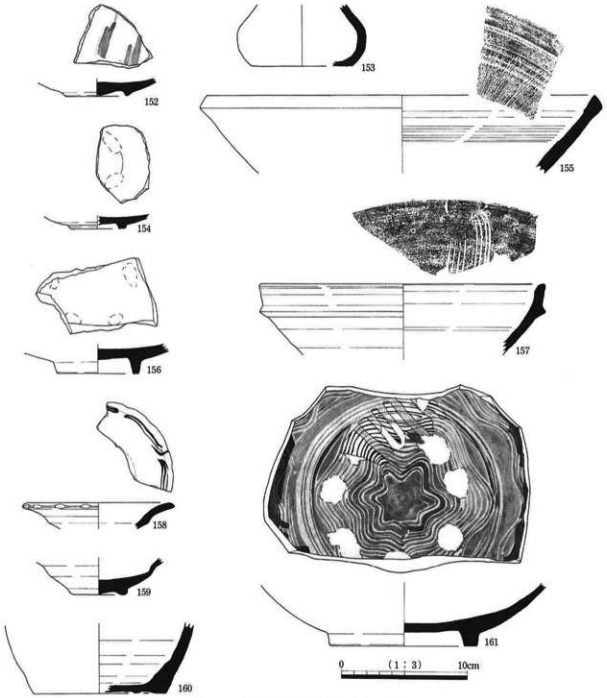
135・136・139は瀬戸陶器碗である。黄緑色の釉が内面および外面中程までかけられている。底は回転糸切りの後に高台の内側だけを削って形作っており、高台よりも底部の中央の方が盛り上がっている。後Ⅱ期の古瀬戸平碗で、時期は15世紀初頭である。

137・138は瀬戸美濃天目茶碗である。後Ⅰ期～後Ⅱ期（14世紀後半～15世紀初頭）にかけてのものである。

140～142は焼き締め陶器の甕である。140・142は常滑焼である。共に口縁部内面に沈線が巡っている。142には内外面共に緑色の釉がかかっている。

143は土師器甕で内面に横方向のハケメ、外面には口縁付近に横方向、その下に縦方向のハケメが施されている。

144～147は瓦質羽釜である。いずれも残存状態が悪く、器表面が磨滅しているためにハケメなどの調整は認められなかった。145のみ口縁部内面でハケメが若干認められるのみである。また144・145では鍔の下や体部に指頭圧痕が認められた。いずれも時期は14世紀である。148は瓦質茶釜の口縁部と考えられるものである。内外面共に調整は認められなかった。149～151は瓦質火舎である。羽釜と同様、器表面が磨滅しており調整は不明である。149・150は浅鉢Ⅲで、150は外面に菊花のスタンプが２個以上を一組として押されている。151は浅鉢Ⅴの脚部で、脚部の少し上方に凸帯を一条巡らせている。



第 60 図　包含層出土遺物（近世 1）

近世（第60～第65図　152～235）

152は染付皿である。見込みには山水画の一部のような線が描かれており、高台端部には砂粒が付着している。153は瀬戸美濃壺で内面および外面に鉄釉がかけられている。底面には重ね焼きの痕跡が残る。154は唐津焼皿で見込みに砂目が 2 個見られる。外面にも砂目が残っている。

155は丹波焼擂鉢である。三田市下相野窯址（兵庫県教育委員会1992）における分類のⅡ型式のものである。口縁端面と体部がほぼ直角をなし、口縁部内面に段が見られ、擂目は 6 本の櫛書きである。17世紀前半のものである。157は備前焼擂鉢で小型のものである。擂目の幅が広くまばらに施されているようで、残存破片内には 5 本の櫛書きのものが 2 筋しか認められない。

156は白磁碗である。内面に4個、高台端部に3個の砂目が認められる。158は青磁皿である。口縁部は外反しており、口縁外面には刻み目を、内面には刻線を入れている。159は唐津焼皿である。見込みおよび高台端部に重ね焼きの痕跡が残る。160は備前焼の甕である。ロクロケズリの痕跡が内外面共に残る。161は唐津焼鉢で、内面に刷毛目文様が施されている。内面には砂目が8個残っている。一部釉のかかり方が不完全な所があり素地が覗いており、素地の上に白化粧土をのせているのがよく分かる。

以下は、18世紀代のものであり、再興後の徳大寺で用いられていたものであろう。

162～166・169・170・174は碗である。163は外面に草花が描かれている。文様の色の発色がやや悪い。高台内面には「福」の字が書かれている。164は外面に向日葵と芥子？および格子が、内面には波状列点文様が描かれている。165は内外面共に無地である。166は小型の碗で外面に二重網目文様が描かれている。169は端反形碗で、外面に樹木や家屋を描いている。174は外面に唐草文様のような文様を描き、内面には轡文のような文様を描いている。167は色絵筒型碗である。緑色で樹木や柵が描かれている。170はいわゆる広東碗といわれるもので内外面とも無地の青磁である。

168・172・173は徳利である。172は植物と思われる文様を描き、173は網目文様を描いている。

175は染付線香筒で外面に節を表現し、竹の絵を描いている。176は染付筒で外面に宝珠・鎖状文様、更に下方にも何か描かれているが、ほんの一部分が残っているにすぎないために不明である。花生に使用されていたものと思われる。179は染付花生で盤口形のものである。頸部から口縁部にかけてしか残っていないので、外面の文様については不明であるが、口縁部内面には巻物が描かれている。

177は用途不明品で何かの飾りであったと思われる。下端には焼き継ぎの痕跡が残っているので修理してでも使用される性格のものであったのだろう。窪んでいる面に唐草が描かれ、先端には蝶が付けられている。

178は青磁三足盤である。内面にヘラで雲？を描いている。

180は色絵仏飯器である。朱色で半菊花風の文様を白抜きで描いており、頸部・脚部には朱色で線を巡らしている。

181は青磁壺である。蛇ノ目高台を持ち、外面および高台内面には施釉されているが、内面には全く施釉されておらず、また重ね焼きの痕跡も見られないので、内面に施釉する必要のない壺などの容器類と考えられるものである。

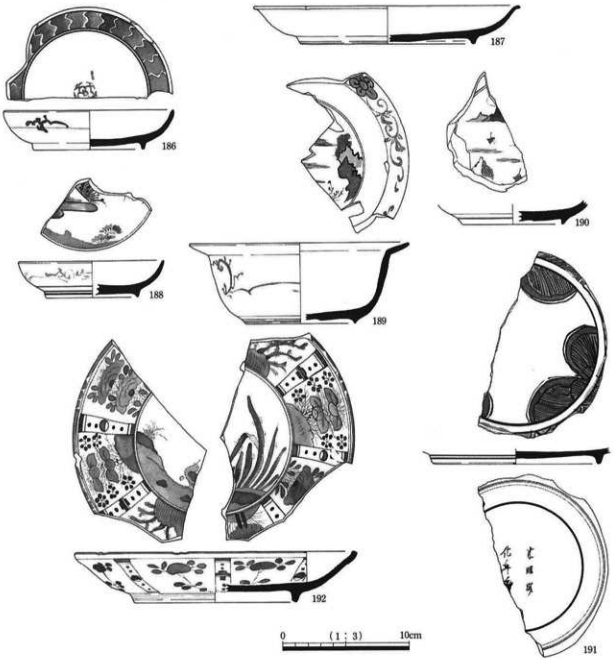
182・183は染付鉢で、182は蛇ノ目凹形高台を持つ。文様は内外面とも体部には直線が引かれているのみであるが、見込みには文様化された篆書体の「壽」字を書いている。183は外面には植物文様が、内面には松竹梅を環状に配置した文様を描いている。

184は陶器皿である。内面と外面上側に青緑色の釉がかけられており、見込みには蛇ノ目釉ハギがされている。重ね焼きをした際に釉を剝いでいない部分に高台があたったようで一部溶着した跡がみられる。

185は染付角皿である。四隅を内側に入れて花形にしている。見込みには魚を描いている。白抜き部分には前もって白線を引いてあり、その後に青色をいれたようで白線は少し盛り上がっている。描かれている魚は一匹のようであるが、頭の上にあるのが背びれだとするとその後ろにある体部分とのつながりがはっきりしない。口に歯があるので鯛であるような気もするが実在の魚ではなく想像上の魚である可能性もある。

186・188・191・192は染付皿である。186は見込みに印判の五弁花文を押し、鉄の様に見える長方形のものが溶着している。口縁内面に波状文様を、外面に唐草文様を描く。188は外面に唐草文様を描き、内

第 61 図　包含層出土遺物（近世２）

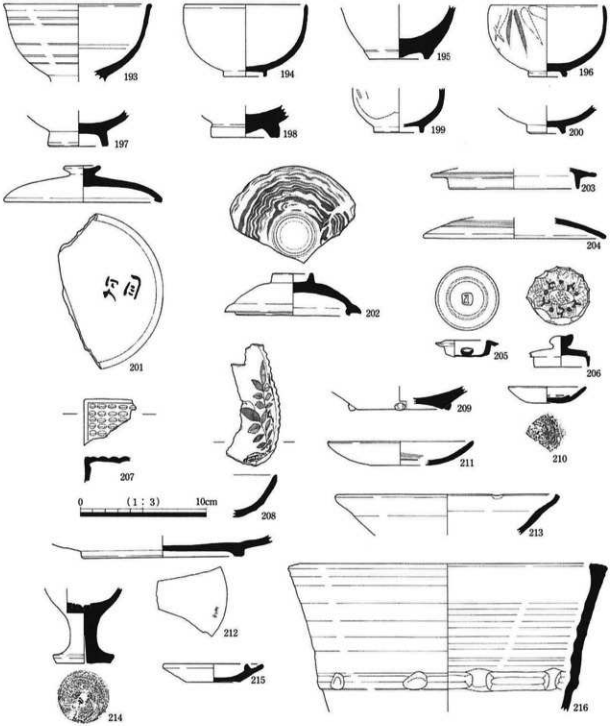


第 62 図　包含層出土遺物（近世 3）

面には植物文様を描く。191は高台内面に「大明成化年製」銘が書かれ、3 ヵ所にハリ跡が残る。内面には何かの植物の葉を描く。192は芙蓉手の皿で見込みに水鳥と水草？を描いている。口縁内面は八分割して向かい合った位置に同じ柄の文様を描いている。吉祥文様であろうが珊瑚と思われるものの他は何か分からない。口縁端部には鉄釉による口紅を着せている。外面には対になっている花卉文様を描く。187は白磁輪花形皿で高台内にハリ跡が 3 ヵ所残っている。

189・190は染付鉢である。同一文様と思われる鉢だが、高台の高さ・蛇ノ目凹型高台の幅等が違うものである。内面には山水文様が描かれる。190に見える逆三角形のものは船であろうか。外面には唐草文様、口縁内面には唐草と花が描かれる。18世紀後半のものである。

193・194・196～200は陶器碗である。193は無地で体部にロクロケズリの痕跡が明瞭に残る。196は外



第 63 図　包含層出土遺物（近世 4）

面に上絵付で竹葉が描かれている。朱色部分以外は色が抜けており痕跡が残っているだけである。197は高い高台を持ち、釉は高台内面までおよんでいる。高台端部の釉は剝いでいる。全体に細かい貫入が生じている。199は外面を白と茶色で塗り分けており、上半の白い部分には何か模様が描かれていたようである。内面も白く塗られている。

195は唐津焼壷である。内面および外面に灰緑色釉がかかる。高台部分のケズリは雑で半分ほどしか削り出されていない。

201～206は陶器蓋である。201は内面に文字が書かれている。また鈕の付け根にはヒビが生じており、鈕が少し歪んでいる。202は唐津焼蓋で外面には刷毛目文様が施されている。文様は釉が部分的に厚くかかっていることで消えてしまっている部分もある。受け口部分には釉剝ぎがなされている。203は中央部が盛り上がるもので、土瓶・急須類の蓋である。204は外面に７本の沈線を施しているもので、行平鍋の蓋と思われるものである。口縁端部の釉を剝いでいる以外は内外面とも施釉されている。205は中央部が凹んでいる落とし蓋で、油注・水注・壺等の蓋である。206は鈕が鳥ないし亀の形をしているもので、外面は施釉されているが内面および受け口部分は露胎である。外面には鈕部分も含めて蜘蛛の巣のような幾何学文様が描かれている。また鈕を取り囲むように「ヒ」の様な模様と青色の点が交互に描かれている。空気抜きの穴も一つ開けられているが釉で塞がってしまっている。この蓋の周縁部は意図的に打ち欠かれており、「加工円盤」と称されているものに含まれるものであろう。

207は陶器水滴で、表面にそろばん玉のような形を並べているものである。

208・212は同一個体と思われる陶器皿で、輪花形に作られており外面には刻み目がある。口縁内面には樹枝が描かれている。高台内には２文字か３文字が刻印されている。

209は陶器急須である。粘土を貼り付けた足を持つ。非常に低い足であり、底がかすかに浮く程度のものである。

210は土師皿で底に回転糸切り痕が残る。内面は施釉されており、受口部が底部付近に作られている灯明皿である。211は伊賀・信楽焼灰釉陶器灯明皿である。内面に擂目状の４本の櫛書きのものが２条施されている。214は土師器秉燭である。底部に回転糸切り痕が残り、中央に直径0.6cm・深さ約2.3cmの穴が開けられている。この穴は行灯や提灯の底板に打ちつけてある釘に差し込むためのものである。内面にある灯芯を受ける部分は根元から折れてしまっている。内面および外面に煤が付着して黒ずんでいる。215は伊賀・信楽焼灰釉陶器受皿である。内面および外面に施釉されているが、底部は露胎である。

216は陶器水指である。外面に桶の箍のように一条の帯が巡っている。この帯は内面から押し出しているもので、等間隔に外面から押さえて窪みを作り出している。内外面とも施釉されているが、口縁端部と内面（端部より8mm幅）には釉がかけられておらず、本来は蓋が伴っていたものであろう。

217～219は陶器行平である。217は六角形の把手上面に「寿」字を書き、その周囲を魚々子風の点で埋めている。把手の先端の周囲は蓮弁を各頂点に配置している。但し、花弁まで表現しているのは上面に見えている二枚のみである。

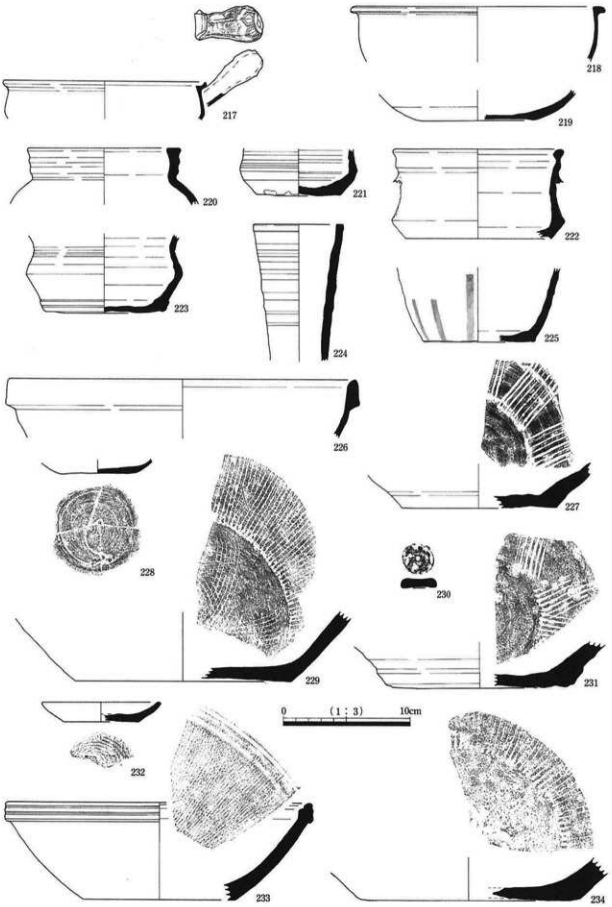
220は全体に暗褐色の釉がかけられている壺である。頸部に２条の凸帯を作っている。

221～223は丹波焼鉢で、胎土に砂粒を多く含んでいる。222には把手が付いていた痕跡がある。

224は備前焼の花立で、下方にいくにつれてすぼまってくるものである。

225は陶器徳利である。外面には白色釉がかけられており、茶褐色の筋が描かれている。

227・229・231・233・234は陶器擂鉢である。いずれもよく使用されており内面はすり減っている。227・231は備前焼である。共に擂目は８本の櫛書きである。229・234は明石焼擂鉢である。体部側面の擂目が底部との境から引き上げられている。平底である。234は見込み部分が剝離しており不明であるが、229は見込み中央の擂目が中央から放射状になっていることから堀内分類のⅢ－b類に該当する。このことから明石焼であると考えるものである。擂目は７本の櫛書きであり、見込みは９本の櫛書きで３条が認められる。233は擂目は９本の櫛書きで上端はナデ消して揃えている。平底である。堀内分類のⅢ－a類に該当すると思われ、堺焼のものである（堀内1992）。



第 64 図　包含層出土遺物（近世 5）

第65図　包含層出土丹波焼甕

226は土師質の炮烙である。大阪府枚方市津田産のもので難波分類のG類である(難波1992)。228・232は底部に回転糸切り痕の残る土師皿である。230は土師質の絵銭形土製品である。磨滅がひどく肉眼ではよく分からないが、拓本では中央に四角の窪みがあることがわかる。拓本でも文様はかなり崩れているが、堺市向泉寺跡で出土している絵銭の文様と良く似ており大黒の文様であると思われる。

235は丹波焼甕である。肩に環状の把手を模したものが貼り付けられている。把手は向かい合った位置に付けられていたようである。体部が内側に湾曲してくる辺りからロクロの痕跡が明瞭に残っている。

2．瓦

1）遺構出土瓦

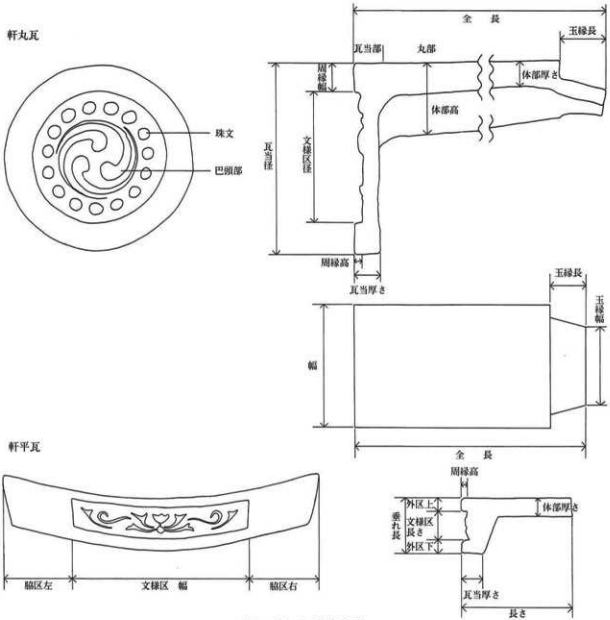
5区　集石土坑5－10・落込5－1（第67図　236～242）

236・237・241は軒丸瓦である。236は瓦当に「徳大禪寺」と書かれており、遺跡名となっている寺院が確かに所在していて、その寺院が禅宗寺院であったことが分かるものである。237・241は巴文軒丸瓦である。237は出土瓦の内で珠文数が最も多いもので、珠文は16個である。241と同じ文様構成を持つものは多く、244・245・248・268が珠文数12個で巴が右巻きの同じ構成のものである。238～240は棟込瓦である。瓦当には菊花の文様が刻まれている。242は軒桟瓦の丸瓦部分である。文様は磨滅しているのか高さがほとんど無くなっている。

5区　土坑5－74（第67図　244・246）

244は巴文軒丸瓦であり、丸部に桟と繋いで固定するための穴（直径1 cm）が開けられている。246は軒桟瓦の丸瓦部分である。粗雑な作りで巴は細く、珠文は粘土粒を貼り付けているに過ぎない。

軒丸瓦



軒平瓦

第 66 図　瓦各部名称

5 区　土坑 5 － 1（第67図　245・247～249）

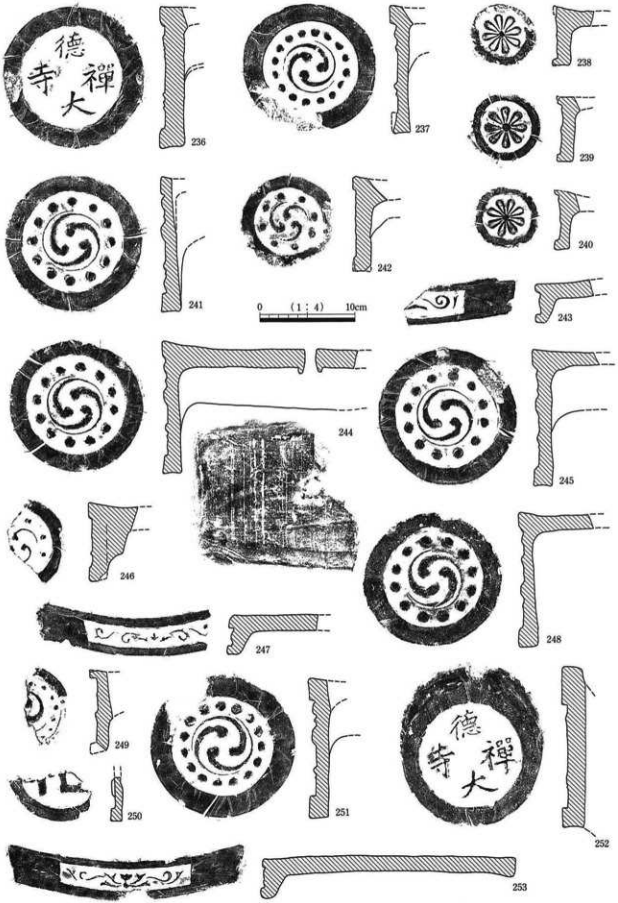
249は軒桟瓦の丸瓦部分で246よりも巴は太くなっているが、珠文は同様に粘土粒を貼り付けた粗雑な作りである。

5 区　土坑 5 －64（第67図　250）

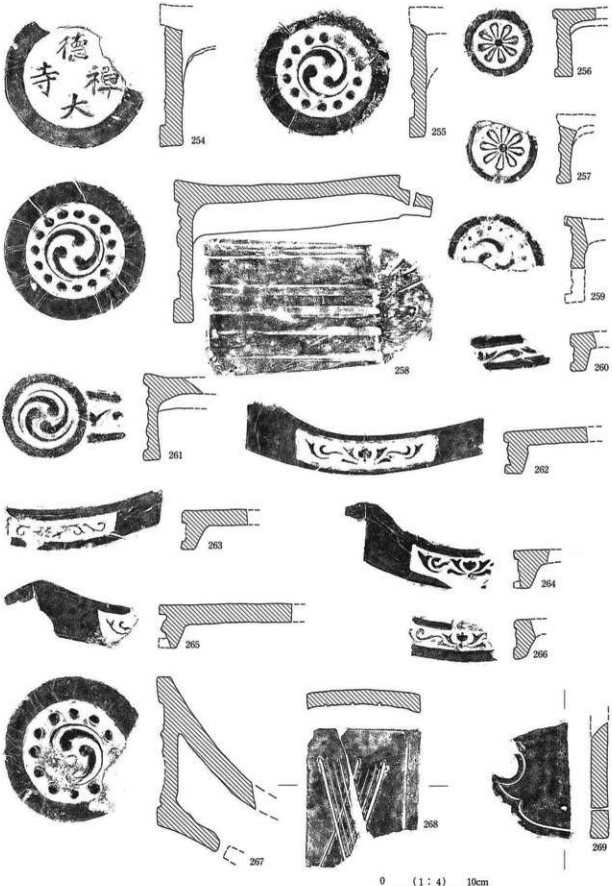
250の瓦当文様は「卍」のようである。この破片のみの出土であるので、軒丸瓦であるのか軒桟瓦の丸瓦部分であるのか不明である。

5 区　ピット 5 －53（第67図　251）

251は巴文軒丸瓦である。完形で残存していた259と珠文の数が同じであることから丸部も同じ形態であったと思われる。


德
禪
寺
大
236
237
238
239
240
241
242
0 (1:4) 10cm
243
244
245
246
247
248
249
250
251
德
禪
寺
大
252
253

第67図　遺構出土瓦


德
禅
寺
大
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
0 (1：4) 10cm

第 68 図　包含層出土瓦

5区　ピット5－44（第67図　252）

252は鳥衾瓦である。236と同様に「徳大禪寺」と書かれているものであるが、范を合わせる際にずれたのか文字が少し斜めになっている。瓦当面の裏側に粘土の接合を良くするために櫛のようなもので傷をいれている。

5区　土坑5－94（第67図　253）

253は軒平瓦でほぼ完形であった。267と同じ文様構成をしており、垂れ部分の形も似ているので同じ形態のものであったと思われる。瓦当面と平瓦部分の一部がいぶしが不十分であり浅黄橙色をしている。

2）包含層出土瓦（第68図　254～269）

254は236と同様「徳大禪寺」と書かれている軒丸瓦である。255・258は共に軒丸瓦であるが255は珠文が14個であり、258は15個である。また258は完形で玉縁に瓦を固定するための穴（直径0.6cm）が開けられている。244と穴の位置と大きさが違うのは使われた場所が違うためであろうか。

256・257は棟込瓦である。瓦当には8弁の菊花が表されている。

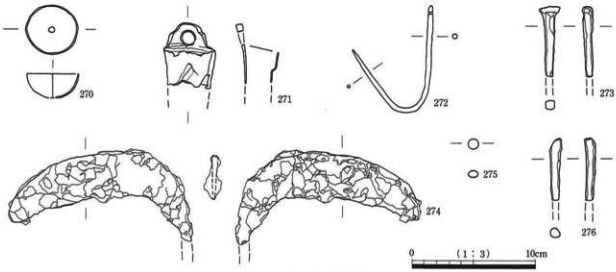
259・261・262・264・265は軒桟瓦である。259は丸瓦部分のみであり、246・249と同様の粗雑な作りである。261は丸瓦部分と平瓦部分が1つになっている状態で残っているものであるが、丸瓦部分の瓦当文様が巴文のみであるのが他のものと異なる点である。平瓦部分はおそらく唐草文様であると思われる。また丸瓦と平瓦の接合部に無文部分を挟まずに文様が始まっているのも変わっているものである。262・264・265は平瓦部分のみの残存であり、瓦当文様はいずれも中心飾に宝相華文を置き両側に唐草文を配するものである。260は軒平瓦であるが他の軒平瓦よりも周縁高が低く、垂れ長が短いことから軒桟瓦である可能性もある。

267は鳥衾瓦である。瓦当の巴文の一部が欠けているが下側の鬼瓦の頭に引っかける部分までが残存している。268は熨斗瓦で、半裁熨斗瓦と呼ばれるものである。半裁熨斗瓦とは焼成前の平瓦に沈線を入れ、焼成後にそこから割ることで熨斗瓦として使用するものである。よって図では左側に破断面が見られる。凹面右側の段は成形台の痕跡である。交差するように入れられているヘラの線は瓦を葺く際に粘土との接合を良くするためのものである。269は道具瓦の一種であり、破風の拝の下もしくはその左右につけて、棟木や桁の先端を隠すための装飾である懸魚と考えられるものである。下方の断面四角形の穴は釘穴である。縁に沈線を入れている。懸魚は一般的には木製のものが多く、また形によって猪目懸魚・蕪懸魚・梅鉢懸魚などがある。

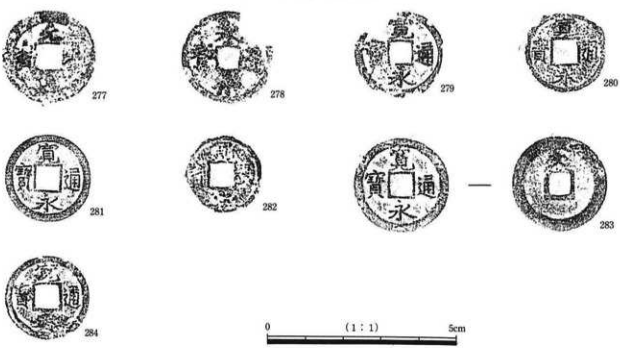
3．金属製品（第69・70図）

270～272は5区集石土坑5－10・落込5－1出土の銅製品である。270は燭台の蠟受けである。中央に穴が開けられており、ここから蠟燭を立てる金具などを通すのであろう。271は筒状製品であり、上部の穴の部分のみが厚く作られていて、この穴に釘などを通して壁に掛け、一輪差しとして用いたものであろうか。残存部分下部には発掘時の損傷によるものと思われる跡があり歪みが生じている。272は鉤状製品である。上部にくびれがあり、ここを糸で縛るかどうかしてフックのように何かを引っかけるために用いたものであろう。

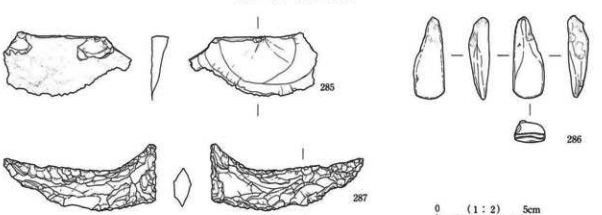
273・276は鉄釘である。いずれも断面方形であり、276では欠損しているが、頭を折り曲げているもの



第 69 図　出土金属製品



第 70 図　出土貨幣



第 71 図　出土石製品

である。先端は共に欠損している。

274は鉄鎌で全体が錆に覆われている。275は5区集石土坑5－3出土の鉛玉である。鉄砲玉とも考えられるが、鉄砲を使うような状況があったとは思えないので何か他の用途が考えられるものであるのかもしれない。

277～284は貨幣である。277は宋銭の元豊通寶（初鋳1078年）と思われるが、銭銘の右半分と裏面が損傷が激しく確実ではない。また日本で作られた模鋳銭の可能性も否定はできない。278は明銭の永楽通寶（初鋳1408年）である。「楽」と「通」の字が錆に覆われておりはっきりとは読めない。これも後に作られた模鋳銭の可能性もある。279～284は寛永通寶である。279は寛永13（1636）年初鋳の寛永通寶1期のもので、いわゆる古寛永と呼ばれるものである。283は裏面に「文」の字がある寛永通寶2期のもので「文銭」と呼ばれるものである。初鋳年は寛永8（1668）年である。溝2－2より出土した。280・281・282・284はいずれも寛永通寶3期のものである。3期の初鋳年は元禄10（1697）年である。

4．石製品（第71図）

285はサヌカイトの剝片である。片面に礫面が残っている。加工面は風化している。287は弥生時代のサヌカイト製小刀で全体的に弧を描く形態をしており、Ⅰ類のものである（平井1991）。286はピットH77－17出土の淡緑色をした石を磨いたもので、垂飾とも考えられるものである。

参考文献

1978　森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4集　九州歴史資料館

1980　『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会

1982　上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会

1983　田口昭二『考古学ライブラリー17　美濃焼』ニューサイエンス社

1983　菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

1984　伊藤晃「備前焼の流れ」『木村コレクション古備前図録』岡山市教育委員会

1984　根木修「近世備前焼の変遷と年代観」『木村コレクション古備前図録』岡山市教育委員会

1986　森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要第3号』神戸市立博物館

1988　大橋康二・西田宏子『別冊太陽63　古伊万里』平凡社

1988　白神典之「堺擂鉢について」『堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告』堺市教育委員会

1990　『白鷗』都立学校遺跡調査会

1990　矢部良明『日本の美術8 No.291備前』至文堂

1991　平井勝『考古学ライブラリー64　弥生時代の石器』ニューサイエンス社

1992　『三田市　下相野窯址』兵庫県教育委員会

1992　『明石市　明石城武家屋敷跡』兵庫県教育委員会

1992　堀内秀樹「『備前系焼締め擂鉢』の系譜－17世紀以降の備前擂鉢及び堺擂鉢について－」『東京考古10』東京考古談話会

1992　難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究　第九』財団法人　大阪市文化財協会

1993　大橋康二『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニューサイエンス社

1994　大橋康二『古伊万里の文様』理工学社

1995　『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

1995　杉山洋『日本の美術12 No.355梵鐘』至文堂

1996　『古代の土器4　煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会

1996　『北岡遺跡』藤井寺市教育委員会

1997　『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第5輯』財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター

1998　『近世の出土銭II－分類図版篇－』兵庫埋蔵銭調査会

1998　『玉櫛遺跡』財団法人　大阪府文化財調査研究センター

第５章　考察・分析

第１節　調査のまとめ

今回の調査では地名の由来となった徳大寺の跡のみならず、縄文時代や古代末から中世にかけての状況も把握することができた。ここではそれらの成果を通時的にまとめるとともに、そこから派生する問題にもふれたいと思う。

検出した遺構の中で最も時期が遡るのは縄文時代の住居址である。可能性があるものも含めると全部で３棟検出した。いずれも平面形態が楕円形を呈するという特徴をもち、その内の１棟では遺構埋土から縄文晩期の土器が出土した。これまでにも縄文時代の遺物が散見されていたことなどにより、当遺跡周辺にこの時期の集落が存在する可能性があることは指摘されていた。今回の調査でその存在を立証することができた訳だが、検出域が限られているため定住性の高い大規模集落があったとは考えにくい。ただ周辺の自然環境を利用しながら移動した人々のキャンプサイトが他にも存在した可能性は高いと考える。

奈良時代の遺構は検出しなかったが遺物包含層からこの時期の土器を検出した。それらはいずれも細片で、正確な時期や器種組成を確認することはできなかった。周辺の遺跡に目を転じると平成６年度の粟生間谷遺跡の調査で検出された奈良三彩の小壺と大形掘立柱建物が知られている。更に勝尾寺川をはさんで南側の丘陵上に位置する庄田遺跡でもこの時期の建物群が拡がっていることがわかった。したがって集落の中心は徳大寺遺跡の西側に拡がる丘陵の先端、およびその南側の段丘上にあったと考えられる。それよりやや奥まった場所に位置する徳大寺遺跡は、そこから派生する活動域の一部に含まれていたものの、居住域からははずれていた可能性が高い。

古代から中世にかけての時期の遺構で特筆すべきものに、鋳造土坑と鍛冶炉・炭窯がある。鋳造土坑は埋土から出土した遺物より10世紀後半に、炭窯は熱残留地磁気年代測定の結果から11世紀前半と考えられる。鍛冶炉は周辺のピットから出土した土師皿が時期決定の根拠となるが、この遺物の性質上正確な時期を判断することは難しい。11世紀を上限とし、12世紀初頭までくだる可能性がある。

鋳造土坑の検出例は７世紀代のものを初現として、14世紀代のものまである。しかし10世紀後半から12世紀前半までの期間は、鋳造遺構のみならず紀年銘のある梵鐘にも類例が認められない空白期間とみなされており、本例はその空白期間に当たる資料として注目される。鋳造にあたっては原料・燃料・水・鋳型を作るのに適した粘土が必要となるが、当地はそれらを得るのに適した場所であったと言えよう。粟生間谷遺跡でも鋳型・ふいごの羽口・炉壁が出土しており、徳大寺遺跡のみならず当地一帯で鋳物づくりが積極的に行われていたと考えられる。なお鋳造土坑に関しては次節で考察を行っているので参照されたい。

鍛冶炉が築かれていた斜面中位の平場は地山を削りこんで作りだされたテラス状のもので、11～12世紀代の遺構の他に14世紀以降のものも検出した。17世紀以降になるとこの平場は盛土して拡張され、棚田に作り替えられている。その盛土から瓦質の羽釜など14世紀以降の日常雑器が多く出土した。盛土は位置的に見て尾根の頂部や斜面を切り崩して供給されたと考えられ、遺物はその際に混入したとみられる。このことからこの時期、尾根部分に集落があった可能性が考えられるが、そうであれば徳大寺の建

立に先駆けて存在したものということになる。

一方、川合裏川をはさんで西側の尾根に展開する粟生間谷遺跡に目を転じると、丘陵上に掘立柱建物をはじめとする平安時代中頃～鎌倉時代の遺構が、広範な調査域全面に検出されている。現時点では調査途中であるため、その具体的な検討は後日に期することとなるが、それらの遺構群は南北朝～室町時代になると終息にむかい、集落は川沿いの低い場所へ移動するという。おそらくこれが中世における本格的な土地開発に伴って生じた中心的な集落だったと考えられる。徳大寺遺跡で想定される集落はそれが移動する時期に出現したとみられるが、両者の関係は不明である。

遺跡名称の由来ともなっている徳大寺に関係する遺構は、主に5区とした丘陵頂部の平坦面で検出した。調査以前は杉の植林のために全面にわたって畝立てされており、西側の張出部では池の痕跡が認められた。北側には土壇状の高まりが2カ所隣接し宝篋印塔が1基と、近世の墓石や中世石仏が十数基並んでいた。後者の中には斜面にもたせかけるようにして置かれたものもあり、場所が移動しているものもあったと考えられる。

徳大寺の沿革や様子については発掘調査の成果に加え、井藤暁子氏が文献資料の調査を行っているので、その成果も含めながら検討したい。文献資料は了翁禅師による寺の再興以降の事情を記したものがほとんどで、建立のきっかけやその時期を知る手掛かりはほとんど残されていない。再興から120年後に記された「寺院舊記帳」によると勝尾寺の僧、行順上人によって開山された真言宗寺院が出発点であり、元は勝尾寺内の教学院住持の兼務寺だったとのことである。「行順」が勝尾寺第6代座主行巡上人と同一人物であれば、寺の創建時期は9世紀代まで遡ることになるが、それを裏付ける資料は現在のところ存在しない。慶長10（1605）年の「摂津国絵図」に「徳大寺村」の名称が認められることから、この時期には寺が存在したとみられる。

寺に関係する可能性のある遺構で最も時期の遡るものは、埋土から複数の備前甕が出土した土坑3－3であろう。これが埋甕遺構であれば屋敷地や寺院などから離れて単独で存在するとは考えにくいからである。この遺構は出土した土器から16世紀後半に属すると考えられ、「摂津国絵図」の存在とも矛盾しない。したがって近世初頭には既に寺が存在した可能性は高い。

徳大寺が了翁によって再興されたのは元禄11（1698）年のことである。これ以降、京都府宇治市にある黄檗宗萬福寺の末寺に属することとなった。そのため徳大寺再興の経緯に関しては、萬福寺が所有する資料などから比較的詳しく知ることができる。「寺院舊記帳」によると、元禄8（1965）年に了翁の師である萬福寺第5代住持高泉が教学院より徳大寺を譲り受け、実際に了翁が徳大寺の再興に着手したのはその3年後のことである。了翁は第3代将軍徳川家光が開基となった江戸上野の天台宗寛山寛永寺に勧学院を設立したことで知られる。これは日本最初の公共図書館とみなされているもので、社会的な事業にも関心が深かった人物と考えられる。

了翁が徳大寺の再興を任された理由として井藤氏は、地の利の良さを挙げられている。それは高野山真言宗の勝尾寺を始めとする霊場に近いこと、亀山街道に抜ける道筋に位置すること、西国街道の郡山本陣に近いことなどである。このような利便性に加え、周囲の地形的環境も禅宗寺院の建立の条件に適していたようだ。『黄檗宗寺院の伽藍計画に関する研究』によると禅宗寺院の寺域には、背後や周囲に山林を望める山中ないし山麓の俗界を離れた静かな場所が選ばれるとのことであり、徳大寺の環境もまさにそれに適するものだった。

了翁は中興に際して方丈・寮舎・鐘楼を建立すると共に、径3尺5寸の大鐘を鋳造して納めた。また

翌年には圓通大士（観音）銅像を本尊として安置し、長さ半寸の小像を広く僧俗に施している。明和6(1769)年、天保9(1818)年、慶応4(1868)年の記録からその後の基本的な建物は観音堂・祖師堂・本堂ないし庫裏・庵・釣鐘堂・愛宕社からなり、一部が廊下でつながっていたとみられる。

これらの中で黄檗宗の特徴を示す建物は方丈と祖師堂のみで、当宗派の伽藍の中で重要な位置を占めるはずの天王殿や斎堂までもが省略されてしまっている。このように宗派特有の堂宇が縮小されたり省略されたりする例は、伽藍規模の小さな寺ではみられることであるらしい。その場合、一つの堂宇に多様な役割が課されていたと考えられる。

一方で当寺には、本来禅宗である黄檗宗とは関係が薄い観音堂や愛宕社が境内に設けられている。これは了翁が本尊として観音像を寄進したことにも通じ、一考を要する。宗派の特色を全面に押し出すより、周辺の人々にとってなじみやすい存在であることに当寺の力点が置かれたためだろうか。そうであれば一見矛盾するようだが、徳大寺は当地域における布教活動の拠点として再興されたと考えることもできよう。

前述した文書の記述を見ると建物の呼称が中興当時とは異なることに気づく。これは建物の呼び方が途中で変化したためと考えられることから、次にその対応関係を検討する。方丈は住持の居所を伴うもので、もともとは客殿とみなされるものだが、奥に仏間をもつことからここに本尊の観音像が安置されたと考えられる。したがってこれが後に観音堂と呼ばれるようになったのだろう。おそらくこれは大伽藍寺院における法堂や仏殿といった、中心的な役割を果たす建物だったと考える。寮舎は衆寮と同じものと考えられることから、禅堂や斎堂といった建物の役割を果たしたとみられ、後にはこれが庵と呼ばれるようになったと考える。このように再興当初の徳大寺の伽藍は、まさに黄檗宗寺院における伽藍配置の最小単位を示すものだったと言える。後に新たに加わった建物は、基本的にこれらの建物の機能を分化させたり補足するために加わったものだろう。

寺の敷地は東西190m・南北126mの規模で、江戸時代を通じて大きな変化は無かったようだ。5区は最大で東西66m・南北60mの広さであることから、寺域はこの範囲で完結していた訳ではない。2区の斜面裾部やその周辺で当該期の遺構を検出していること、今回の調査範囲には含まれていないが北側の貯水池の西側にも愛宕神社の境内のように、わずかに平場を作りだしている部分があることから、斜面も含めた尾根の先端部と、その周辺を寺域としていたと考えられる。

5区北側の墳状の高まりにあった墓石に関しては、川合地区の墓地に改葬する必要が生じたため、調査に先立って埋葬部の有無を確認した。またこれらの墓石は銘文から、徳大寺の住持や留守居を祀ったものであることがわかった。その中で墓石の下や後方から蔵骨器を検出したのは4基あり、陶質の壺や瓦質火舎・湊焼きの壺など日用品が転用されていた。

調査の過程で5区は尾根の上部を削平し、その土を1区側の斜面と6区側の斜面に盛土して幅を拡張したものであることがわかった。拡張部分にトレンチを掘って部分的に土層断面を観察したが、遺物が含まれていなかったため、どの時期に整地されたかを特定することはできなかった。

5区南西隅の張出部分に位置する池は調査前から窪みが残っており、寺に伴う苑池ではないかと想定されていた。調査の結果この池は地山を大きく掘り窪めて作ったものであることがわかった。後世の農業用水確保のための池とみるのは、このような方法で作られたこれほどの規模のものが他に無いこと、東側に近接して小支谷を利用して作った溜め池があることから不自然で、寺に伴うものだったと考えられる。この他にも水を溜めたと考えられる遺構に落込5－1と集石土坑5－10があった。前者は溝状の

素掘りの落込で、これが埋まってしまった後に一部を掘り直して壁面に石を積んだものが後者である。いずれも不整形で停水性の埋土から大量の瓦や磁器などの日常品が出土しており、多様な機能を持った水溜めだったと考える。

本報告書で集石土坑とした遺構の大きさは、10.30m²～0.16m²と幅があるが、面積を計測できた12個の中で1.0m²未満のものが9個と多数を占めた。そのうち0.50m²前後の円形で、人頭大～こぶし大の円礫が数個込められていた土坑は、根石を含んだ柱穴だったと考えられる。柱穴は後世の削平によって大半が失われてしまったとみられ、具体的な建物の形状や配置を復原することはできなかった。ただ集石遺構５－１、集石土坑５－12・13のように調査区北側の高まり部分でも同様のものが検出されていることから、建物は立体的に配置されていた可能性もある。

溝に着目すると方向軸が近似するもの、途中で矩形に折れ曲がるものや直交するものが多いことに気づく。したがってそれらは建物の周囲を取り囲んだ雨落ち溝や、排水用の溝だった可能性が考えられる。溝の端部が池や落込、斜面際に取りつく傾向があるのもそのためだろう。おそらく建物の方向軸は溝の方向と一致するものだったと考えられる。これらのことを考慮し、本章第３節で建物配置の復元案を幾つか作成したので併せて参照されたい。

検出した土坑の中には墓とみられるものをいくつか認めた。ただ検出した土坑を全て墓と考えているわけではない。平面形態が正円形もしくは正方形で、壁面がほぼ垂直に掘り下げられているものに関して、その可能性が高いと考えている。それらの条件を満たすものの平面積は0.4m²弱から1.6m²強まであり、1.0m²より大きなものと0.5m²前後のものにまとまる傾向がみられ、土葬と火葬の違いを反映している可能性がある。それぞれに直葬墓か、木棺もしくは蔵骨器を伴うものの区別があったとみられる。これらの大半は棺を持たない素掘りのものだったが、水はけのよい丘陵頂部にあるため有機質の遺物が腐食して残存せず、棺材が検出できなかった可能性も高い。それは骨がほとんど検出できなかったことからも肯定できよう。火葬墓の可能性があるものに関して言えば、蔵骨器を有するのは寺の住持の墓４基のみだったが、それ以外の火葬墓には蔵骨器が使用されなかったかというと、前述の状況に照らしてみれば必ずしもそうとばかりは言い切れない。火葬骨を陶磁器だけでなく、元は他の用途に使われていた小型の桶類や木製容器を転用したもの、布袋などに納めて埋葬した可能性も考えられるのではないだろうか。

副葬品とみられる遺物を検出した遺構も少数あった。それらは主に京焼系の陶器などを１～２点有するものである。いずれも日常品と呼べるもので、それ自体は特別な意味合いを有するものではなかった。被葬者が生前愛用していたものを納めたのだろうか。

その中にあって６枚の土師皿を出土した土坑５－96はやや異なった様相を帯びる。土器はいずれも焼成後に底部中央を穿孔したもので、内外面に透明の釉薬が薄くかけられていた。底部には回転糸切り痕がみられ、口径は5.5cm 弱、器高は1.0cm と規格性が高い。土器の形状から灯明皿として作られたと考えられるが、使用痕跡はなく転用品とは考えられない。中央に穴を開けた土師皿を６枚揃えることで、六道銭を模したと考えられる。六道銭とは死者を葬る際に棺や墓壙等に納める銭のことで、三途の川の渡し賃と考えられており、仏教でいう「六道」に関連付けて６枚納められることが多い。その初現は中世後期に遡るが、一般的な習俗として秩序付けられるのは近世に入ってからのことである。

小林義孝氏によると中世墓における銭貨の出土状況は多様であり、その点数もまちまちだという。その様相を概観した上で小林氏は、葬送儀礼における呪具としての銭貨の使われ方の多様性に言及すると

ともに、近世における六道銭は「中世墓にみられる多様性を刈り込んでいった結果」成立したものと想定されている。もちろん近世においてもなお、六道銭に関する作法やその意味合いは多様だったと考えられるが、小林氏の指摘するように大局的には「遺骸に付す銭貨の点数には、6点という数を基本とする原理が存在する」と考えられる。

六道銭には通常、銅銭が使用されるけれども、紙に字をかきつけて銭に見立てたものや題目銭・念仏銭のように貨幣としての流通機能を持たないものを使用することもあった。本例もそのような疑似銭の中に含まれよう。

このような疑似銭の存在によって、人々の貨幣のみかたの変化がより一層明らかになるのではないだろうか。中世の人々は貨幣に対し、本来の流通機能に加えて呪具としての機能も与えていたと考えられる。それは貨幣に対して感じる特別性を押し拡げ、非日常的な儀礼や呪いの場に応用した結果だろう。しかし近世に入って流通活動が一層の発展をとげると、貨幣に対する実利的な側面がより強く意識されることとなり、他の側面が弱まってきたのではないだろうか。その結果として慣習の中の行為がより強く意味づけられることになり、本例のような疑似銭の出現をもたらしたとも考えられる。

徳大寺は明治4(1871)年に天真院から高槻県に閉寺願いが出されて閉山する。慶応3(1867)年5月に留守居に入っていた尼層2人が物盗りに殺害された後は無住となり、ついに再興されることはなかった。廃絶後の寺域は田や畑・杉の植林に作り替えられ、そこに寺があったことは壇状の高まりに残されていた宝篋印塔や墓石、所々に積み上げられた瓦によってかろうじて伺えるに過ぎない状態となった。また5区の南西隅に位置する池は、西側の縁に土管を通した暗渠を埋め込み、下の棚田にむけて水が落ちるように作り替えられていた。そのような中で寺の存在が地元の人々の記憶からも薄れていったのは、自然のなりゆきといえよう。

国際文化公園都市の整備終了後は、徳大寺があった場所は地形も含めてすっかり形を変え、その痕跡を伺うこともはやかなわなくなる。寺に関する本節の考察は、発掘調査結果と現存する文献資料を基にして行ったが、寺の運営方法にも関わる周辺村落との関係などについてはなお不明な点が多い。筆者の力量不足にもよるものだが、今後の検討課題としたい。また今回の調査により徳大寺のみならず、縄文時代に始まり古代・中世にいたる当遺跡の様相を捉えることができたのも意義深いことだった。これに関しては今後、周辺の調査が進むのと並行して、より具体的に検討することが可能となろう。

参考文献

1998　井藤暁子　「黄檗宗了翁禅師再興の近世寺院『徳大寺』の歴史調査」『黄檗文華』第117号

1991　井汲隆夫　「副葬品と信仰具」『發昌寺跡－社団法人金融財事情研究会新館建設に伴う第2次緊急発掘調査報告書－』社団法人金融財政事情研究会・新宿区南元町遺跡調査会

1999　小林義孝　「『六道銭』小考」『HOMINIDS』Vol 1．2

1983　櫻井敏雄・大草一憲　『黄檗宗寺院の伽藍計画に関する研究－法雲寺の建設と伽藍計画を中心として－』美原町史紀要『美原の歴史』特別号

1996　嶋谷和彦　「出土六道銭からみた近世・堺の墓地と三昧」『江戸遺跡研究会第9回大会　江戸時代の墓と葬制〔発表要旨〕』主催　江戸遺跡研究会

1994　藤沢典彦　「六道銭の成立」『出土銭貨』第2号

第１表　土坑面積計測表

遺構番号	計測値	タイプ	遺構番号	計測値	タイプ	遺構番号	計測値	タイプ
土坑３－15	0.85	a	土坑５－24	3.12	a	土坑５－64	1.21	b
土坑３－16	0.47	a	土坑５－25	0.20	a	土坑５－65	0.30	a
土坑３－17	1.98	a	土坑５－26	0.55	a	土坑５－66	0.22	a
土坑３－18	1.63	a	土坑５－27	0.61	c	土坑５－67	0.32	a
集石土坑５－１	0.58	a	土坑５－28	0.83	a	土坑５－68	0.67	a
集石土坑５－２	0.58	a	土坑５－29	0.33	a	土坑５－69	2.85	c
集石土坑５－３	0.90	b	土坑５－30	0.43	a	土坑５－70	2.40	b
集石土坑５－４	0.16	a	土坑５－31	0.30	a	土坑５－71	1.65	a
集石土坑５－５	－	b？	土坑５－32	0.87	a	土坑５－72	1.32	b
集石土坑５－６	0.48	b	土坑５－33	0.98	c	土坑５－73	0.17	a
集石土坑５－７	0.94	b	土坑５－34	0.23	a	土坑５－74	1.05	a
集石土坑５－８	0.22	a	土坑５－35	0.73	b	土坑５－75	0.79	a
集石土坑５－９	0.93	b	土坑５－36	0.33	c	土坑５－76	2.67	b
集石土坑５－10	10.30	a	土坑５－37	0.38	a	土坑５－77	2.25	b
集石土坑５－11	8.29	a	土坑５－38	0.43	c	土坑５－78	0.42	a
集石土坑５－12	0.48	a	土坑５－39	0.24	a	土坑５－79	0.82	c
集石土坑５－13	1.69	a	土坑５－40	1.03	a	土坑５－80	0.50	a
土坑５－１	1.58	b	土坑５－41	2.20	a	土坑５－81	0.46	c
土坑５－２	0.28	a	土坑５－42	0.73	a	土坑５－82	1.71	c
土坑５－３	0.29	a	土坑５－43	0.76	a	土坑５－83	0.29	a
土坑５－４	1.02	a	土坑５－44	0.37	a	土坑５－84	0.23	a
土坑５－５	4.31	a	土坑５－45	0.61	a	土坑５－85	0.59	a
土坑５－６	0.24	a	土坑５－46	1.71	c	土坑５－86	1.43	c
土坑５－７	1.86	c	土坑５－47	0.78	a	土坑５－87	1.87	a
土坑５－８	0.61	a	土坑５－48	0.46	a	土坑５－88	0.33	a
土坑５－９	0.44	a	土坑５－49	0.96	c	土坑５－89	0.22	c
土坑５－10	0.43	a	土坑５－50	0.35	a	土坑５－90	0.89	a
土坑５－11	0.33	a	土坑５－51	0.31	c	土坑５－91	0.38	a
土坑５－12	0.33	a	土坑５－52	0.23	a	土坑５－92	1.64	c
土坑５－13	0.41	c	土坑５－53	0.20	a	土坑５－93	1.27	c
土坑５－14	0.31	a	土坑５－54	0.54	a	土坑５－94	0.25	a
土坑５－15	0.68	a	土坑５－55	0.51	a	土坑５－95	0.39	a
土坑５－16	5.34	b	土坑５－56	0.38	a	土坑５－96	0.48	a
土坑５－17	8.23	b	土坑５－57	1.18	a	土坑５－97	0.78	a
土坑５－18	5.64	b	土坑５－58	1.13	a	土坑５－98	0.39	a
土坑５－19	1.65	a	土坑５－59	0.37	c	土坑５－99	2.66	c
土坑５－20	1.05	b	土坑５－60	0.32	a	土坑５－100	0.30	a
土坑５－21	0.96	a	土坑５－61	0.35	a	土坑５－101	1.63	c
土坑５－22	0.25	a	土坑５－62	0.44	a	註）タイプａ－平面円形 タイプｂ－平面四角形 タイプｃ－平面不整形		
土坑５－23	0.32	a	土坑５－63	0.30	c			

第2節　鋳造遺構について

前章において記述したように、本遺跡では梵鐘鋳造に関わると推定される遺構を検出した。ここでは、これらの検出状況を詳述すると共に、若干の検討を試みたい。まず、梵鐘鋳造遺構についての先行研究をまとめ、その後本遺跡の遺構について若干の検討を行う。

1）古代の梵鐘鋳造遺構とその研究史抄

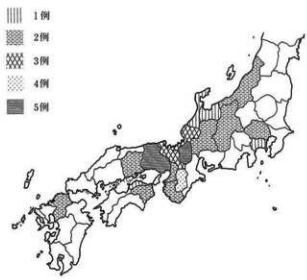
梵鐘鋳造遺構の研究の歴史は浅く、遺構の認識自体が1960年代である。それ以降、緊急発掘調査の急増により類例も増加し、現在までに45例を数える。梵鐘自体の遺物学的研究としては、坪井良平氏の『梵鐘の研究』が著名であり、その緻密な分析など現代でもその重要性は変わらない。[註1] 現存梵鐘の資料集成を基礎として、梵鐘の様式・紀年銘鐘を中心とした様式的変遷の把握といった梵鐘研究の基礎の全てを坪井氏の研究に負っているといっても過言ではない。

梵鐘の鋳造関連と考えられる遺構が初めて認識されたのは、1963年の赤松啓介氏による神戸市須磨区での鋳型の採集と溶解炉と考えられる遺構の検出である。しかし、当時はほとんど注目を集めなかったようである。しかし、それ以降各地で類例が増加し、1981年には京都府下での複数の梵鐘鋳造遺構の検出を契機に梵鐘をテーマとした研究会・雑誌の特集号などが行われた。

1980年代後半以降、各地で広域にわたる古代の複合的生産関連遺跡の調査が行われ、これらによって資料数が急増した。こうした状況下、関連資料数の増加を受けて、京都において「鋳造遺跡研究会」が開催された。古代中世の鋳物生産の実態が把握されてゆく中で、梵鐘についてもこの研究会などを中心に、研究が進んでいる。梵鐘鋳造についての主要な研究としては、五十川伸也氏・神崎勝氏・吉田晶子氏などの研究が挙げられる。[註2]

2）梵鐘鋳造遺構の分布時期的変遷

ここでは、五十川・神崎両氏の研究を基に梵鐘および梵鐘鋳造関連遺構を地域的・時期的な観点からまとめてみたい。国内における梵鐘鋳造関連の遺構は、時期によってその分布に偏りがあることが知られている。都道府県別に見て行くと、兵庫・滋賀（各5例）、奈良（4例）、京都・福井（各3例）、大阪・和歌山・岡山・徳島・福岡・岐阜・長野・新潟・東京（各2例）、神奈川・富山・石川（各1例）となる。本遺跡を加えて45例である。



第72図　梵鐘鋳造遺構分布図

古代に属する資料について、時期的な検討を加えると、7世紀代2例、8世紀代7例、9世紀代2例、10世紀代3例、その後時期的な空白をおいて12世紀後半に4例が確認されている。これら以外は、現段階では時期は明確ではないものである。

しかし、ここで注目されるのは、10世紀前半

に位置付けられる大和の巨勢寺跡出土遺構以降、12世紀前半の近江の坂本八条遺跡例まで、鋳造遺構が全く見られない点である。この点に関しては、梵鐘自体の研究においても、「空白の2世紀」と言われ注目されてきた平安時代中期の現存する紀年銘鐘の空白期間とも時期的に符合するため注意を要するであろう。

「空白の2世紀」については、坪井氏が指摘したもので、貞元2年（977年）銘の井上ふみ蔵鐘から永暦元年（1160年）の廃世尊寺鐘まで、約200年間の間に作られた紀年銘鐘が知られていないと言う事実に基づく。

これについては杉山洋氏が問題とされていた宇治平等院鐘の時期的な問題に絡んで論じている。[注3] この中で杉山は、従来坪井によって11世紀中頃と推定されていた宇治平等院鐘の年代を12世紀後半に修正した。「空白の2世紀」については、9世紀以降に地域的・階層的差異はあるものの鉄製品が広範に普及したと考えられることから、鋳物師の多くがこの時期に広範な需要に支えられて鋳鉄鋳物を中心とした一般向けの生産に転化し、青銅鋳物生産が衰退して言った可能性を指摘している。また、12世紀後半の梵鐘生産の再開については、11世紀後半に始まる天台宗や真言宗の勧進聖の勧進活動を契機として仏教関係の仏器生産の需要に支えられる形で再開されるのではないかと言う推定を述べている。

3）梵鐘鋳造遺構の実態

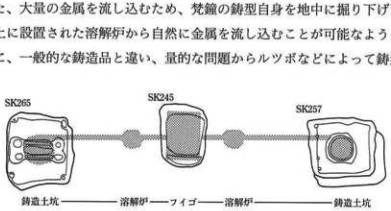
梵鐘においては、鎌倉時代以降和鐘が成立する。梵鐘は、仏教伝来以降、平安時代中頃まで大陸からの技術移入以降、伝統的製作技法を徐々に消失させながら変容し、鎌倉時代に至って現代まで続く定型的な和鐘を完成させたと言う。これは、製作に関わる諸々の事象についても同様であろう。

調査成果でも述べたように、本遺跡においては、梵鐘の鋳造の際に使用されたと考えられる土坑と若干の鋳型が見つかっているに過ぎない。また、周辺には柱穴と考えられるピット列は見つかっているものの、溶解炉・フイゴ座などの鋳造に必要な遺構は特定できていない。

ここでは現在まで知られている梵鐘鋳造土坑を中心に各地の類例を検討し、本遺跡検出鋳造土坑の理解の助けとしたい。

梵鐘鋳造においては、通常梵鐘の鋳型を据付ける土坑・鋳型に流す銅（鉄の場合もある）を溶かす溶解炉・そこから溶かした銅を流し込むための湯道などの存在が考えられる。また、この他にも周辺には関連する幾つかの遺構があったものと考えられる。

具体的には、梵鐘はその製品の特殊性ゆえ、一般的な鋳造品と違い鋳型を据え置くことが通常である。また、大量の金属を流し込むため、梵鐘の鋳型自身を地中に掘り下げた位置に設置することによって、地上に設置された溶解炉から自然に金属を流し込むことが可能なようにされていたことが推定される。特に、一般的な鋳造品と違い、量的な問題からルツボなどによって鋳型に流し込むことは困難だったと推定される。



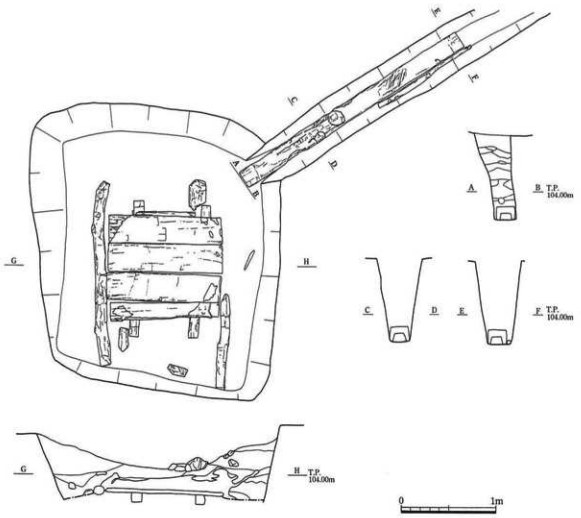
第73図　梵鐘鋳造工房のシステム復元想定図（五十川1988一部改変トレース）

したがって、梵鐘鋳造関連の遺構を調査するにあたっては、これらの施設を総合的に認識して行くことが必要であろう。しかし、実際にはこれらの関連する遺構がまとまって

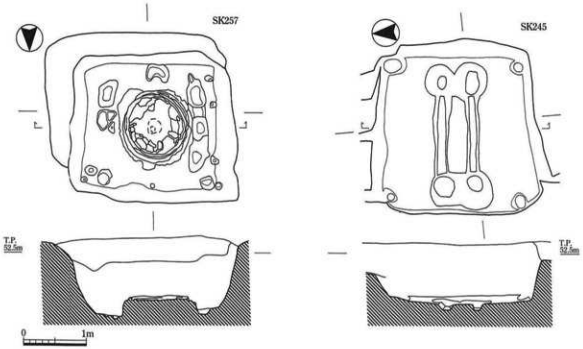
検出されることはまれである。梵鐘鋳造遺構の多くは、梵鐘鋳型自体を据え置いた梵鐘鋳造土坑といわれるものが検出されている場合がほとんどである。理由としては、この遺構がもっとも深く、遺構面の削平にも関わらず依存する場合が多かったようである。したがって、本稿では、当遺跡においても検出された梵鐘鋳造土坑を中心に検討を試みたい。

一般に梵鐘を鋳造したと考えられる土坑は、一辺が2～3 mの隅丸方形・円形などの形状をしている。深さは1 m程度のものが多いが、考古学的資料の当然の制約により当時の地表面が残っている場合は少なく、実際の深さがどれぐらいであったのかは推測の域を出ない。中には、鋳造後の梵鐘取り出しの補助として、連結してスロープ状の土坑が検出されている場合もある。

検出遺構例を見て行くと、そのほとんどにおいて梵鐘の鋳型を土坑の中に据え付けるために作られた定盤もしくはその定盤の基底部が検出されている。本書39ページの模式図にもあるように、梵鐘鋳造土坑の下部構造には底鋳型を含む土台部である定盤が構築されている。定盤の構築にあたって、木材などにより下部の骨組みを構築している場合が多い。しかし、木組みが依存している場合は少なく、前述の土坑底面に平行に並ぶ2本の溝などを検出している場合が多い。また、土坑底面では、これらの溝と共にやや浅めのピットが検出されることがある。ピットは、平行して並ぶ溝の各両端部に見られる。



第74図　奈良県巨勢寺跡検出の梵鐘鋳造遺構（木下1989より一部改変トレース）



第75図　京都大学構内遺跡の梵鐘鋳造土坑（五十川1988より一部改変トレース）

しかし、先述のようにピットは一般に浅く、重量のある梵鐘などの取り上げ用の構架材の可能性は低く、掛木痕跡である平行する溝両端部にあることを考えると、設置した掛木などを縛る際の作業空間としての役割が推定されている。

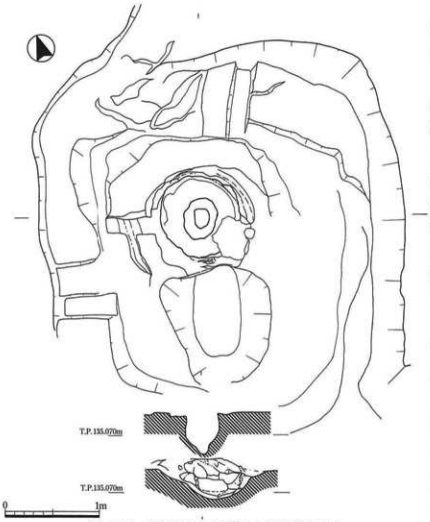
奈良県東大寺戒壇院東地区の鋳造土坑では土坑の規模が一辺7 m・深さ4 mで一辺が20～30cmの角材や直径10～20cmの丸太材を利用して「井桁状木組」を組み、その上に3段もの石組み施設を構築したものが見られる。[註4] ただし、この東大寺例は、規模もその複雑さも他に例を見ないものであり、直接的な比較は難しい例であろう。

奈良県巨勢寺跡検出の遺構においては、一辺10cmほどの2本の角材（掛木）を土坑底面に設置し、その上に長さ1.2m、幅0.3m、厚さ5cmの板材を4枚、掛木に直行するように並べている。[註5] この板材の上面には、直径1.2mほどの円形に焼け焦げた痕跡が認められ、鋳型外型を設置した痕跡と考えられると言う。

また、京都大学教養学部構内AP22区の調査においては土坑内部から定盤が良好な状態で検出され、その中から4本の掛木が井桁状に組まれ鉄釘で固定されている状況が明らかになっている。[註6] また、この遺構に近接して土坑底面に2本の掛木の痕跡だけが残る鋳造土坑をもう1基検出している。

近年の例や絵画資料などを参考にすると、これらの掛木は、定盤の鋳型設置部分の下に構築されており、梵鐘鋳型を載せる台の下部構造であるとともに、梵鐘鋳型を上下から挟み固定するための施設の役割を担っていることが想定できる。[註7] 溝両端の浅いピット列も左右から鋳型を固定するための紐を縛った部分の痕跡などの役割を担っていたとの指摘もある。

しかし、鋳造時の土坑のあり様については、掛木の問題とも絡んで、中井一夫氏の重要な指摘がある。東大寺戒壇院の鋳造遺構では、鋳型を据えるための基底部は石が敷かれており、それらを固定するためと考えられる土が入れられていた。鋳型基底部から下は土で埋まっていた可能性が高いと言うのである。



第 76 図　滋賀県木瓜原遺跡の梵鐘鋳造土坑
（横田 1992 より一部改変トレース）

これでは、掛木を上下の締め付けのため紐などで縛ることは出来なくなる。

滋賀県木瓜原遺跡の鋳造土坑においては、鋳造時には外型全体が白色粘土で塗り固められ鋳型がその周りを土で埋められていた可能性を指摘されている。[28,8] 下部構造としての掛木などは全く検出されていない。この他にも鋳型内型下部からガス抜き穴と推定される遺構が検出されている。

これらの問題から中井は、前述のような掛木を鋳型固定用の締め付け施設であると言うよりは、複数回鋳造時の鋳型カサアゲに利用されたのではないかという指摘を行っている。こうした理解も一案であろう。

4）徳大寺遺跡の遺構

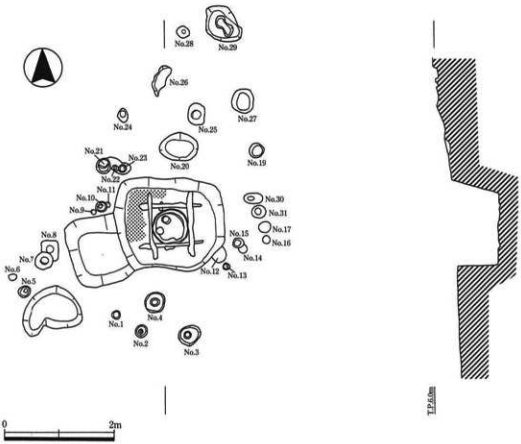
徳大寺遺跡の梵鐘鋳造遺構は、前記のように丘陵南側の裾部付近の傾斜変換点に位置する。前述のように付近には鋳造土坑に関連すると考えられるピット・小型土坑などが高密度に分布している。しかし、各遺構の残存状況からみて、斜面上部にある遺構ほど深さが浅く遺存状況が悪いため削平を受けているようである。一方、鋳造土坑付近は比較的本来の状況に近い可能性が高い。検出されたピット群の配置からは、規則的な配列などを看取できなかったが、これらのピットは、周囲に他の時期の遺構が検出されていないことから、上部構造や鋳型の設置、梵鐘の取り出しなどの作業に関わる施設を構築するための柱など梵鐘鋳造に関わる遺構の可能性が高い。特に、No.20・No.29においては炭化物が大量に出土し、No.20からは鋳型片と見られる土塊も検出されている。

また、No.26については、遺構底面が北北西方向に傾斜しており、調査段階で No.27と対になってフイゴ座として機能していた可能性がある。

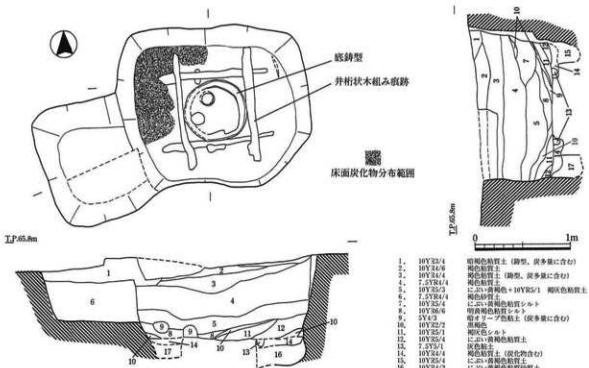
鋳造土坑の形状は、隅丸方形で長軸2.0m、短軸1.6m、深さ1.14m を計る。土坑南西隅に梵鐘取り出しの折に利用されたと考えられる長軸１ m、短軸0.8m、深さ0.8m の隅丸方形の土坑が取りついている。

ただし、この南西に取り付く土坑からは鋳型片は検出されず、炭化物の出土もほとんど無かった。

鋳造土坑は、定盤検出面付近においては若干の流れ込みを思わせる斜方向の堆積状況を看取したが、



第 77 図　徳大寺遺跡梵鐘鋳造遺構周辺の遺構配置図



第 78 図　徳大寺遺跡の梵鐘鋳造土坑

それより上部においてはほとんど水平堆積としか考えられない状況であった。鋳型片は、土坑検出面から10cm 程度のレベルで北西隅に密集して出土した以外は、埋土内に散在していた。

定盤検出面は、全体は灰白色の粘土質の土であり、前述のように北西部を中心にその上面に炭化物がうっすらと堆積していた。土坑中央部は、井桁状の木枠の痕跡と考えられる粘土の変色の部分があり、その中に目の細かい砂で作られた鋳型底部が円環状に遺存していた。円環部分は、内側・外側両端がやや黒ずんで、その間に幅 7 cm 程被熱したの帯状の灰褐色に硬く焼きしまった部分があり、底部鋳型と考えられる。

井桁状の部分は、木枠の痕跡と考えられるが、後述する断ち割りでも木質の遺存は見られなかった。円環状部分の内側は、青白色の粘質の土で、北側部分に円形の変色部分を検出した。また、南側では上面に鋳型が遺存していた。定盤検出面は、上からの土圧のためか現状ではやや凹凸があり、特に中央の鋳型底部は凹凸が激しい。

定盤上面より下部については、その後の調査方針の変更により定盤部分を切り取り保存することが決定された関係で井桁状木枠痕跡の外側に東西南北の 4 方向に確認トレンチを入れるに止まっている。したがって、定盤部分の構造や、土坑底面からの構築方法などについてはほとんど確認できなかった。

しかし、4 方向のトレンチによる観察の結果を総合すると木質井桁部分は従来言われているような定盤内部に構築されているのではなく、定盤とは独立して構築されていた可能性が高い。

このことを前述した他の遺跡における井桁部分の機能と関連させて考えると、この井桁状部分の上部には鋳型外型が構築されていた可能性が高く、そうであるならば構造としては独立しているものの、分割された外型を側面から結束する機能を担っていた可能性が高い。これについては絵画史料であるが、先述の香取1977の明治初期の木村家蔵梵鐘鋳造図にも本遺跡例に類似する鋳型の結束に関する技術が見られる。

5）徳大寺遺跡の梵鐘鋳造と梵鐘研究

上述のように、徳大寺遺跡においては推定したような梵鐘鋳造を行ったと考えられる遺構が検出され、埋土中から鋳型片と考えられる模様のついた土塊が検出されている。また、周辺には関連すると考えられる多数のピットや小土坑が検出されているが、それらについてはその構造を明確にはし得なかった。ここでは、周辺の遺跡をも含めて徳大寺遺跡の梵鐘鋳造について若干の検討を試みたい。

一般に、鋳造品の製作にあたっては、目的とする鋳型、銅・鉄などの金属を溶かす溶解炉、溶解炉の温度を上げるためのフイゴなどが必要となる。通常はそうした施設が鋳物師の工房に設置されていたであろうことが推定される。梵鐘の鋳造にあたっては、梵鐘を必要とする場所に出向いて鋳造していた例が知られている。

徳大寺遺跡周辺は、周辺の歴史的環境のところでも述べたように、その西側の丘陵に旧石器時代から中世に至る複合遺跡である粟生間谷遺跡がある。特に、粟生間谷遺跡から出土した奈良三杉の小壺には約50点のガラス玉と有機物が納められており、炉跡などの地鎮遺構に伴うものとされている。また、粟生間谷遺跡ではフイゴの羽口、坩堝なども出土している。しかし、鋳造関係の遺構は検出されていない。また、当遺跡からも鋳造土坑の北側の斜面を一段上がった所から、12世紀代の鉄製品の鋳造に関わると考えられる遺構が検出されている。

このように考えると、この地域が何らかの形で鋳造に適した地であったことは推定できるが、この辺

りに鋳造生産の工房域があったということにはならないようである。したがって、現段階では一応「出吹き」と言われる一回性の出張生産であったと推定しておきたい。

では、何故ここで鋳造する必要があったのかであるが、現段階の資料では不明である。付近には、勝尾寺・総持寺・忍頂寺などが知られているが、この時期の寺院を示すような資料は出土していない。粟生間谷遺跡・庄田遺跡なども同様である。

鋳造にあたっては、大量の炭を必要とする。当遺跡においても梵鐘鋳造土坑の西側40m のところから炭窯と推定される遺構が検出されている。第４節の地磁気年代測定によると10世紀後半の年代が結果として挙げられており、梵鐘鋳造遺構と年代的に一致する。当遺跡背後の丘陵地帯は、近世以降において炭などの生産が行われていた形跡を多く残している。また、銅の採掘を行ったことも知られており、今後これらの側面についても検討が必要であろう。

１．坪井良平　1970『日本の梵鐘』角川書店
1976『梵鐘』学生社
1989『梵鐘と考古学』ビジネス教育出版
1991『梵鐘の研究』ビジネス教育出版
1994『梵鐘実測図集成』(『奈良国立文化財研究所史料』第37・38冊）など多数。

２．五十川伸矢　1988「鴨東白河の鋳物工房」(『京都大学構内遺跡調査年報』昭和60年度)
1992「古代・中世の鋳鉄鋳物」(『国立歴史民俗博物館研究報告』46)
1994「梵鐘の鋳造遺跡」(『考古学ジャーナル』872)
1998「梵鐘鋳造遺跡の調査と工房」(『生産遺跡調査過程』奈良国立文化財研究所)
神崎　勝　1993「梵鐘の鋳造遺跡とその変遷」(『考古学研究』40-1)
吉田晶子　1993「近代産業以前の梵鐘鋳造技術について」
(『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』) などがある。

３．杉山　洋　1994「平等院鐘の製作年代と「空白の二世紀」」(『佛教芸術』216号)

４．中井一夫　1994「東大寺戒壇院東地区の鋳造遺構」(『考古学ジャーナル』372)

５．木下　亘　1989「巨勢寺跡の梵鐘鋳造遺跡について」(『梵鐘の音は時を越えて』河内鋳物師フォーラム in みはら)

６．註２：五十川1988を参照のこと。また、梵鐘鋳造関係の各種遺構の名称及び各部位の用語については p39の模式図を参照のこと。

７．香取忠彦　1977「大型鋳造技術に関する一資料－木村家蔵梵鐘鋳造図を中心に－」(『MUSEUM』317号)

８．横田洋三　1992「滋賀県木瓜原遺跡の梵鐘鋳造遺構」(『第２回鋳造遺跡研究会資料』)

第２表　梵鐘鋳造

遺　　跡　　名	所在地 都道府県	市　　町　　村	時　　期	検　出　遺　構	関　連　遺　物
大山廃寺	愛知	小牧市大山	11 世紀末	梵鐘鋳造坑	
金屋の浜・鋳物	石川	鳳至郡穴水町字中居	江戸時代－明治時代		鋳型・坩堝
白山社	岩手	平泉町	12 世紀	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
智恩寺	大分	豊後高田市大字鼎	鎌倉時代	梵鐘鋳造遺構	
豊後国分寺	大分	大分市	奈良時代	梵鐘鋳造土坑	
真福寺	大阪	南河内郡美原町黒山	13 世紀後葉	溶解炉・鋳造土坑	鍋鋳型・梵鐘鋳型
徳大寺	大阪	箕面市粟生間谷東	10 世紀後半	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
加茂政所	岡山	岡山市加茂	平安後期	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
宝幢寺池	香川	丸亀市郡家町宝幢寺池	室町後期		撞座鋳型
田村廃寺	香川	丸亀市田村町	奈良時代	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
宮ヶ瀬遺跡群北原（No.9）遺跡	神奈川	愛甲郡清川村大字宮ヶ瀬	18 世紀前半	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
金屋	岐阜	恵那郡坂下町本郷	室町時代末	梵鐘鋳造坑	梵鐘鋳型
京都大学教養学部構内 AP 22 区	京都	京都市左京区吉田二本松町	9－10 世紀	溶解炉・鋳造土坑	鍋鋳型・梵鐘鋳型
京都大学医学部構内 AN 18 区	京都	京都市左京区吉田近衛町	13 世紀	溶解炉・鋳造土坑	梵鐘鋳型
広隆寺	京都	京都市右京区太秦蜂岡町	9 世紀後半－10 世紀初	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
丹波国分寺	京都	亀岡市国分	9 世紀	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
金井遺跡 B 区	埼玉	坂戸市大字新堀字金井	13 世紀	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
金平	埼玉	比企郡嵐山町金平	13 世紀	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
長尾遺跡	滋賀	大津市滋賀里町長尾	9 世紀	梵鐘鋳造土坑・溶解炉	梵鐘鋳型
坂本八条	滋賀	大津市坂本本町	平安後期	梵鐘鋳造遺跡	梵鐘鋳型
木瓜原	滋賀	草津市野路町	7 世紀末－ 8 世紀	梵鐘鋳造土坑	
辻	滋賀	栗田郡栗東町	18 世紀－19 世紀	溶解炉	梵鐘鋳型
関鋳物跡	東京	国立市	江戸時代	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
大浦	徳島	徳島市名東町	平安時代		梵鐘鋳型・密教法具鋳型
上喜来蛭子中佐古	徳島	阿波郡市場町上喜来	16 世紀後半		鰐口鋳型
前田	徳島	板野郡土成町土成字前田	江戸時代	梵鐘鋳型	
寺平	長野	上伊那郡飯島町本郷	室町時代	梵鐘鋳造坑	梵鐘鋳型
東大寺戒壇院	奈良	奈良市雑司町	8 世紀中葉	梵鐘鋳造土坑	
山田寺	奈良	桜井市山田	鎌倉時代	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
田中廃寺	奈良	橿原市田中町	7 世紀後半		梵鐘龍頭鋳型
巨勢寺跡境内地	奈良	御所市大字古瀬	9 －10 世紀	梵鐘鋳造土坑	
飛鳥池	奈良	高市郡明日香村大字飛鳥池	江戸時代	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
寺前	新潟	三島郡出雲崎町	12 世紀末－13 世紀	溶解炉	梵鐘鋳型・鉄鍋鋳型
原山	新潟	糸魚川市大野	江戸時代	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
多可寺	兵庫	多可郡中町鍛冶	8 世紀末	梵鐘鋳造土坑	梵鐘鋳型
長谷	兵庫	神戸市西区櫨谷町長谷	13 世紀－14 世紀		鋳型
西安田・長野遺跡 A 地点	兵庫	多可郡中町西安田・長野	中世後期	梵鐘鋳造遺構	
清水・タカアゼ	兵庫	多可郡加美町清水	13 世紀－14 世紀	梵鐘鋳造遺構	
白水	兵庫	神戸市西区伊川谷町	11 世紀後半	梵鐘鋳造遺構・溶解炉	梵鐘鋳型
篠尾	福井	福井市篠尾町	平安時代初頭		龍頭鋳型
豊原寺	福井	坂井郡丸岡町豊原	14 世紀後葉－15 世紀前葉	鋳造遺跡	
一乗谷朝倉氏遺跡	福井	福井市城戸ノ町	16 世紀		梵鐘鋳型
鉾ノ浦	福岡	太宰府市鉾ノ浦	13 世紀後半－14 世紀前半	鋳造土坑	各種鋳型
鴻臚館跡	福岡	福岡市中央区城内	室町時代	梵鐘鋳造土坑	
川俣	福島	伊達郡川俣町	19 世紀	溶解炉	梵鐘鋳型・鍋鋳型
天満１号墳	和歌山	有田郡吉備村藤並	中世？	梵鐘鋳造遺構	

土坑一覧表

引用文献			備考
発行／著者	発行年	書名	
小牧市教育委員会	1979	『大山廃寺発掘調査概報』	
穴水町教育委員会	1981	『中居金屋の浜鋳物跡調査』	
八重樫田忠郎	1996	「岩手県平泉町白山比遺跡検出鋳造遺構について」『鋳造遺構研究会資料』6	
	1992		大分県立学校風土記の丘歴史民俗資料館調査
			大分市教育委員会
大阪文化財センター	1986	『真福寺遺跡』	
大阪府文化財調査研究センター	1999	本書	
岡山県教育委員会	1999	『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』	
坪井良平	1977	「梵鐘鋳型の出土例」『史跡と美術』	
			香川県教育委員会調査
神奈川県考古学会・神奈川県教育委員会	1991	『第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』	
坂下町教育委員会	1975	『金屋・星の宮遺跡』	
京都大学埋蔵文化財センター	1984/1988	『京都大学校内遺跡調査研究年報』昭和57／60年度	
京都大学埋蔵文化財センター	1988	『京都大学校内遺跡調査研究年報』昭和60年度	
京都府埋蔵文化財調査研究センター	1972	『京都府遺跡調査概報』	
			亀岡市教育委員会調査
埼玉県埋蔵文化財調査事業団	1994	『金井遺跡B地区』	
村上伸二	1996	「鳳山寺金平遺跡における鎌倉時代鋳造遺構の調査について」『比企丘陵』2	
林博通	1978/1982	「梵鐘を鋳造した遺跡の調査」『月刊文化財』「長尾遺跡の梵鐘鋳造遺構」『古代研究』27	
大津市教育委員会	1985	『滋賀里穴太地区遺跡群発掘調査報告書II』	
滋賀県文化財保護協会		「木瓜原遺跡の全貌が判明」『滋賀文化財ニュース』	
			栗東町文化財センター調査
馬橋利行・佐々木克典	1995	「国立市開鋳物師遺跡－江戸近郊鋳物師の工房跡－」『鋳造遺跡研究会資料』5	
一山典・滝山雄一	1987	「大浦遺跡（徳島県）」『佛教藝術』174	
藤川智之	1991	『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.2 1990年度	
徳島県埋蔵文化財センター	1993	『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.4 1992年度	
飯島町教育委員会	1980	『寺平遺跡』	
奈良県立橿原考古学研究所	1991	『大和を掘る』	
奈良国立文化財研究所	1980	『飛鳥藤原宮発掘調査概報』	
奈良県立橿原考古学研究所	1991	『大和を掘る』	
奈良県立橿原考古学研究所	1989	『大和を掘る』	
奈良国立文化財研究所			
新潟県教育庁文化行政課	1990	『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.6	
新潟県教育委員会	1988	『新潟県埋蔵文化財調査報告書』	
妙見山麓遺跡調査会	1986	『播磨産銅史の研究』	
			神戸市教育委員会
			妙見山麓遺跡調査会調査
加美町教育委員会		『清水・タカアゼ遺跡実績調査報告書』	
神戸市教育委員会	1999	『白水遺跡　第4次』	
福井県教育委員会	1972	『篠尾廃寺調査概要』	
丸岡町教育委員会	1981	『豊原寺II　華厳院跡第2次発掘調査概報』	
福井県立朝倉氏遺跡資料館	1989	『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡』	
山本信夫・狭川真一	1984	「鉾ノ浦遺跡梵鐘鋳造遺構発掘調査速報」『古代研究』27	
福岡市教育委員会	1992	『鴻臚館跡』	
川俣町教育委員会	1995	『川俣城跡の概要』	
			吉備町教育委員会調査

第３節　徳大寺建物配置復元案

１．はじめに

発掘調査で検出された５区の遺構は徳大寺に関わるものであると考えられる。前述したとおり杉の植林の際に建物の基壇は削平されてしまったようで、建物の明確な痕跡は認められなかった。しかし同一方位を指向する矩形の溝を多数検出し、それが建物の雨落ち溝と考えられること、地元の粟生村の庄屋池上家に多くの文書が残されており、その中に徳大寺について記した文書も含まれていたことから、それらを手掛かりとして建物の復元を試みた。

２．建物配置復元の方法

上記の池上家文書中の1769（明和６）年・1838（天保９）年・1868（慶応４）年の各年に、寺内に存在する建物について記したものがある。その内容は第３表のとおりであり、この文書によって建物の種類とその平面的な大きさは知ることができる。これとは別に、寺の再興当時のことを記した「寺院舊記帳」があるが、それによると了翁が建立したのは方丈、寮舎、鐘楼だった。

「寺院舊記帳」と池上家文書の記述を比較すると、両者で建物の呼称方法が異なることに気づく。おそらく時間の経過とともに建物の呼び方に変化が生じたためであろう。本章第１節の記述と重複する部分もあるが、ここではまず再興時の建物が後世のどの建物と対応するかを検討したい。

第 79 図　徳大寺の調査前および調査後の状況

方丈はそもそも禅院における住持の居所を指すが、中央奥に仏間が設けられることから本尊の観音銅像が安置されたのはこの建物だったと考えられる。そのためこれが後に観音堂と呼ばれるようになったのだろう。大伽藍寺院においては仏殿と居室は別棟の建物で、方丈には客殿としての要素が加わる。それに対して再興当時の徳大寺では仏殿や法堂などの機能も併せもった建物を方丈と呼び、主殿とみなしていたのだろう。一方の寮舎は衆寮と同義で、禅堂の機能を有していたと考える。これが後の庵に対応するのだろう。黄檗宗系列の寺院には宗派を特徴付ける建物として天王殿や斎堂があるが、当寺ではそれまでもが省略されている。おそらくこれらの建物の機能も、いずれかの建物に割りあてられていたのだろう。

後に新たに加わった建物は基本的にこれらの建物の機能を分化させる過程で生じたものだろう。具体的には方丈（観音堂）から居室の機能などを分化させ、独立したものが庫裏ないし本堂だっただろう。祖師堂は黄檗山系列の寺に特有なものだが、衆寮から分化したものだろうか。薬医門は三門や総門に代わるものとして後に整備されたと考える。もちろんこれらの建物の増設の背景には、それを可能とする財政的な裏付けが必要とされただろう。

以上のことを留意しつつ再び文献資料の記述に戻る。各建物の平面的な大きさに関する記述はあるが、主軸方向や境内の建物配置については具体的に記されていないため不明である。関係のありそうな箇所として、庫裏兼本堂のみ東側に庇、南側に物置・竈屋が付くことが記されている。また明和６年の文書の記載により、観音堂に廊下を取りつけていたことがわかる。建物の方向は調査で検出した溝に沿うものと考えられるが、問題となるのは寺の正面の方向である。これに関しても具体的な記述が認められなかった。そこで寺の正面が南側になる場合と東側になる場合で、それぞれに建物の復元案を作成してみた。どちらの考え方にも一長一短があるが、そのことも含めて次に復元案を示す。

３．建物配置の復元案

・南正面の場合（第80図参照）

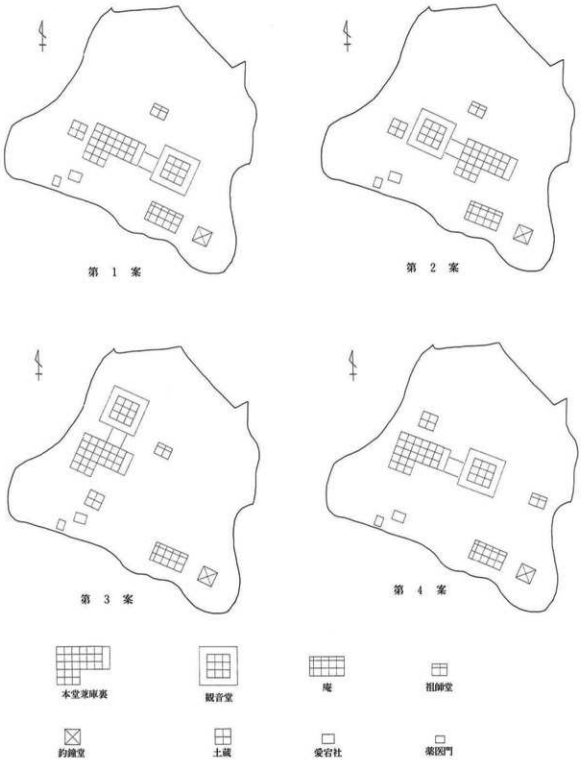
寺の位置している丘陵が南にひらけていること、真下ではないがすぐ南を勝尾寺に向かう道が通っており、それを望む位置にあるという立地条件を重視して、寺の正面を南と捉えている。復元に際しては現況図に見える丘陵への２本の道のうち、西側を参道と考えている。これは第80図にみえる通り東側の方は建物が存在していたと考えられる溝の部分に出てしまうためである。さて建物の配置であるが、まず薬医門は平坦面に入ってすぐの場所に置いた。鎮守の愛宕社は調査前に墓塔のような石組みが存在していた場所に置いている。また祖師堂は、調査区北側の高まりに開山と２代目住持の名を刻んだ宝篋印塔が置かれていたため、その近くが良いのではないかと考え、基本的にその南側に置いている。

第１案　本堂と観音堂を東西に並べるものである。本堂の位置は溝５－11を西の端として軸もそれにあわせ、廊下で観音堂とつないだ。土蔵は本堂の近くで表に出ない場所ということで、溝５－10に建物の端をあわせている。また釣鐘堂は、溝５－23と28に囲まれた場所に置いた。更に溝５－21が長方形に見える形をしているが、この部分には明和６年の文書にその存在が記されている庵を置いてみた。

第２案　第１案の本堂と観音堂の位置を入れ換えたものである。それ以外の建物の配置は同じである。

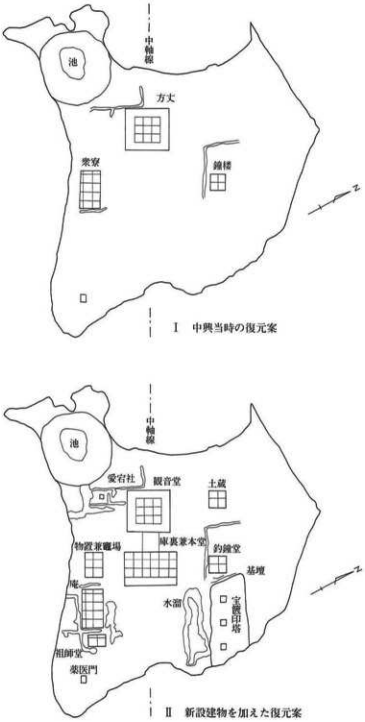
第３案　本堂南側に取りつく物置兼竈場を溝５－11と８に囲まれた場所に置いてみたもので、観音堂は本堂の北側に置いている。

第４案　第３案とほぼ同じであるが観音堂を本堂の東に配置したものである。



第 80 図　徳大寺建物配置復元案（南正面）

寺の正面が南側であることを前提に 4 つの復元案を提示したが、この中である程度妥当ではないかと考えられるのは第 1 案と第 4 案である。それ以外の案では、第 2 案は本堂南側に取りつく物置が境内の真ん中に出てきてしまう。第 3 案は中心建物が西側に偏り東側が空くといった寺の建物の配置としては不適当と考えられる点が見られる。つまり、本堂南に付属するとされる物置・竈場が境内中央に出てこ



第 81 図　徳大寺建物配置復元案（東正面）

ないようにするには、本堂を西側に置くしかないのである。

更に第 4 案よりも第 1 案の方が中心建物が境内の中央に位置していて、建物を直線に並べることができることからより適当な配置ではないかと考える。ちなみに巻頭のイラストは第 1 案を基にして描いたものである。

南側を正面と捉える考え方は地形的に見てひらけている方向を正面と見ることができる点、斜面の比

表3　徳大寺建物の変遷

明和六年（1769）

境内	東西　百六間	南北　七十間		
観音堂	梁行　三間	桁行　三間	瓦葺	四方に一間の庇
祖師堂	梁行　一間半	桁行　二間	瓦葺	
庫裏	梁行　三間	桁行　六間	瓦葺	東に一間下屋、南西に下屋
廊下	梁行　五尺	桁行　北　二間五尺 南　一間一尺	瓦	観音堂に付く
物置	梁行　二間	桁行　四間一尺	瓦葺	
釣鐘堂	二間四方		瓦葺	
庵	梁行　二間半	桁行　四間半	藁葺	
薬医門	五尺	六尺	瓦葺	
権現地蔵				
小社	二尺	一尺五寸	板葺	
雨覆	一間四方		藁葺	

天保九年（1838）

境内	東西　百六間	南北七十間		
観音堂	梁行　三間	桁行　三間	瓦葺	四方に一間の庇
祖師堂	梁行　一間半	桁行　二間	瓦葺	
庫裏	梁行　三間	桁行　六間	瓦葺	東に一間下屋、南に二間に三間の電場付き
廊下	梁行　五尺	桁行　北　二間五尺 南　一間一尺	瓦	観音堂に付く
物置	梁行　二間	桁行　四間一尺	瓦葺	
釣鐘堂	二間四方		瓦葺	
庵	梁行　二間半	桁行　四間半	藁葺	
愛宕社	三尺	二尺五寸	柿葺	
雨覆	八尺	一間五尺	瓦葺	

慶応四年（1868）

境内	東西　百六間	南北七十間		
観音堂	梁行　三間	桁行　三間	瓦葺	四方に一間の庇
祖師堂	梁行　一間半	桁行　二間	瓦葺	
本堂兼庫裏	梁行　三間	桁行　六間	瓦葺	東に一間庇、南に二間に三間の物置電場所
廊下	梁行　二間	桁行　二間	瓦葺	
釣鐘堂	二間四面		瓦葺	
土蔵	梁行　二間	桁行　二間	瓦葺	
愛宕社	三尺	二尺五寸	柿葺	
雨覆	八尺	一間五尺	瓦葺	

較的なだらかな部分に取りついている里道を参道とみなすことができ、自然に寺域に入ることができる点が長所である。その一方で建物の正面に取りつくべき庫裏兼本堂の庇の方向が、寺の正面と一致しない点に不自然さがある。更に慶応4年の記述にもあるように庫裏兼本堂の南側に物置があるとなると、本堂の前にわざわざ遮蔽物を置いたことになり、寺全体と本堂の正面観のズレが更に大きくなる。加えて禅宗寺院では一般的に中軸線をおいて左右対象に堂宇を配するが、この案では中軸線が設定できないという弱みがある。

・東正面の場合（第81図参照）

本堂の正面を東向きと考えた方が自然であること、寺域を縦長の長方形とみなすことができるので、禅宗寺院の配置パターンが踏襲できることを重視して、寺の正面を東とみなしている。

まず中軸線は溝5－22・24と落込5－1との中間に設ける。このライン上に建物の中心をのせ、更に建物の端を溝5－12の南北方向部分に合わせたところに方丈の位置を決めることができる。前述したように禅宗の寺では中軸線に対して左右対象に建物を配置する傾向があるので、寮舎と釣鐘堂は方丈の左右前方に配したのだろう。黄檗宗寺院では一般的に見て、禅堂ないし衆寮は寺の正面からみて左側に置かれる。したがって南側に寮舎が、その反対側に鐘楼が置かれたと考える。参道は南側の斜面を横切って5区南東隅の張出部分に取りついていたと考えられ、そこから平場に入った所に門が設らえられたのだろう。これが再興当時の寺の伽藍配置だったと考えられる。

やがて方丈は観音堂と呼び変えられるようになり、その前面には庫裏兼本堂が新たに建てられて両者は廊下でつなげられた。一方庵と呼び変えられるようになった衆寮の並びには祖師堂が加わり、本堂の南側には物置が建てられた。中軸線上に建物が一つ加わったことで、当初衆寮と呼ばれていた建物は庫裏兼本堂と横並びになるため、庵の位置は前に押し出されることになっただろう。そしてもともと衆寮があった基壇を利用してそこが物置に作り替えられたとしたら、天保9年の記述とも合致することになる。一方、釣鐘堂は位置の確保が難しいため、左右対象の理念からは少しはずれることになるが、元の位置の後方に移動させるか庵の側に移動するかしたと考えられる。愛宕社は南正面の復元案と同様の場所に置けるため、観音堂の横に位置することとなる。

建物の配置だけをみると側方の建物が南側に偏るが、それらに対応する場所は宝篋印塔を祀る基壇が占めたと考えると、左右対象のパターンを大きく離れるものではないと言えるのではないだろうか。中軸線上の建物と側方の建物とに囲まれた部分に遺構がまばらな空間が生じるが、ここは前庭・祭場として機能したと考えることができる。

以上、寺の正面を東と考えると、寺と本堂の正面が矛盾しない。また長軸方向に中心線をおくことができるので、禅宗寺院の理念にも沿うことができる点で有利である。ただ寺の正面の崖が非常に急峻なため、参道は寺の側面に取りつくこととなる。また尾根と尾根の間に挟まれた非常に見通しの悪い方向を寺の正面としなければいけないという弱みがある。地形的な弱点よりも禅宗としての寺の伽藍配置を優先させた結果であろうか。

4．おわりに

発掘調査によって検出した遺構からのみでは徳大寺の建物配置を復元することはできなかったが、古文書の記述を組み合わせることによって、ある程度妥当ではないかと思われる復元案を提示することができた。ただし、建物を配置している部分の他にも直角に曲がっている溝もあることから別の配置も考

えうる。また寺が存続した170余年の間には数度の立替えがあったと考えられ、建物の位置もそれに伴ってある程度変化したと考えられる。したがってここで示した建物の復元案は、寺の景観ないし伽藍配置の概念の復元と言い換えるべきかもしれない。この他に便所の問題がある。土坑内に桶を据えている土坑５－68が他遺跡の例からみて便所遺構と考えられ、これが単独の小屋のようなものであったのか、建物の中に取り込まれていたかによっても変更が生じる。南正面の復元案では庵の北東に位置しているが、建物の内部には取り込んでいない。寺においては建物の内部に便所を設けるよりも、外部に独立して設けた方がより適当と考えたからである。一方東正面の復元案では、便所が祖師堂に近接してしまうことになる。両者に時期差があった可能性も考慮しなければならないが、祖師堂と不浄が近接したとは考えられないので、場合によっては前者の位置を変更する必要も生じる。いずれにせよ文書に便所の記載がないことが気になるが、寺の財産と考えられるような建物以外は文書には記載されなかった可能性もあるのかもしれない。

推測を重ねた文章になったが、これにより徳大寺という地元でも忘れられてしまっていた寺の姿に少しでも迫ることができれば幸いである。本稿は1999年６月に行われた国際文化公園都市に関わる調査成果展の際に検討したものを下敷きにしている。そのきっかけを作ってくださった方々、および拙稿のみではイメージしにくい寺の姿をイラストに描いてくださった今田明子氏に心よりお礼申しあげます。なお、イラストの建物の構造については木村に一切の責任があることを記しておきます。

参考文献

1983　櫻井敏雄・大草一憲　『黄檗宗寺院の伽藍計画に関する研究・法雲寺の建設と伽藍計画を中心として－』美原町史紀要『美原の歴史』特別号

1988　井藤暁子　「黄檗宗了翁禅師再興の近世寺院『徳大寺』の歴史調査」『黄檗文華』第117号

1989　中村元・福永光司・田村芳郎・今野達　『岩波　仏教辞典』　岩波書店

1996　『国際文化公園都市歴史・文化総合調査平成８年度前半期調査状況報告書』　㈶大阪府文化財調査研究センター

1997　『萩原城遺跡発掘調査報告書』　阪神文化財調査会

1997　大田区立郷土博物館編　『トイレの考古学』　東京美術刊

1999　『彩都（国際文化公園都市）周辺地域の歴史文化総合調査報告書』　㈶大阪府文化財調査研究センター

第4節　徳大寺遺跡炭焼窯焼土試料の考古地磁気測定

花園大学自然科学研究室
前中一晃
吉田育代

1．はじめに

㈶大阪府文化財調査研究センターの依頼を受けて、徳大寺遺跡の炭焼窯跡より採取した焼土試料の考古地磁気測定を行ったので、その結果について報告する。

2．試料

1996年10月、㈶大阪府文化財調査研究センターより依頼を受けて、徳大寺遺跡の炭焼窯跡より採取された焼土試料の考古地磁気の測定（残留磁化測定および帯磁率測定）を行うことになった。方位をつけて採取された試料（サンプル）は6個、いずれも壁面から採取されたもので、それぞれ10cm立方の大きさがあった。

採取されたサンプルから、考古地磁気年代測定用の大型定方位スペシメン（3.3cm立方の大きさ）をサンプル毎に4個づつ総計24個、帯磁率測定用の小型スペシメン（2.5cm立方の大きさ）を各サンプルから7～17の合計72個、大学の実験室で岩石切断機を使って切り出した。

3．帯磁率の測定

帯磁率は地球磁場程度の弱い磁場によって誘導される磁化率であり、火を使用した炉跡や窯跡では帯磁率が強くなることが知られており、その測定は火気を受けた遺構を検知するのに非常に有力な方法となる。英国のBartington社によって高感度な「帯磁率計」が製品化されて測定が簡単になった。

帯磁率測定用に切りだした小型スペシメンについて、帯磁率の強さ（Rc；単位10^{-6}cgs）を「帯磁率計」を使って測定するとともに、「残留磁化測定装置」を使って残留磁化の強さ（Jn；単位10^{-5}emu）を測定し、その相対比（Jn／Rc）の値を計算によって求めてみた。その関係が第4表に纏めてある。70%の試料のJn／Rcの値が0.03～0.07に集中する。Jn／Rcの値が大きいものは例外なく、残留磁化の強さが大きくなり、それに伴って帯磁率も大きくなっている。残留磁化の強さが大きくなったことは焼成を受けて強力な磁化を獲得したことを意味し、それによって帯磁率も大きくなったことを示している。

4．残留磁化測定結果

試料の残留磁化測定の手順は以下の通りである。

1）試料の残留磁化の測定は手始めに「残留磁化測定装置」を使って各スペシメンの自然残留磁気（Natural Remanent Magnetization、NRM）が測定された。この段階できちんとした残留磁化をもっていないことが判明した試料は棄却し、以下の作業を停止することになるが、今回測定した試料に関しては、この種のものはなかった。

2）試料のNRMには、試料が地球磁場記録者として保持している初成磁化獲得後、二次的に付加した二次磁化が重複して測定されている。初成磁化は考古地磁気で取り扱う試料では、火気を受けた遺構が対象となっており、熱残留磁化（Thermal Remanent Magnetization、TRM）がほとんどである。二

次磁化は過去の地球磁場の推定には邪魔になる成分で、主として粘性残留磁化（Viscous Remanent Magnetization、VRM）よりなり、二次磁化除去のための消磁が必要となる。消磁は「交流消磁装置」を使って行われる。消磁がうまく働いているかどうかは、Zijderveld (1967) の直交消磁図によって確かめられながら進められる。直交消磁図で原点に向かう直線成分を得られない試料は、信頼できる結果を得られなかったとして棄却されることになる。

第82図に示すのは今回測定した試料について得られた交流消磁の一例である。直交消磁図と呼ばれる

第４表　徳大寺試料の帯磁率・残留磁化の強さとその相対比の関係

試料番号	(Jn)	(Rc)	(Jn/Rc)	試料番号	(Jn)	(Rc)	(Jn/Rc)	試料番号	(Jn)	(Rc)	(Jn/Rc)
TD-02a	415	388	1.07	TD-03m	2	19	0.11	TD-06a	35	235	0.15
b	153	544	0.28	n	1	37	0.03	b	7	96	0.07
c	40	238	0.17	o	1	35	0.03	c	7	112	0.06
d	27	195	0.14	p	1	48	0.02	d	7	98	0.07
e	6	108	0.06	q	1	49	0.02	e	5	81	0.06
f	4	109	0.04	r	1	34	0.03	f	4	81	0.05
g	4	84	0.05	s	1	32	0.03	g	4	85	0.05
h	4	79	0.05	TD-04a	4	92	0.04	TD-07a	14	121	0.12
i	3	50	0.06	b	4	98	0.04	b	12	182	0.07
j	3	74	0.04	c	4	103	0.04	c	12	168	0.07
k	3	114	0.03	d	3	68	0.04	d	11	172	0.06
l	2	50	0.04	e	3	82	0.04	e	9	137	0.07
TD-03a	28	189	0.15	f	3	81	0.04	f	8	141	0.06
b	20	158	0.13	g	3	94	0.03	g	7	95	0.07
c	14	117	0.12	h	3	86	0.03	h	4	83	0.05
d	7	85	0.08	i	2	55	0.04	i	4	71	0.06
e	6	74	0.08	TD-05a	47	218	0.22	j	4	57	0.07
f	5	90	0.06	b	40	174	0.23	k	3	71	0.04
g	5	79	0.06	c	30	220	0.14	l	3	53	0.06
h	4	64	0.06	d	29	187	0.16	m	3	59	0.05
i	2	56	0.04	e	28	211	0.13	n	2	52	0.04
j	2	53	0.04	f	24	129	0.19	o	2	48	0.04
k	2	50	0.04	g	17	174	0.10	p	1	32	0.03
l	2	58	0.03	h	11	72	0.15	q	1	22	0.05

第５表　徳大寺試料の残留磁化測定結果

試料番号	ＮＲＭ強度 (×10⁻⁵ emu/g)	交流消磁前の磁化方向 偏角 (° E)	交流消磁前の磁化方向 伏角 (°)	交流消磁後の磁化方向 偏角 (° E)	交流消磁後の磁化方向 伏角 (°)
TD-02A	16	32.6	52.6	22.4	52.5
B	6	44.9	50.1	27.1	51.9
C	17	33.3	51.0	20.4	51.4
D	27	18.5	55.1	14.9	54.0
03A	17	- 2.0	44.1	- 1.7	47.1
B	13	- 2.2	46.7	- 3.6	52.1
C	12	4.7	45.2	- 0.8	52.7
D	2	4.7	39.4	0.4	48.3
04A	12	2.5	40.5	- 0.3	45.1
B	8	- 0.2	40.7	- 1.4	44.6
C	8	- 1.8	47.0	- 9.5	50.6
D	6	4.4	46.6	- 0.7	53.0
05A	14	- 5.1	43.1	- 8.8	49.5
B	11	- 2.9	42.9	- 5.6	47.4
C	15	- 3.3	46.6	- 6.1	49.3
D	21	- 5.9	48.3	- 6.3	49.3
06A	11	-14.1	43.3	-10.6	47.1
B	8	-18.1	41.0	-12.0	47.1
C	11	-16.9	41.2	-10.5	45.4
D	16	- 8.0	41.9	- 3.5	43.4
07A	18	- 7.6	56.6	- 7.4	52.6
B	3	2.8	76.3	5.1	57.7
C	12	- 6.9	54.8	- 4.9	48.0
D	11	-10.9	58.9	- 9.5	55.6

この図は、消磁の各段階で磁化ベクトルの終点をつないだものの平面図と立面図とを一つに纏めて描いたもので、黒丸が平面図（上が西、下が東、右が北、左が南）、白丸が立面図（上が上方、下が下方、右が北、左が南）を表している。白丸の横に記した数字は交流磁場の強度で、単位は mT（ミリテスラ）である。TD-02A と名付けられたこのパイロット試料は2.5、5、7.5、10、15、20、25、30、35、40、45、60、80mT の各段階で消磁された。図からわかるように、この試料は 5 mT 以上の消磁で原点に向かう直線成分が得られている。このことは二次的に付着した磁化が 5 mT までの交流消磁でほぼ除去され、初成磁化が分離されたことを示している。

3）普通の行程では、パイロット試料についての交流消磁の予備結果を参考にして適切な消磁磁場強度を決定し、一括処理することになるが、今回の測定では全試料について 5、7.5、10、15mT の 4 ステップの消磁磁場強度を設定して処理し、主成分分析法（Kirschvink、1980）により初成磁化方位を求めた。

4）複数個採取した試料の偏角（Declination）および伏角（Inclination）の平均値、95%誤差角（α_{95}）、そして信頼係数の計算は、Fisher（1953）の統計法を用いて行った。

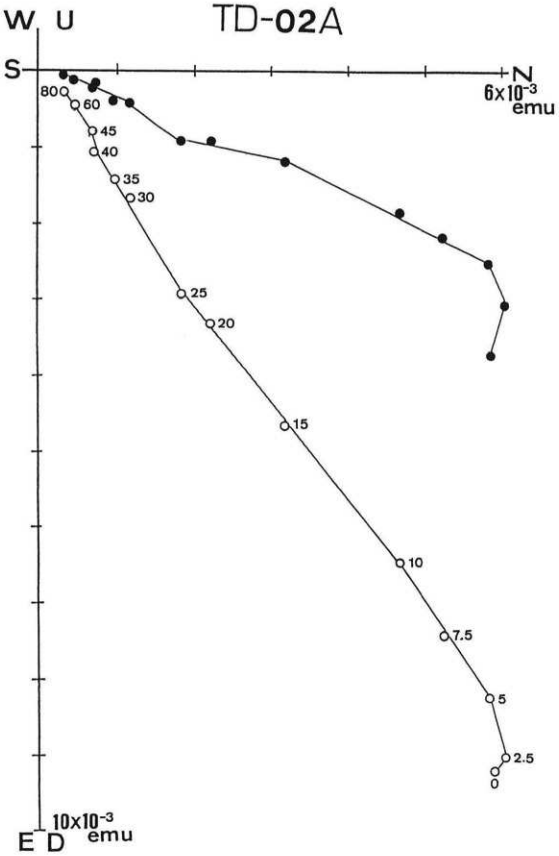
第 5 表はこのような手続きを経て得られた結果を纏めたものである。この表で、左端の欄は試料番号、次の欄は試料の NRM 強度で、今回採取された試料の強さを単位質量当たりの強さに換算すると（2～27）×10^{-5}emu/g の強さであった。今までに100以上のサイトからの焼土試料の残留磁化を測定しているが、それらと比べると平均的な部類に属する強さであった。その次の欄は交流消磁前の磁化方向を、最後の欄は交流消磁後の磁化方向を表している。

各サンプル毎の消磁前と消磁後の残留磁化方向の値とその95%誤差角の値、信頼係数の値を Fisher（1953）の統計法によって求め、比較した様子が第 6 表に纏められている。TD-04の試料を除き、他は交流消磁によって、95%誤差角の値が小さく（信頼係数の値が大きく）なっていることで二次磁化が除去され、初成磁化が分離された様子が読み取れる。

今回採取された試料の最終的な磁化方向（サイト平均）の結果は、こうして求めた各サンプル毎の平均の磁化方向の値の平均値を再度 Fisher の統計によって計算するという手続きを経て求められている。

第 6 表　徳大寺試料の消磁前後の残留磁化測定結果

		交流消磁前の磁化方向				交流消磁後の磁化方位			
		偏角	伏角	95%誤差角	信頼係数	偏角	伏角	95%誤差角	信頼係数
試料名	試料数	(° E)	(°)	(α_{95}, °)	(K)	(° E)	(°)	(α_{95}, °)	(K)
TD-02＊	n＝4	32.7	52.6	7.8	138	21.3	52.5	3.7	619
-03	n＝4	1.4	43.9	4.8	366	- 1.4	50.1	3.4	745
-04	n＝4	1.2	43.7	4.6	394	- 2.9	48.4	5.7	260
-05	n＝4	- 4.3	45.2	3.2	811	- 6.7	48.9	1.5	3535
-06	n＝4	-14.3	41.9	4.0	530	- 9.1	45.8	3.7	632
-07	n＝4	- 7.0	61.7	11.6	64	- 4.4	53.6	6.4	210
サイト	N＝5	- 4.5	47.4	8.9	76	- 5.0	49.4	3.3	540
平均	(N＝6	1.0	49.1	10.8	40	- 0.3	49.6	7.7	100)



第 82 図　直交交流消磁図

サイト平均の値が二つ示されているのは、TD-02の試料から求めた値が他の5つの試料から求めた平均値と10度以上の隔たりを示すからで、この試料を含めた場合（N＝6）と除去した場合（N＝5）の値を別々に表示した。TD-02のデータを除くことで、誤差角の値が格段に小さくなることから、N＝5での値を採用するのが妥当な措置といえよう。なおTD-02のスペシメンは第4表にも示されているように、他のスペシメンとは少し異質な様相を示している。なぜこのような異質な磁化を持つようになったのか検討する必要がある。

5．考案

今回の徳大寺試料の残留磁化の測定結果として、偏角＝－5.0°、伏角＝49.4°、95%誤差角＝3.3°の値が得られたことになる。考古地磁気の年代推定のためには、測定結果が現在の試料採取地での地磁気偏角値（－6.7°）で補正される必要がある。今回の測定の補正値は偏角が－11.7°±3.3°、伏角が49.4°±3.3°となり、伏角の値は現在の値とほぼ等しく、偏角の値は現在の値よりもさらに大きな西偏で特徴づけられることがわかる。

第83図は、現在までに西南日本各地の考古地磁気測定から得られた過去二千年にわたる考古地磁気永年変化曲線（前中、1997）である。この図でわかるように西南日本の偏角の値は現在でこそ西偏であるが、A.D.1800年以前の時代は東偏で特徴づけられている。西偏の値を示すようになるのはA.D.1150年より以前の時代である。今回の測定値から判断すると、偏角でみて少なくともA.D.1150年以前、伏角の値とも併せて考慮すると、徳大寺の炭窯遺構の最適の考古地磁気年代はA.D.1025～A.D.1050年と結論される。

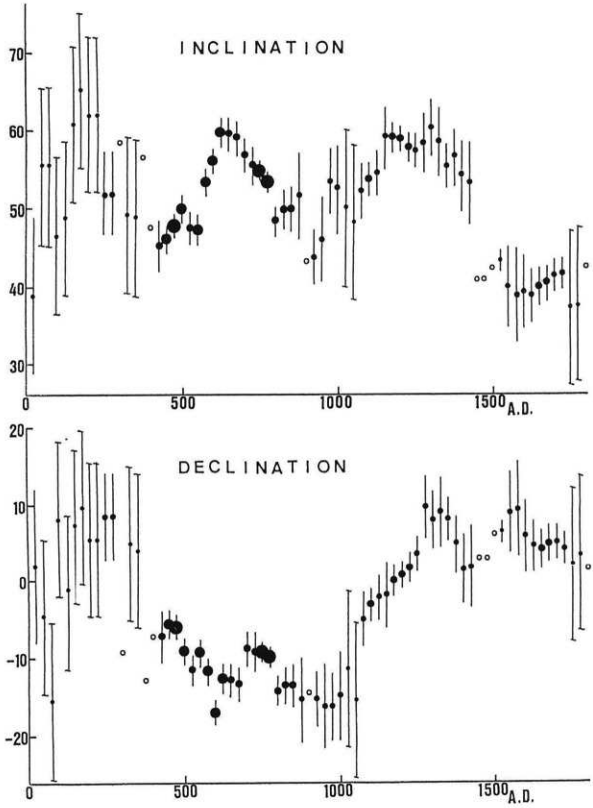
参考文献

Fisher, R.A. (1953)：Dispersion on a sphere, Proceed. Roy. Soc. London, A217, 295-305.

Kirschvink, J.L. (1980)：The least-squares line and plane and analysis of paleomagnetism, Geophys. J.R. astr., 62, 699-718.

前中一晃(1997)：考古地磁気永年変化曲線の作成、古文化論叢－伊達先生古稀記念論集－、伊達先生古稀記念論集刊行会、65－71

Zijderveld, J.D.A. (1967)：A.C. Demagnetization of Rocks：Analysis of Results. in Methods in Paleomagnetism, edited by D.W. Collinson, K.M. Creer and S.K. Runcorn, 254-286. Elsevier, Amsterdam.



第 83 図　西南日本の永年変化曲線

第７表　遺物観察表(1)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量(cm)		胎土	焼成	色調		備考
47-1	IV区	第３層	縄文土器	深鉢	残存高	3.4	直径２mmの砂粒を多量に含む	良	外 7.5 YR 6/4 断 7.5 YR 3/1 内 10 YR 7/3	にぶい橙 黒褐 にぶい黄橙	長原式
47-2	IV区	第３層	縄文土器	深鉢	残存高	3.1	直径１～2.5 mmの砂粒を多量に含む	良	外 7.5 YR 6/6 断 10 YR 4/4 内 5 Y 5/1 ～	橙 褐 灰	長原式
47-3	IV区	第３層	縄文土器	深鉢	残存高	4.2	直径１～２mmの砂粒を多量に含む	不良	外 10 YR 8/3 断 10 YR 5/3 内 2.5 Y 4/1	浅黄橙 にぶい黄橙 黄灰	長原式
47-4	IV区	第２層	須恵器	壺	残存高 底径	5.7 9.0	直径１～２mmの砂粒を含む	良	外 N 6 断 N 6 内 N 6	灰 灰 灰	
47-5	IV区	ピット132	黒色土器	椀	口径 残存高	17.1 4.7	密	良	外 10 YR 6/6 断 7.5 Y 2/1 10 Y 6/6 内 7.5 Y 2/1	明黄橙 黒 明黄橙 黒	A 類
47-6	IV区	灰白色 包含層	陶器	椀	残存高 底径	2.9 6.6	密	良	外 2.5 Y 4/2 断 5 Y 8/2 内 5 Y 4/2	暗灰黄 灰白 灰オリーブ	唐津 胎土目が残る
48-7	H 77 区 I U-39 g-5	住居址 H 77－1	縄文土器	深鉢	残存高	3.7	直径２mmの砂粒を多く含む	良	外 5 YR 6/6 断 10 YR 4/4 内 2.5 Y 3/1	橙 褐 黒褐	長原式
48-8	I 区 I V-40 b-0	流路１－２	土師器	把手付甕	残存高	25.4	直径１～２mmの砂粒を多く含む	良	外 10 YR 7/3 断 10 YR 8/1 内 10 YR 7/3	にぶい黄橙 灰白 にぶい黄橙	
48-9	I 区 I V-41 j-3	流路１－２	須恵器	壺か甕	残存高 底径	5.2 9.8	直径１～３mmの砂粒を含む	良	外 N 6 断 7.5 Y 7/1 内 N 7	灰 灰白 灰白	
48-10	H 77 区 I U-39 g-10	ピット H 77－17	緑釉陶器	椀	口径 残存高	12.2 3.5	密	良	外 断 N 6 内	緑灰 灰 緑灰	
48-11	I 区 I V-41 j-3	流路１－２	白磁	碗	口径 残存高	18.2 3.1	密	良	外 2.5 GY 7/1 断 7.5 Y 7/1 内 2.5 GY 7/1	明オリーブ灰 灰白 明オリーブ灰	IV類
48-12	H 77 区 I U-39 g-9	ピット H 77－12	黒色土器	椀	口径 器高	15.2 4.3	密	良	外 10 YR 8/3 断 10 YR 8/3 内 10 YR 2/1	浅黄橙 浅黄橙 黒	A 類
48-13	H 77 区 I U-39 g-10	第２面ベース層 ピット H 77－25	土師器	杯	残存高 底径	1.4 6.0	密（直径 0.5 mm程度の赤色の砂粒含む）	良	外 10 YR 7/6 N 4 断 2.5 Y 6/1 内 5 YR 7/8	明黄褐 灰 黄灰 橙	
48-14	3 区 I V-41 f-5	第２面ベース層 ピット３－11	瓦器	椀	口径 器高	10.35 3.35	直径 0.1 mm の砂粒を含む	良	外 5 Y 7/2 内 N 5	灰白 灰白	IV期
48-15	3 区 I V-41 f-5	第２面ベース層 ピット３－11	土師器	皿	口径 器高	8.1 1.6	密	良	外 10 YR 8/2 断 5 YR 5/4 内 10 YR 8/3	灰白 にぶい赤褐 浅黄橙	
48-16	3 区 I V-41 j-5	第１面 土坑３－17	陶器	皿	口径 器高 底径	10.4 1.9 3.6	密	良	外 7.5 Y 7/3 2.5 Y 8/1 断 2.5 Y 8/1 内 2.5 Y 7/3	浅黄 灰白 灰白 浅黄	瀬戸
50-17	2 区 I V-41 i-8	第３面 鋳造土坑２－１	緑釉陶器	椀	口径 器高 底径	14.9 6.1 6.5	直径１～２mmの砂粒 長石粒少無含む	良	外 断 内	暗緑 明黄灰褐 暗緑	
50-18	2 区 I V-41 i-8	第３面 鋳造土坑２－１	黒色土器	椀か皿	残存高 底径	1.3 7.0	密	不良	外 2.5 Y 4/1 断 5 Y 8/1 内 2.5 Y 5/1	黄灰 灰白 黄灰	
50-19	2 区 I V-41 i-8	第３面 鋳造土坑２－１	土師器	皿	残存高 底径	0.85 4.5	直径１～３mmの砂粒含む	良	外 7.5 YR 7/4 断 7.5 YR 8/3 内 7.5 YR 7/4	にぶい橙 浅黄橙 にぶい橙	回転糸切り
50-20	2 区 I V-41 i-8	第３面 鋳造土坑２－１	鋳型	－	残存長辺 残存短辺 残存厚	2.65 2.45 1.35	直径１～２mmの砂粒・炭化物を含む	－	表 2.5 Y 7/6 裏 2.5 Y 5/2	明黄褐 暗灰黄	
50-21	2 区 I V-41 i-8	第３面 鋳造土坑２－１	鋳型	－	残存長辺 残存短辺 残存厚	8.8 6.5 1.1	直径１～３mmの砂粒・炭化物を含む	－	表 2.5 Y 8/6 7.5 Y 7/1 裏 10 YR 6/3	黄 灰白 にぶい黄橙	
50-22	2 区 I V-41 i-8	第３面 鋳造土坑２－１	鋳型	－	残存長辺 残存短辺 残存厚	16.4 10.1 2.4	直径１～２mmの砂粒・炭化物を含む	－	表 2.5 Y 7/6 裏 2.5 Y 6/2	明黄褐 灰黄	樋座部分
50-23	2 区 I V-41 i-8	第３面 鋳造土坑２－１	鋳型	－	残存長辺 残存短辺 残存厚	7.55 6.6 2.0	直径１～２mmの砂粒・炭化物を含む	－	表 10 YR 6/3 裏 7.5 Y 7/2	にぶい黄褐 灰白	
50-24	2 区 I V-41 i-8	第３面 鋳造土坑２－１	鋳型	－	残存長辺 残存短辺 残存厚	6.0 4.2 1.95	直径１～２mmの砂粒・炭化物を含む	－	表 2.5 Y 8/6 裏 10 YR 6/2	黄 灰黄褐	
51-25	3 区 I V-41 i-6	鍛冶炉３－１上 ピット９	土師器	皿	口径 器高 底径	9.4 1.85 4.1	密	良	外 10 YR 8/2 断 10 YR 8/2 内 10 YR 8/2	灰白 灰白 灰白	
51-26	3 区 I V-41 i-6	鍛冶炉３－１上 ピット 10	土師器	皿	口径 器高 底径	8.9 1.5 4.3	密	良	外 7.5 YR 8/3 断 7.5 YR 8/3 内 7.5 YR 8/4	浅黄橙 浅黄橙 浅黄橙	
51-27	3 区 I V-41 i-6	鍛冶炉３－１上 ピット９	土師器	皿	口径 器高 底径	9.4 1.7 5.2	密	良	外 10 YR 8/3 断 7.5 YR 8/3 内 7.5 YR 8/4	浅黄橙 浅黄橙 浅黄橙	

第７表　遺物観察表(2)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
51-28	3区 Ⅰ V-41 j-6	鍛冶炉３－１上 ピット９	土師器	皿	口径　9.5 器高　1.5 底径　3.9	密	良	外 7.5 YR 8/4　浅黄橙 断 10 YR 8/3　浅黄橙 内 10 YR 8/3　浅黄橙	
51-29	3区 Ⅰ V-41 i-6	鍛冶炉３－１上 ピット10	土師器	皿	口径　9.0 器高　1.1 底径　3.2	密	良	外 7.5 YR 8/4　浅黄橙 断 7.5 YR 7/4　にぶい橙 内 7.5 YR 7/4　にぶい橙	
52-30	3区 Ⅰ V-41 j-6･7	ベース面 土坑３－12	土師器	皿	口径　10.4 器高　2.1 底径　6.2	密	良	外 10 YR 5/2　灰黄褐 断 10 YR 8/3　浅黄橙 内 7.5 YR 4/1　褐灰	
52-31	3区 Ⅰ V-41 j-6･7	ベース面 土坑３－12	土師器	皿	口径　10.2 残存高　2.4	密	良	外 7.5 YR 7/4　にぶい橙 断 7.5 YR 7/4　にぶい橙 内 7.5 YR 7/4　にぶい橙	
52-32	3区 Ⅰ V-41 j-6･7	ベース面 土坑３－12	陶器	碗	口径　15.2 器高　6.6 底径　5.0	密	良	外 10 Y 7/1　灰白 　　10 Y 5/2　オリーブ灰 断 5 Y 6/1　灰 内 10 Y 4/2　オリーブ灰	瀬戸？
52-33	3区 Ⅰ V-41 j-6･7	ベース面 土坑３－12	土師器	皿	口径　10.1 器高　1.8 底径　5.0	密	良	外 2.5 Y 5/1　黄灰 断 7.5 YR 7/1　明褐灰 内 2.5 Y 6/1　黄灰	
52-34	3区 Ⅰ V-41 j-6･7	ベース面 土坑３－12	土師器	皿	口径　6.7 器高　1.75 底径　2.1	直径0.1～2 mm の砂含む	不良	外 7.5 YR 8/2　灰白 断 7.5 YR 8/2　灰白 内 7.5 YR 8/3　浅黄橙	
53-35	3区 Ⅰ V-41 g-4	第２面ベース層 土坑３－３	土師器	皿	口径　7.2 器高　1.7 底径　3.3	密	良	外 10 YR 8/1　灰白 内 10 YR 8/1　灰白	
53-36	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	土師器	皿	口径　7.8 器高　1.75 底径　4.1	密	良	外 7.5 YR 8/2　灰白 断 7.5 YR 8/2　灰白 内 10 YR 8/3　浅黄橙	外面に付着物 有り
53-37	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	土師器	皿	口径　7.4 器高　1.25 底径　3.5	密	良	外 7.5 YR 8/2　灰白 断 7.5 YR 8/4　浅黄橙 内 7.5 YR 8/2　灰白	
53-38	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	瓦質土器	火舎？	残存高　3.9	直径１mmの砂粒 を含む	不良	外 10 YR 8/2　灰白 断 2.5 Y 8/3　淡黄 内 2.5 Y 8/3　淡黄	外面に巴文ス タンプ
53-39	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	青磁	碗	残存高　4.1 底径　4.3	密	良	外 7.5 YR 4/2　灰オリーブ 断 5 Y 6/1　灰 内 7.5 Y 5/2　灰オリーブ	龍泉窯 外　細蓮弁 内　剪花 「菊」
53-40	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	青磁	碗	残存高　3.6 底径　4.7	密	良	外 10 GY 6/1　緑灰 断 N 8　灰白 内 7.5 GY 7/1　明緑灰	内　牡丹
53-41	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	陶器	碗	残存高　3.15 底径　5.3	砂質	良	外 7.5 Y 6/3　オリーブ黄 断 5 Y 8/1　灰白 内 7.5 Y 6/3　オリーブ黄	瀬戸
53-42	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	陶器	甕	口径　61.0 残存高　30.0	密	良	外 2.5 YR 4/2　灰赤 　　2.5 YR 4/1　赤灰 断 10 YR 6/1　褐灰 内 7.5 YR 6/2　灰褐	備前
53-43	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	陶器	甕	残存高　8.2	密	良	外 5 YR 4/2　灰褐 　　7.5 YR 5/2　灰褐 断 2.5 YR 4/2　灰赤 内 10 YR 4/1　暗赤灰	備前
53-44	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	陶器	甕	口径　62.6 残存高　29.4	密	良	外 10 YR 4/2　灰黄褐 　　5 YR 4/2　灰褐 断 5 YR 6/2　灰褐 内 10 R 5/2　灰赤 　　2.5 YR 5/1　赤灰	備前
53-45	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	陶器	甕	残存高　10.8	密	良	外 7.5 R 4/1　暗赤灰 断 2.5 YR 6/1　赤灰 内 N 6　灰	備前
53-46	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	陶器	甕	残存高　13.2 底径　44.1	密	良	外 5 YR 5/2　灰褐 　　N 5　灰 断 N 5　灰 内 5 YR 5/2　灰褐 　　N 5　灰	備前
53-47	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	陶器	甕	残存高　17.2 底径　56.5	密	良	外 2.5 YR 4/2　灰赤 断 2.5 YR 3/2　灰赤 　　N 5　灰 内 5 YR 5/2　灰褐	備前
53-48	3区 Ⅰ V-41 b-4	第２面ベース層 土坑３－３	陶器	甕	残存高　48.0	密	良	外 10 YR 4/1　褐灰 　　5 Y 8/1　灰白 断 N 5　灰 　　7.5 R 4/2　灰赤 　　5 YR 5/3　にぶい赤褐 内 7.5 YR 5/1　褐灰 　　N 5　灰 　　2.5 YR 5/3　にぶい赤褐	備前
54-49	5区 Ⅰ W-41 a-1	第２面 土坑５－５	染付	碗	口径　9.9 器高　5.1 底径　3.7	密	良	外 断 5 Y 8/1　灰白 内　　白	肥前 外　松竹梅
54-50	5区 Ⅰ W-41 a-1	第２面 土坑５－５	陶器	碗	口径　8.8 器高　5.5 底径　2.4	密	良	外 2.5 Y 8/3　淡黄 断 2.5 Y 8/2　灰白 内 2.5 Y 8/3　淡黄	京焼系 上絵付 外　菊花
54-51	5区 Ⅰ W-41 a-1	第２面 土坑５－５	染付	碗	残存高　1.5 底径　4.9	密	良	外 断 N 8　灰白 内　　灰青	芙蓉手か？ 外　唐草・文字 内　花

第7表　遺物観察表(3)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
54-52	5区 1W-41 n-1	第2面 土坑5－5	染付	皿	口径 10.3 器高 1.8 底径 6.7	密	良	外 灰青 断 N 8 灰白 内 灰青	81と同一柄 外 唐草 内 水滴菊花
54-53	5区 1W-41 n-1	第2面 土坑5－5	陶器	灯明皿	口径 6.1 器高 1.4 底径 2.9	密	良	外 2.5Y 8/2 灰白 断 2.5Y 8/2 灰白 内 2.5Y 7/2 灰黄 5Y 6/1 灰	伊賀・信楽
54-54	5区 1W-41 b-3	第2面 土坑5－70	染付	御神酒徳利	残存高 2.4 底径 3.4	密	良	外 灰青 断 5Y 8/1 灰白 内 5Y 8/1 灰白	外 植物？
54-55	5区 1W-41 b-3	第2面 土坑5－64	青磁	獅脚	残存高 3.3	密	良	外 5GY 7/1 オリーブ灰 断 5Y 8/1 灰白	肥前 滑石ないし盤の脚
54-56	5区 1W-41 b-3	第2面 土坑5－100	染付	瓶	残存高 21.0	密	良	外 10Y 7/1 灰白 内 10Y 7/1 灰白 2.5Y 7/2 灰黄	肥前
54-57	5区 1W-41 b-3	第2面 土坑5－100	陶器	碗	口径 10.2 残存高 4.35	密	良	外 2.5YR 4/3 にぶい赤褐 (釉) 緑黒 断 2.5Y 8/3 淡黄 内 2.5YR 4/3 にぶい赤褐	
54-58	5区 1W-41 b-3	第2面 土坑5－100	陶器	碗	口径 10.9 残存高 3.55	密	良	外 7.5YR 4/2 灰褐 断 10YR 6/3 にぶい黄橙 内 7.5YR 5/3 にぶい褐	唐津 外 刷毛目 内 刷毛目
54-59	5区 1V-41 j-2	第2面 溝5－12	染付	碗	口径 11.3 器高 6.4 底径 4.6	密	良	外 白 断 白 内 白	肥前 外 樹木
54-60	5区 1V-40 j-9	第2面 土坑5－1	染付	碗	口径 9.4 器高 5.1 底径 3.5	密	良	外 5GY 8/1 灰白 断 7.5Y 8/1 灰白 内 5GY 8/1 灰白	肥前 外 樹木
54-61	3区 1V-41 j-5	第1面 土坑3－17	染付	皿	口径 11.2 器高 2.8 底径 6.9	密	良	外 灰青 断 2.5Y 8/3 淡黄 内 灰青	肥前 外 唐草 「大明年製」 銘 内 五弁花 芋菊花
54-62	5区 1W-41 c-3	第2面 溝5－24	青磁	皿	残存高 1.7 底径 4.3	密	良	外 2.5GY 7/1 オリーブ灰 断 2.5Y 8/1 灰白 内 2.5GY 7/1 オリーブ灰	
54-63	7区 1W-42 c-2	第2面 ピット7－42	染付	蓋物	口径 9.3 器高 5.3 底径 4.7	密	良	外 灰青 断 N 8 灰白 内 灰青	肥前 外 石墨地
54-64	7区 1V-42 g-2	第2面 溝2－2	陶器	有脚受皿	残存器高 3.7 底径 3.9	密	良	外 2.5Y 7/1 灰白 2.5Y 7/2 灰黄 断 7.5Y 7/1 灰白 内 2.5Y 7/1 灰白	
54-65	H77区 1U-39 g-10	第3面 ピットH77－18	陶器	碗	残存高 2.2 底径 4.2	密	良	外 5Y 6/2 灰オリーブ 断 7.5Y 8/3 浅黄橙 内 5Y 6/2 灰オリーブ	唐津 内 砂目積み の痕跡有り
54-66	7区 1V-42 g-2	第2面 溝2－2	白磁	紅皿	口径 4.4 器高 1.5 底径 1.2	密	良	外 7.5Y 8/1 灰白 断 N 8 灰白 内 灰青	肥前
55-67	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	染付	碗	口径 10.2 器高 6.1 底径 3.95	密	良	外 10YR 7/2 にぶい黄橙 内 10YR 7/2 にぶい黄橙	肥前 外 梅・麻風 「大明年製」 銘
55-68	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	染付	碗か蓋	残存高 2.8 底径 4.5	密	良	外 灰青 断 N 8 灰白 内 灰青	肥前 外 植物？ 内 帯
55-69	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	染付	碗	残存高 1.8 底径 3.7	密	良	外 灰青 断 N 8 灰白 内 灰青	肥前 外 植物？ 内 火炎
55-70	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	染付	筒形碗	口径 7.6 器高 6.4 底径 4.0	密	良	外 10BG 7/1 明青灰 断 N 8 灰白 内 10BG 7/1 明青灰	肥前 外 水滴菊花 「福」 内 四方襷 五弁花
55-71	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	陶器	碗	口径 9.2 器高 5.8 底径 3.4	密	良	外 5Y 8/2 灰白 断 5Y 8/1 灰白 内 5Y 8/2 灰白	京焼系 上絵付 外 梅・柳？
55-72	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	染付	碗	口径 7.1 器高 3.8 底径 2.4	密	良	外 灰青 断 灰青 内 灰青	外 竹葉
55-73	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	陶器	筒形碗	残存高 3.85 底径 3.9	密	良	外 5Y 8/2 灰白 断 2.5Y 8/1 灰白 内 5Y 6/2 灰白	外面 刷毛目
55-74	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	染付	筒形碗	口径 6.9 器高 5.4 底径 3.5	密	良	外 白 内 白	肥前 外面 山水 内面 五弁花
55-75	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	染付	鉢	残存高 3.5 底径 5.2	密	良	外 灰青 断 10YR 8/1 灰白 内 灰青	肥前 外 植物？ 「大明年製」銘
55-76	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	陶器	碗	口径 6.0 器高 3.6 底径 2.2	密	良	外 5Y 8/3 淡黄 7.5Y 3/1 オリーブ黒 断 2.5Y 8/2 灰白 内 5Y 8/2 灰白	

第７表　遺物観察表(4)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
55-77	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	染付	御神酒徳利	口径 2.2 残存高 4.6	密	良	外 灰青 断 N８ 灰白 内 灰青	外 竹葉 鶴鹿
55-78	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	染付	碗	残存高 2.6 底径 3.4	密	良	外 10 G 7/1 明緑灰 断 白 内 白	肥前 外 蘆草
55-79	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	白磁	蓋	口径 8.2 残存高 3.4	密	良	外 灰青 断 N８ 灰白 内 灰青	肥前 蛍の蓋
55-80	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	白磁	蓋	口径 7.0 器高 1.1	密	良	外 7.5 Y 7/2 灰白 内 7.5 Y 7/2 灰白	
55-81	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	染付	皿	口径 10.1 器高 1.75 底径 6.6	密	良	外 灰青 断 N８ 灰白 内 灰青	52と同一柄 外 雷文 内 米銀菊花
55-82	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	青磁	小壺	口径 5.4 器高 6.3 底径 4.1	密	良	外 2.5 GY 4/1 暗オリーブ灰 内 2.5 GY 4/1 暗オリーブ灰	
55-83	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	白磁	紅皿	口径 4.6 器高 1.7 底径 1.1	密	良	外 5 Y 8/1 灰白 内 灰青	肥前
55-84	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	染付	蓋	口径 10.2 器高 3.1 底径 4.3	密	良	外 7.5 Y 8/1 灰白 断 N８ 灰白 内 7.5 Y 8/1 灰白	肥前 外 花 内 青海鼠 樹枝
55-85	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	陶器	蓋	口径 3.5 器高 2.2	密	良	外 7.5 YR 5/8 明褐 7.5 GY 4/1 暗緑灰 内 5 YR 4/3 にぶい赤褐	二次焼成
55-86	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	土師器	乗燭	残存高 4.2 底径 3.3	密	良	外 2.5 GY 3/1 暗オリーブ灰 5 YR 7/6 橙 断 7.5 YR 7/4 にぶい橙 内 10 Y 2/1 黒	回転糸切り
55-87	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	陶器	皿	残存高 3.1 底径 3.9	密	良	外 7.5 Y 6/2 灰オリーブ 断 7.5 Y 8/2 灰白 内 5 Y 6/2 灰オリーブ	内 花
55-88	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	白磁	紅皿	口径 4.1 器高 1.55 底径 1.5	密	良	外 N８ 灰白 内 N８ 灰白	肥前
55-89	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	白磁	紅皿	口径 4.6 器高 1.4 底径 1.4	密	良	外 7.5 Y 8/1 灰白 内 灰青	肥前
55-90	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	土師質	泥面子	直径 3.7 厚さ 0.7	砂混じり	不良	外 7.5 YR 7/6 橙	表面 五三の桐
55-91	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	染付	水滴	残存長辺 5.5 短辺 6.6 残存高 2.0	密	良	外 白・青 5 GY 3/1 暗緑灰 断 N８ 灰白 内 7.5 Y 8/1 灰白	肥前 外 布袋 とんぼ・花
55-92	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	染付	水滴	残存長辺 5.6 短辺 6.5 器高 3.5	密	良	外 灰青	肥前 外 鶴
55-93	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	陶器	水滴	残存長辺 8.0 残存短辺 4.9 器高 3.3	密	良	外 7.5 Y 8/2 灰白 内 7.5 Y 8/1 灰白	外 樹木
56-94	5区 1W-41 c-1	第２面 落込５－１ 黒石土坑５－10	白磁	水滴	残存長辺 7.3 残存短辺 6.6 残存高 4.8	密	良	外 N８ 灰白 断 7.5 Y 8/1 灰白 内 7.5 Y 8/1 灰白	肥前 底面に文字有り 動物形か？ 二次焼成
56-95	5区 1W-40 b-8	第２面 土坑５－96	土師器	灯明皿	口径 5.35 器高 0.9 底径 2.3	密	良	外 7.5 YR 7/6 橙 断 10 YR 8/4 浅黄橙 内 5 YR 7/8 橙 7.5 YR 8/4 浅黄橙	焼成後穿孔有り 回転糸切り
56-96	5区 1W-40 b-8	第２面 土坑５－96	土師器	灯明皿	口径 5.3 器高 1.0 底径 2.8	密	良	外 7.5 YR 7/6 橙 断 10 YR 8/4 浅黄橙 内 5 YR 7/8 橙 7.5 YR 8/4 浅黄橙	焼成後穿孔有り 回転糸切り
56-97	5区 1W-40 b-8	第２面 土坑５－96	土師器	灯明皿	口径 5.25 器高 1.0 底径 3.0	密	良	外 7.5 YR 7/6 橙 断 10 YR 8/4 浅黄橙 内 5 YR 7/8 橙 7.5 YR 8/4 浅黄橙	焼成後穿孔有り 回転糸切り
56-98	5区 1W-40 b-8	第２面 土坑５－96	土師器	灯明皿	口径 5.5 器高 1.0 底径 2.8	密	良	外 7.5 YR 7/6 橙 断 10 YR 8/4 浅黄橙 内 5 YR 7/8 橙 7.5 YR 8/4 浅黄橙	焼成後穿孔有り 回転糸切り
56-99	5区 1W-40 b-8	第２面 土坑５－96	土師器	灯明皿	口径 5.4 器高 0.9 底径 3.2	密	良	外 7.5 YR 7/6 橙 断 10 YR 8/4 浅黄橙 内 5 YR 7/8 橙 7.5 YR 8/4 浅黄橙	焼成後穿孔有り 回転糸切り
56-100	5区 1W-40 b-8	第２面 土坑５－96	土師器	灯明皿	口径 5.3 器高 1.0 底径 3.0	密	良	外 7.5 YR 7/6 橙 断 10 YR 8/4 浅黄橙 内 5 YR 7/8 橙 7.5 YR 8/4 浅黄橙	焼成後穿孔有り 回転糸切り
56-101	5区 1W-41 c-3	第２面 土坑５－72	陶器	碗	口径 7.2 残存高 3.7	密	良	外 淡褐～黒褐 断 2.5 Y 8/1 灰白 内 淡褐～黒褐	瀬戸美濃

第７表　遺物観察表(5)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
56-102	5区 1W-41 b-2	第２面 土坑５－58	陶器	碗	口径　9.1 器高　5.4 底径　2.9	密	良	外 5Y 8/1　灰白 断 2.5Y 8/2　灰白 内 5Y 8/1　灰白	外　竹葉
56-103	5区 1W-41 b-3	第２面 土坑５－61	染付	蓋	口径　8.0 器高　2.5 鐙径　4.4	密	良	外　白 内　白	肥前 外　蓑・黒体字 内　「寿」 銅状文様
56-104	5区 1W-41 c-3 1W-41 b-2	第２面 土坑５－72 土坑５－58	陶器	水指	口径　13.0 器高　14.8 底径　12.8	密	良	外 5YR 3/1　黒褐 ～5YR 4/2　灰褐 内 5YR 7/6　橙	備前
56-105	5区 1W-41 c-2	第２面 土坑５－80	土師器	用途不明品	口径　7.4 器高　2.1 底径　9.5	直径１mmの砂粒を多量に含む	良	外 2.5YR 8/3　淡黄 内 2.5YR 8/3　淡黄	
56-106	5区 1W-41 b-2	第２面 土坑５－56	染付	碗	口径　9.7 器高　5.5 底径　3.8	密	良	外 10BG 7/1　明青灰 断 N 8　灰白 内 10BG 7/1　明青灰	肥前 外　植物 「大明年製」銘
56-107	5区 1W-41 b-2	第２面 土坑５－57	瓦質土器	三足火鉢	口径　10.3 器高　9.05	密	良	外 5YR 3/2　暗赤褐 7.5Y 5/1　灰 N 3　暗灰 内 N 3　暗灰	外面に擦膜付着
56-108	5区 1W-41 b-2	第２面 土坑５－56	陶器	皿	残存高　3.8 底径　5.3	密	良	外 2.5Y 8/1　灰白 断 5Y 8/1　灰白 内 5Y 8/1　灰白 10R 4/4　赤褐	
56-109	5区 1W-41 b-2 1W-41 C-1	第２面 土坑５－56 土坑５－57 集石土坑５－10 土坑５－１	陶器	擂鉢	口径　35.6 器高　15.15 底径　19.8	密 直径0.5～１mmの白い砂粒含む	良	外 10R 4/3　赤褐 断 10R 6/8　赤橙 内 2.5YR 4/3　にぶい赤褐	堺擂鉢Ⅱ－a類
57-110	2区 1V-41 a-10	第３層	須恵器	杯身	口径　11.2 残存高　2.9	密	良	外 N 7　灰白 断 N 7　灰白 内 N 6　灰白	
57-111	2区 1V-41 h-8	第２層	須恵器	蓋	口径　14.9 残存高　1.0	密	良	外 N 7　灰白 断 N 7　灰白 内 N 7　灰白	
57-112	2区 1V-41 j-8	第３層	須恵器	長頸壺	残存高　9.0 底径　11.2	密 径２mmの砂粒を含む	良	外 7.5Y 6/1　灰 断 5Y 7/1　灰白 内 N 8　灰白	
57-113	2区 1V-41 i-7	第２層	須恵器	長頸壺	残存高　4.8 底径　12.7	密	良	外 7.5Y 5/1　灰 断 5Y 7/1　灰白 内 7.5Y 7/1　灰白	
58-114	2区 1V-41 h-9	第３層	緑釉陶器	椀	残存高　2.7 底径　7.6	直径１～２mmの砂粒を含む	良	外 5YR 7/6　橙 断 10YR 8/2　灰白 内 7.5YR 8/3　淡黄橙	
58-115	H 77 区	第２面	緑釉陶器	椀	残存高　2.8 底径　7.9	密	良	外　緑灰 断 N 6　灰 内　緑灰	
58-116	2区 1V-41 j-9	第３層	須恵器	鉢	口径　24.9 残存高　3.6	密	良	外 N 7　灰白 断 N 4　灰 内 N 6　灰	
58-117	2区 1V-41 i-9	第３層	土師器	甕	口径　15.5 残存高　5.5	直径１～２mmの砂粒を含む	良	外 5YR 6/6　橙 断 5YR 6/6　橙 内 7.5YR 8/3　にぶい褐	回転糸切り
58-118	2区 1V-41 g-6	第２層	須恵器	瓶子	残存高　3.1 底径　10.1	直径２mmの砂粒を含む	良	外 5Y 7/1　灰白 断 5Y 7/1　灰白 内 5Y 7/1　灰白	
58-119	H 77 区	第２層	土師器	羽釜	口径　24.6 残存高　6.0	直径１～２mmの砂粒を多量に含む	良	外 2.5Y 4/1　黄灰 10YR 7/6　明黄褐 断 10YR 8/4　浅黄橙 内 2.5Y 4/1　黄灰	田津Ｃ２型
58-120	2区 1V-41 i-9	第３層	黒色土器	椀	口径　15.4 残存高　3.35	密	良	外 N 3　暗灰 断 N 3　暗灰 内 7.5Y 2/1　黒	B類 輪薬
58-121	H 77 区	第２層	陶器	皿	口径　12.0 器高　2.5 底径　6.6	密	良	外 5Y 8/1　灰白 断 5Y 8/1　灰白 内 5Y 8/1　灰白	灰釉陶器 H72型式の無釉のもの
58-122	3区 1V-41 g-5	第２層	瓦器	小椀	口径　7.7 器高　2.8 底径　4.2	密	良	外 N 3　暗灰 断 N 8　灰白 内 N 4　灰	
58-123	2区 1W-41 a-9	第２層	瓦器	皿	口径　8.8 器高　1.3 底径　6.0	密	良	外 5Y 5/1　灰 断 2.5Y 8/1　灰白 内 10YR 5/1　褐灰	
58-124	3区	第２層	瓦器	皿	口径　9.9 器高　2.4 底径　3.8	密	良	外 N 8　灰白 断 N 8　灰白 内 N 5　灰白	
58-125	2区 1V-41 i-9	第３層	土師器	皿	口径　12.2 器高　2.6	密	良	外 2.5Y 6/2　灰黄 断 10YR 7/4　にぶい黄橙 内 2.5Y 3/2　黒褐	
58-126	2区 1V-41 j-7	地山上層	土師器	皿	口径　10.2 器高　2.0 底径　5.6	直径２mmの砂粒を含む	良	外 10YR 7/3　にぶい黄橙 断 10YR 7/3　にぶい黄橙 内 10YR 7/3　にぶい黄橙	
58-127	3区	第２層	土師器	皿	口径　9.4 器高　1.75 底径　5.0	直径１～２mmの砂粒を含む	不良	外 7.5YR 8/3　浅黄橙 断 7.5YR 8/3　浅黄橙 内 10YR 8/3　浅黄橙	

第７表　遺物観察表(6)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量 (cm)	胎土	成形	色調	備考
58-128	2区 1W-41 a-8	第2層	須恵器	鉢	口径 27.9 残存高 9.25	密	良	外 5Y7/1 灰白 10YR6/2 灰黄褐 断 2.5Y8/2 灰白 内 7.5Y7/1 灰白	東播系 II－2段階
58-129	2区 1V-41 b-8	第2層	青磁	碗	残存高 2.3 底径 4.5	密	良	外 7.5Y5/1 灰 断 5Y8/1 灰白 内 7.5Y5/2 灰オリーブ	内面　印花？
58-130	2区 1V-41 j-8	第3層	青磁	碗	残存高 2.4 底径 5.0	密	良	外 2.5GY6/1 オリーブ灰 断 N7 灰 内 2.5GY6/1 オリーブ灰	龍泉窯 外面　鎬蓮弁 内面　牡丹
58-131	2区 1V-41 i-7	地山上層	須恵器	鉢	口径 21.0 残存高 6.7	密	良	外 N6 灰 N4 灰 内 10Y6/1 灰 断 10Y6/1 灰	東播系 II－2段階
58-132	3区	第1層	青磁	碗	残存高 2.65 底径 5.8	密	良	外 明緑灰 断 N8 灰白 2.5YR6/4 にぶい橙 内 明緑灰	龍泉窯
58-133	H77区	第2層	白磁	碗	残存高 2.8 底径 5.9	密	良	外 5Y8/1 灰白 断 5Y8/1 灰白 内 7.5Y8/1 灰白	同安窯 IV－1類
58-134	2区	－	青磁	碗	口径 20.6 残存高 4.1	密	良	外 7.5GY6/1 明緑灰 断 10Y8/1 灰白 内 7.5GY6/1 明緑灰	龍泉窯 外面　蓮弁
58-135	2区 1V-41 j-8	地山上層	陶器	碗	口径 16.7 残存高 6.2	砂質	良	外 2.5YR6/6 橙 5Y6/3 オリーブ黄 断 2.5Y8/3 淡黄 内 5Y6/3 オリーブ黄	瀬戸
58-136	2区 1V-41 i-7	第2層	陶器	碗	口径 16.8 器高 7.35 底径 4.8	密	良	外 7.5Y8/3 淡黄 7.5Y8/1 灰白 断 7.5Y8/1 灰白 内 7.5Y8/3 淡黄	瀬戸
58-137	2区 1V-41 h-7	第3層	陶器	天目茶碗	口径 12.4 器高 6.55 底径 4.3	密	良	外 N2 黒 2.5Y8/1 灰白 断 2.5Y8/1 灰白 内 N2 黒	瀬戸美濃
58-138	2区 1V-42 f-7•8	遺状遺構	陶器	天目茶碗	口径 11.4 残存高 4.85	密	良	外 10YR3/2 黒褐 断 10YR8/2 灰白 内 10YR3/2 黒褐	瀬戸美濃
58-139	2区 1V-41 i-7	第2層	陶器	碗	残存高 2.4 底径 4.7	砂質	良	外 2.5Y8/1 灰白 断 2.5Y8/1 灰白 内 2.5GY7/1 明オリーブ灰	瀬戸
58-140	2区 1V-41 i-7	第2層	陶器	甕	口径 37.3 残存高 7.9	密	良	外 10YR4/2 灰黄褐 10YR7/2 にぶい黄橙 断 2.5YR7/6 橙 内 2.5YR6/6 橙	常滑
59-141	2区 1W-41	第2層	陶器	甕	残存高 12.2	密	良	外 7.5YR4/2 灰褐 断 10YR6/1 褐灰 内 2.5Y7/2 灰黄	
59-142	2区 1V-41 h-7	第2層	陶器	甕	口径 26.2 残存高 5.9	密	良	外 7.5Y5/1 灰 断 N7 灰白 内 2.5GY6/1 オリーブ灰 5YR4/3 にぶい赤褐	常滑
59-143	H77区	第3層	土師器	甕	口径 31.0 残存高 4.3	密	良	外 5YR5/4 にぶい赤褐 断 5YR5/4 にぶい赤褐 内 7.5YR7/4 にぶい赤褐	
59-144	2区 1V-41 j-8	地山上層	瓦質土器	羽釜	口径 21.8 残存高 11.05	直径1mmの砂粒を含む	良	外 5Y5/1 灰 10YR6/2 灰黄褐 断 2.5Y8/1 灰白 内 7.5YR6/3 にぶい褐	
59-145	2区 1V-41 j-8	第3層	瓦質土器	羽釜	口径 26.9 残存高 15.05	直径1～2mmの砂粒を含む	良	外 N4 灰 5Y8/2 灰白 断 5Y8/2 灰白 内 N4 灰 5Y8/1 灰白	
59-146	2区 1V-41 i-8	第2層	瓦質土器	羽釜	口径 22.3 残存高 10.5	直径1～3mmの砂粒を含む	良	外 N3 暗灰 断 N3 暗灰 内 10YR6/1 褐灰	
59-147	2区 1V-41 j-8	地山上層	瓦質土器	羽釜	口径 29.5 残存高 8.1	直径1～2mmの砂粒を含む	良	外 5Y5/1 灰 断 5Y8/1 灰白 内 10YR8/3 浅黄橙	
59-148	2区 1V-41 e-7	第1層	瓦質土器	茶釜	口径 14.8 残存高 3.7	直径1～4mmの砂粒を含む	良	外 N5 灰 断 10YR8/1 灰白 内 N5 灰	
59-149	2区 1V-41 j-8	地山上層	瓦質土器	火舎	口径 27.4 器高 7.8 底径 22.2	直径1～3mmの砂粒を含む	不良	外 5Y5/1 灰 断 5Y7/1 灰白 内 5Y7/1 灰白 5Y5/1 灰	浅鉢III
59-150	2区 1V-41 h-8	第3層	瓦質土器	火舎	口径 33.5 残存高 7.8	直径1～4mmの砂粒を多く含む	不良	外 2.5Y6/3 にぶい黄 断 10YR6/6 明黄褐 内 10YR7/4 にぶい黄橙	浅鉢III 外面に菊花を スタンプする
59-151	2区 1V-41 j-8	地山上層	瓦質土器	火舎	残存高 14.3 底径 36.8	直径1～2mmの砂粒を含む	不良	外 2.5Y8/2 灰白 断 2.5Y8/1 灰白 内 2.5Y8/2 灰白	浅鉢V
60-152	7区 1W-42 b-2	第2層	染付	皿	残存高 1.4 底径 5.0	密	良	外 7.5GY7/1 明緑灰 断 5Y7/1 灰白 内 7.5GY7/1 明緑灰	肥前 内　山水？

第7表　遺物観察表(7)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
60-153	7区 1W-42 h-2	第2層	陶器	壺	残存高 4.9 底径 8.0	密	良	外 N 2 断 7.5Y 8/2 内 N 2	黒 灰白 黒	瀬戸美濃
60-154	7区 1W-42 b-2	第2層	陶器	皿	残存高 1.1 底径 4.4	密	良	外 10Y 7/1 断 5Y 6/1 内 7.5Y 7/1	灰白 黄 灰白	唐津 内外面に砂目有り
60-155	3区 1W-41 a-7	第2層	陶器	擂鉢	口径 36.0 残存高 6.1	密	良	外 2.5Y 5/1 断 5YR 6/1 内 2.5Y 5/1	黄灰 褐灰 黄灰	丹波 II型式
60-156	2区 1W-41 b-8	第2層	白磁	碗	残存高 2.35 底径 6.45	密	良	外 2.5Y 7/3 断 2.5Y 8/1 内 2.5Y 7/3	淡黄 灰白 淡黄	内外面に砂目有り
60-157	2区 1V-41 i-7	第2層	陶器	擂鉢	口径 22.2 残存高 5.6	密	良	外 2.5YR 4/2 2.5Y 5/1 断 2.5YR 5/2 内 10R 3/2	灰赤 黄灰 灰赤 暗赤褐	備前
60-158	2区 1V-41 i-8	第2層	青磁	皿	口径 11.1 残存高 2.05	密	良	外 7.5Y 4/2 断 10YR 7/2 内 2.5GY 5/1	灰オリーブ にぶい黄橙 オリーブ灰	
60-159	2区 1V-41 h-8	第3層	陶器	碗	残存高 3.0 底径 3.4	砂質	良	外 2.5Y 8/1 断 10YR 8/1 内 2.5Y 8/2	灰白 灰白 灰白	唐津 内面に砂目有り
60-160	2区 1V-41 h-7	地山上面	陶器	壺	残存高 7.45 底径 13.9	密	良	外 2.5YR 4/3 断 N 5 内 5YR 5/3	にぶい赤褐 灰 にぶい赤褐	備前
60-161	4区	−	陶器	鉢	残存高 5.0 底径 11.6	密	良	外 2.5YR 5/6 断 2.5YR 5/6 内 10YR 7/1	明赤褐 明赤褐 灰白	唐津 内面に砂目有り 胡毛目
60-162	3区 1V-41 k-5	第1層	染付	碗	口径 10.9 器高 6.3 底径 4.2	密	良	外 5G 7/1 断 N 8 内 5G 7/1	明緑灰 灰白 明緑灰	肥前 外 植物
60-163	4区	−	染付	碗	口径 10.2 器高 5.6 底径 4.3	密	良	外 10Y 8/1 断 10Y 8/1 内 10Y 8/1	灰白 灰白 灰白	肥前 外 植物 「福」
60-164	4区	−	染付	碗	口径 8.7 器高 5.45 底径 3.5	密	良	外 N 8 断 N 8 内 N 8	灰白 灰白 灰白	肥前 外 向日葵 芥子？ 内 波状列点文
60-165	4区	−	白磁	碗	口径 10.2 器高 5.1 底径 3.8	密	良	外 N 8 断 N 8 内 N 8	灰白 灰白 灰白	
60-166	4区	第1層	染付	碗	口径 7.65 器高 3.5 底径 2.95	密	良	外 N 8 断 N 8 内 N 8	灰白 灰白 灰白	肥前 外 二重網目
60-167	5区 1W-40 a-1	第2層	色絵	碗	残存高 1.9	密	良	外 N 8 断 N 8 内	灰青 灰白 白	外 樹木・柵
60-168	6区	−	染付	徳利	残存高 9.9 底径 6.4	密	良	外 N 8 断 5Y 7/2 内 5Y 7/2	灰白 灰白 灰白	肥前 外 木の表現？
60-169	6区	−	染付	碗	口径 9.8	密	良	外 内	白 白	端反り型 樹木
60-170	4区	−	青磁	碗	口径 9.0 器高 6.1 底径 3.6	密	良	外 10G 7/1 断 N 8 内 10G 7/1	明緑灰 灰白 明緑灰	肥前 広東型
60-171	2区 1V-41 i-8	第1層	陶器	皿	残存高 1.45 底径 3.9	密	良	外 10YR 8/3 7.5Y 6/2 断 10YR 8/1 内 5Y 6/2	浅黄橙 灰オリーブ 灰白 灰オリーブ	唐津
60-172	6区	−	染付	徳利	残存高 5.05 底径 4.8	密	良	外 5G 7/1 断 N 8 内 5Y 8/2	明緑灰 灰白 灰白	外 植物
60-173	3区 1V-41 g-6	第2層	染付	徳利	残存高 5.35 底径 4.5	密	良	外 10G 7/1 断 5Y 8/1 内 2.5Y 8/2	明緑灰 灰白 灰白	肥前 外 網目
60-174	6区	−	染付	碗	残存高 5.3 底径 4.4	密	良	外 断 2.5Y 8/2 内	灰青 灰白 灰青	肥前 外 植物 内 蝶？
60-175	6区	第1層	染付	線香筒	残存高 6.0	密	良	外 N 8 断 N 8 内 N 8	灰 灰 灰	肥前 外 竹の節を表現・竹葉
60-176	6区	−	染付	筒	口径 4.3 残存高 4.55	密	良	外 10BG 7/1 断 N 8 内 10BG 7/1	明青灰 灰白 明青灰	肥前 外 宝珠 鎬状文
60-177	6区	−	染付	用途不明品	残存長辺 3.8 短辺 1.7 厚さ 0.3	密	良	外 N 8 断 N 8 内 N 8	灰白 灰白 灰白	外 蘇・唐草 焼き継ぎの痕跡有り
60-178	2区 1W-41 a-8	第3層	青磁	三足盤	口径 20.1 残存高 5.2	密	良	外 7.5GY 7/1 断 N 8 内 7.5GY 7/1	明緑灰 灰白 明緑灰	肥前 内 雷？
60-179	4区	第1層	白磁	花瓶	口径 10.5 残存高 3.4	密	良	外 N 8 断 N 8 内 N 8	灰白 灰白 灰白	肥前 盤口形 内 巻物

第7表　遺物観察表(8)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
61-180	2区 1V-41 j-8	第3層	色絵	仏飯器	口径 6.3 器高 6.55 底径 3.4	密	良	外 5BG7/1 明青灰 断 10Y8/1 灰白 内 10G7/1 明青灰	肥前 外 半菊花？
61-181	4区	第1層	青磁	壺？	残存高 2.5 底径 8.65	密	良	外 断 N8 緑灰 内 灰白	肥前
61-182	4区	第1層	染付	鉢	残存高 3.5 底径 7.2	密	良	外 10BG7/1 明青灰 断 N8 灰白 内 10BG7/1 明青灰	肥前 蛇ノ目凹型高台 外 直線 内 「渚」 直線
61-183	4区	第1層	染付	鉢	残存高 6.75 底径 9.8	密	良	外 灰青 断 灰青 内 灰青	肥前 外 植物 内 松竹梅
61-184	2区 1V-41 h-8	第2層	陶器	皿	残存高 2.1 底径 5.9	密	良	外 2.5Y8/2 灰白 断 2.5Y8/2 灰白 内 2.5GY7/1 明オリーブ灰 2.5YR6/6 橙	肥前 内面に蛇ノ目軸ハギを施す
61-185	6区	−	染付	角皿	口径 9.15 器高 2.2 底径 4.4	密	良	外 7.5Y8/1 灰白 断 7.5Y8/1 灰白 内 7.5Y8/1 灰白	四葉型 内 魚
62-186	6区	−	染付	皿	口径 13.3 器高 3.1 底径 8.8	密	良	外 5BG7/1 明青灰 断 2.5Y8/2 灰白 内 5BG7/1 明青灰	肥前 外 唐草 内 五弁花 波状文様
62-187	7区	第1層	白磁	皿	口径 20.5 器高 3.0 底径 13.5	密	良	外 灰青 断 7.5Y8/1 灰白 内 灰青	輪花形 高台内に八ツ師三ヵ所有り
62-188	6区	−	染付	皿	口径 11.4 器高 2.85 底径 7.3	密	良	外 青灰 断 N8 青灰 内 青灰	肥前 外 唐草 内 植物・雲
62-189	6区	第1層	染付	鉢	口径 17.2 器高 6.3 底径 8.6	密	良	外 10BG7/1 明青灰 断 N8 灰白 内 5BG7/1 明青灰	肥前 蛇ノ目凹型高台 外 唐草 内 山水 190と同一柄
62-190	6区	第1層	染付	鉢	残存高 1.6 底径 7.8	密	良	外 10G7/1 明緑灰 断 N8 灰白 内 10G7/1 明緑灰	肥前 蛇ノ目凹型高台 外 唐草 内 山水 189と同一柄
62-191	4区	−	染付	皿	残存高 1.25 底径 12.9	密	良	外 2.5GY8/1 灰白 断 2.5Y8/2 灰白 内 2.5GY8/1 灰白	肥前 外 「大明成化年製」銘 内 植物
62-192	6区	−	染付	皿	口径 21.6 器高 4.0 底径 12.7	密	良	外 5BG7/1 明青灰 断 N8 灰白 内 5BG7/1 明白灰	肥前　芙蓉手 外 花 内 鳥・水草 植物・雁嘴
63-193	2区 1W-41 b-8	第3層	陶器	碗	口径 11.3 残存高 6.1	密	良	外 2.5Y7/2 灰黄 断 10YR8/1 灰白 内 10YR7/1 灰白	
63-194	3区	第1層	陶器	碗	口径 9.5 器高 5.65 底径 3.3	密	良	外 5Y7/3 浅黄 断 2.5Y8/3 淡黄 内 5Y7/3 浅黄	
63-195	3区	第1層	陶器	壺	残存高 4.3 底径 4.7	密	良	外 7.5YR7/4 にぶい橙 2.5GY6/1 オリーブ灰 断 10YR7/2 にぶい黄橙 内 2.5GY6/1 オリーブ灰	唐津
63-196	4区	第1層	陶器	碗	口径 8.8 器高 5.7 底径 2.9	密	良	外 10YR7/4 にぶい黄橙 10YR8/2 灰白 断 2.5Y8/1 灰白 内 10YR8/2 灰白	京焼系 上絵付 外 竹葉
63-197	1区 1V-41 j-3	第2層	陶器	碗	残存高 2.8 底径 4.6	砂質	良	外 7.5YR8/3 浅黄橙 断 10YR8/1 灰白 内 7.5YR6/4 にぶい橙	肥前
63-198	2区 1W-41 c-9	第3層	陶器	碗	残存高 2.5 底径 5.2	密	良	外 7.5YR8/3 浅黄橙 断 10YR7/3 にぶい黄橙 内 2.5Y8/3 淡黄	
63-199	4区	第1層	陶器	碗	残存高 3.5 底径 3.3	密	良	外 5Y8/2 灰白 7.5YR8/3 にぶい橙 断 10YR7/1 灰白 内 5Y8/2 灰白	
63-200	6区	第1層	陶器	碗	残存高 2.2 底径 2.5	密	良	外 2.5Y8/2 灰白 断 2.5Y8/3 淡黄 内 2.5Y8/2 灰白	
63-201	3区 1V-41 j-5 a-6	第1・2層	陶器	蓋	口径 12.5 器高 2.4	密	良	外 5Y7/2 灰白 断 7.5YR8/6 浅黄橙 内 2.5Y8/3 淡黄	内面に文字有り
63-202	5区	第2層	陶器	蓋	口径 8.8 器高 3.3 鈕径 3.0	密	良	外 2.5Y4/2 暗灰黄 断 5Y6/1 灰 内 10Y5/1 灰	唐津 外 刷毛目

第７表　遺物観察表⑨

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
63-203	1区 1 V-41 j-3	第2層	陶器	蓋	口径 10.0 器高 1.6	密	良	外 5Y 5/6 オリーブ 断 5Y 6/1 灰 内 5Y 6/1 灰	土瓶・急須類の蓋
63-204	6区	第1層	陶器	蓋	口径 14.15 器高 1.6	密	良	外 7.5Y 5/2 灰オリーブ 断 2.5Y 7/1 灰白 内 10Y 6/2 オリーブ灰	行平鍋の蓋
63-205	5区 1 W-40 j-9	第2層	陶器	蓋	口径 3.3 器高 1.3	密	良	外 7.5Y 6/2 灰オリーブ 内 5Y 6/2 灰オリーブ	油注・水注・壺等の蓋
63-206	6区	第1層	陶器	蓋	口径 4.3 器高 2.5	密	良	外 10Y 7/1 灰白 内 5Y 7/1 灰白	外 篦目？ 周囲を打ち欠く
63-207	6区	第1層	陶器	水滴	残存長辺 4.1 残存短辺 3.4 残存高 2.1	密	良	外 7.5Y 6/2 灰オリーブ 断 2.5Y 8/3 淡黄 内 2.5Y 8/3 淡黄	そろばん型？
63-208	4区	第1層	陶器	皿	残存高 3.4	密	良	外 2.5Y 8/3 淡黄 断 2.5Y 8/2 灰白 内 2.5Y 7/3 淡黄	京焼系 口縁端部に刻み目有り 内 樹木 212と同一個体の可能性有り
63-209	3区	第1層	陶器	急須	残存高 1.9 底径 6.6	密	良	外 2.5Y 5/2 暗灰黄 断 2.5Y 8/1 灰白 断 10YR 8/3 淡黄橙 内 2.5Y 8/1 灰白	
63-210	6区	－	土師器	灯明皿	口径 6.0 器高 1.3 底径 2.1	密	良	外 7.5YR 6/8 橙 断 7.5YR 8/6 淡黄橙 内 7.5YR 6/8 橙	内面施釉 回転糸切り
63-211	6区	－	陶器	灯明皿	口径 11.2 器高 1.9 底径 4.7	密	良	外 2.5Y 7/2 灰黄 断 2.5Y 8/3 淡黄 内 5Y 7/2 灰白	伊賀・信楽 内面に櫛目有り
63-212	4区	第1層	陶器	皿	残存高 1.65	密	良	外 2.5Y 8/3 淡黄 断 2.5Y 8/2 灰白 内 2.5Y 7/3 淡黄	京焼系 高台見込に文字有り 208と同一個体の可能性有り
63-213	6区	第1層	陶器	皿	口径 17.2 残存高 3.1	密	良	外 7.5Y 7/2 灰白 断 10YR 8/1 灰白 内 7.5Y 7/2 灰白	
63-214	6区	第1層	土師器	柴燭	残存高 6.0 底径 4.3	密	良	外 10YR 4/1 褐灰 断 7.5YR 7/6 橙 内 7.5YR 4/2 灰褐	底に直径6mmの穴があいている 回転糸切り
63-215	6区	－	陶器	受皿	口径 7.9 器高 1.4 底径 4.3	密	良	外 2.5Y 8/3 淡黄 断 2.5Y 6/2 灰黄 内 5Y 6/1 灰	伊賀・信楽
63-216	7区	第1層	陶器	水指	口径 23.5 残存高 11.65	密	良	外 5YR 4/3 にぶい赤褐 断 5Y 7/1 灰 内 7.5Y 3/2 オリーブ黒	外面に櫛の籾のような帯を巡らせる
64-217	6区	－	陶器	行平鍋	口径 15.9 残存高 3.05	密	良	外 7.5Y 5/2 灰オリーブ 内 7.5Y 5/2 灰オリーブ	把手 薄舟 ［帯］ 幾何学文様
64-218	6区	－	陶器	行平鍋	口径 18.0 残存高 4.4	密	良	外 10YR 3/3 暗褐 断 10YR 5/1 褐灰 内 10YR 3/3 暗褐	鉄釉 丹波
64-219	7区	第1層	陶器	行平鍋	残存高 2.4 底径 8.8	密	良	外 5Y 6/2 灰オリーブ 2.5Y 7/3 淡黄 断 10YR 6/2 灰白 内 5Y 6/2 灰オリーブ	伊賀・信楽
64-220	6区	第1層	陶器	壺	口径 11.8 残存高 4.4	密	良	外 7.5YR 3/4 暗褐 断 2.5Y 8/1 灰白 内 7.5YR 3/4 暗褐	
64-221	2区 1 W-41 b-9	第2層	陶器	鉢	残存高 3.7 底径 6.6	直径2mmの砂粒を多量に含む	良	外 N 7 灰白 10YR 5/4 にぶい黄橙 断 2.5Y 6/1 黄灰 内 7.5Y 7/1 灰白	丹波
64-222	2区 1 W-41 b-8	－	陶器	鉢	口径 13.1 器高 7.0 底径 11.5	直径2mmの砂粒を多量に含む	良	外 2.5YR 3/3 暗赤褐 断 10YR 8/3 淡黄橙 内 2.5YR 3/3 暗赤褐 N 7 灰白	丹波
64-223	2区 1 W-41 a-8	第3層	陶器	鉢	残存高 6.2 底径 9.3	直径1～3mmの砂粒を多量に含む	良	外 5YR 4/3 にぶい赤褐 断 10YR 8/3 淡黄橙 内 2.5YR 6/3 にぶい橙	丹波
64-224	2区 1 V-41 f 7, f 8	道状遺構	陶器	花立	口径 6.9 残存高 10.8	密	良	外 2.5YR 4/2 灰赤 断 N 6 灰 内 2.5YR 4/2 灰赤	備前
64-225	4区	第1層	陶器	徳利	残存高 5.8 底径 8.6	密	良	外 2.5Y 8/1 灰白 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 断 10YR 6/2 灰黄褐 内 10YR 5/3 にぶい黄褐	外 縦線
64-226	4区	－	土師器	炮烙	口径 27.3 残存高 4.6	密	良	外 7.5YR 8/6 淡黄橙 断 7.5YR 8/6 淡黄橙 内 7.5YR 7/6 橙	G類
64-227	2区	道状遺構	陶器	擂鉢	残存高 3.5 底径 12.2	密	良	外 2.5YR 4/2 灰赤 断 N 7 灰白 内 N 7 灰白	備前

第７表　遺物観察表(10)

番号	地区	層位・遺構	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
64-228	4区	－	土師器	皿	残存高 1.1 底径 5.0	密	良	外 7.5 Y R 8/6 淺黄橙 断 2.5 Y 8/6 淺黄橙 内 7.5 Y R 8/6 淺黄橙	回転糸切り
64-229	6区	－	陶器	擂鉢	残存高 5.5 底径 17.0	密	良	外 2.5 YR 5/4 にぶい赤褐 断 2.5 YR 6/6 橙 内 2.5 YR 6/6 橙	明石擂鉢 Ⅲ－ｂ類
64-230	5区 1 W-40 b-9	第２層	土師質 土製品	絵錦彩 土製品	直径 3.0 厚さ 0.8	直径 0.1 mm程度の砂を含む	不良	7.5 YR 8/4 淺黄橙	大黒天
64-231	2区 1 V-41 i-7	第１層	陶器	擂鉢	残存高 3.6 底径 13.7	密	良	外 5 YR 4/2 灰褐 断 2.5 Y 7/1 灰白 内 N 6 灰	備前
64-232	3区 1 V-41 j-6	第２層	土師器	皿	口径 9.2 器高 1.55 底径 5.9	直径１～２mmの砂粒を含む	良	外 7.5 YR 8/4 淺黄橙 断 7.5 YR 8/4 淺黄橙 内 10 YR 8/3 淺黄橙	回転糸切り
64-233	3区	第１層	陶器	擂鉢	口径 23.7 器高 7.6 底径 12.0	直径１mmの砂粒含む	良	外 10 R 5/6 赤 断 10 R 6/6 赤橙 内 2.5 YR 6/6 橙	堺擂鉢 Ⅲ－ａ２類
64-234	6区	－	陶器	擂鉢	残存高 3.4 底径 16.0	密	良	外 10 R 5/6 赤 断 10 R 6/6 赤橙 内 2.5 YR 6/6 橙	明石擂鉢 Ⅲ－ｂ類
65-235	6区	－	陶器	甕	口径 37.2 残存高 39.1	密	良	外 2.5 YR 4/3 にぶい赤褐 断 2.5 Y 5/1 黄灰 内 5 YR 5/3 にぶい赤褐 10 YR 5/2 灰黄褐	丹波

軒丸瓦・棟込瓦

番号	地区	層位・遺構	種類	体部厚	瓦当 径	瓦当 厚さ	巴	珠文 数	珠文 径	文様区径	周縁 幅	周縁 高さ	色調	備考
67-236	5区 1 W-41 e-1	第２面 落込５－１ 集石土坑５－10	軒丸瓦	－	14.95	2.65	－	－	－	10.85	2.05	0.55	N 6 灰	徳大禅寺
67-237	5区 1 W-41 e-1	第３面 落込５－１ 集石土坑５－10	軒丸瓦	－	13.6	1.75	左	16	1.2	9.5	2.0	0.65	N 4 灰	
67-238	5区 1 W-41 e-1	第３面 落込５－１ 集石土坑５－10	棟込瓦	－	6.8	1.9	－	－	－	5.0	0.9	0.6	N 4 灰	菊花　８弁
67-239	5区 1 W-41 e-1	第３面 落込５－１ 集石土坑５－10	棟込瓦	－	6.9	1.2	－	－	－	5.4	0.9	0.6	N 4 灰 7.5 Y 7/1 灰白	菊花　８弁
67-240	5区 1 W-41 e-1	第２面 落込５－１ 集石土坑５－10	棟込瓦	－	6.3	1.65	－	－	－	4.8	0.8	0.7	N 4 灰	菊花　８弁
67-241	5区 1 W-41 e-1	第２面 落込５－１ 集石土坑５－10	軒丸瓦	－	14.3	2.1	右	12	1.0	10.5	1.85	0.45	N 5 灰 10 Y 8/1 灰白	
67-242	5区 1 W-41 e-1	第３面 落込５－１ 集石土坑５－10	軒桟瓦	－	10.0	1.9	右	8	0.8	7.1	7.2	0.3	N 3 灰	
67-244	5区 1 W-41 e-3	第２面 土坑５－74	軒丸瓦	1.9	14.0	2.0	右	12	1.3	10.5	1.75	0.5	N 4 灰 7.5 Y 8/1 灰白	
67-245	5区 1 V-40 j-9	第２面 土坑５－１	軒丸瓦	1.5	14.2	2.0	右	12	1.5	10.9	2.0	0.5	2.5 Y 6/1 黄灰 7.5 Y 6/1 灰	
67-246	5区 1 W-41 e-3	第２面 土坑５－74	軒桟瓦	－	(6.0)	2.0	右	(3)	0.6	(5.0)	1.4	0.4	N 5 灰	
67-248	5区 1 W-40 j-9	第２面 土坑５－１	軒丸瓦	1.3	14.35	2.0	右	12	1.5	10.25	2.05	0.6	7.5 Y 7/1 灰白 7.5 Y 5/1 灰	
67-249	5区 1 W-40 j-9	第２面 土坑５－１	軒桟瓦	－	(4.7)	1.9	左	(7)	0.6	(6.8)	1.0	0.8	N 4 灰	
67-250	5区 1 W-41 b-3	第２面 土坑５－64	軒丸瓦	－	(4.5)	1.3	－	－	－	(3.1)	1.2	0.4	N 5 灰	沮
67-251	5区 1 W-40 b-9	第２面 ピット５－53	軒丸瓦	－	14.85	2.05	左	15	1.4	10.2	2.2	0.6	N 4 灰	
67-252	5区 1 W-41 e-2	第２面 ピット５－44	鳥衾瓦	－	17.0	2.15	－	－	－	10.8	2.0	0.6	N 6 灰	徳大禅寺
68-254	5区	第２面	軒丸瓦	－	15.2	2.0	－	－	－	10.6	2.2	0.5	5 Y 5/1 灰	徳大禅寺
68-255	6区	－	軒丸瓦	－	11.8	1.7	左	14	1.3	9.5	2.1	0.5	N 5 2.5 Y 8/3 淡黄	二次焼成を受けている
68-256	5区	第２層	棟込瓦	－	7.2	1.85	－	－	－	5.3	0.8	0.3	N 5 灰 5 Y 7/1 灰白	菊花　８弁
68-257	5区	第２層	棟込瓦	1.3	6.1	1.5	－	－	－	5.2	0.8	0.4	N 3 暗灰 2.5 Y 6/3 にぶい黄	菊花　８弁
68-258	5区 1 W-40 b-9	第２層	軒丸瓦	1.6	17.0	2.05	左	15	1.5	10.3	2.5	0.8	N 4 灰 N 8 灰白	玉縁幅 7.5 玉縁長 3.5 長さ　27.25
68-259	6区	－	軒桟瓦	－	5.5	1.9	左	(10)	0.6	(8.6)	0.6	0.8	N 4 灰	
68-261	5区 1 W-40 b-9	第２層	軒桟瓦	1.8	9.2	1.75	左	－	－	6.9	0.8	0.5	5 Y 7/1 灰白	平瓦部分 唐草？
68-267	4区	－	鳥衾瓦	3.4	15.6	1.6	右	(10)	1.5	10.9	1.8	0.5	5 Y 8/2 灰白 5 Y 5/1 灰	

第７表　遺物観察表(11)

軒平瓦・軒桟瓦

番号	地区	層位 遺構	種類	瓦当厚	体部厚	歪れ長	文様区 長	文様区 幅	外区 上	外区 下	脇区 左	脇区 右	周縁高	色調	備考
67-243	5区 1W-41 b-3	第2面 土坑 5－74	軒平瓦	1.2	1.7	4.1	2.2	(6.3)	1.0	0.9	－	5.3	0.6	N 4　灰	文様　唐草
67-247	5区 1W-40 j-9	第2面 土坑 5－1	軒平瓦	1.05	1.6	4.15	1.85	(13.5)	1.35	0.95	5.0	－	0.45	N 6　灰 N 5　灰	文様　唐草
67-253	5区 1W-40 n-8	第2面 土坑 5－94	軒平瓦	1.6	1.7	4.15	2.0	13.9	0.9	1.25	5.5	5.5	0.25	10YR 8/3 浅黄橙 7.5YR 8/4 浅黄橙 N 4　灰	文様　唐草 長さ　27.0
68-260	6区	－	軒平瓦 か 軒桟瓦	1.6	1.2	3.9	1.6	－	－	0.9	－	－	0.4	N 4　灰 7.5Y 8/1　灰白	文様　唐草
68-262	5区	第2層	軒桟瓦	1.65	1.55	4.45	2.4	14.7	1.05	1.0	5.5	5.25	0.45	N 4　灰	文様　唐草
68-263	5区	第2層	軒平瓦	1.5	1.6	4.1	1.9	(11.4)	1.3	0.9	－	4.6	0.5	10YR 8/3 浅黄橙	文様　唐草
68-264	4区	－	軒桟瓦	1.6	1.6	4.2	2.3	(8.7)	0.9	－	5.0	－	0.6	N 3　灰 5Y 8/2　灰白	文様　唐草
68-265	6区	－	軒桟瓦	－	1.9	－	－	(4.0)	1.0	－	6.2	－	0.8	N 3　灰	文様　唐草
68-266	5区 1W-40 n-9	第2層	軒平瓦	1.4	－	3.8	1.85	－	0.85	1.2	－	－	0.3	N 4　灰	文様　唐草

その他の瓦

番号	地区	層位・遺構	種類	法量(cm)	色調	備考
68-268	5区 1W-40 c-10	第2層	熨斗瓦	残存長　14.9 幅　11.9 厚さ　1.5	N 4　灰	平裁熨斗瓦 凹面にヘラで斜線を入れる。
68-269	5区	第2層	懸魚？	残存長辺　12.2 残存短辺　7.6 厚さ　1.7	外 N 3　暗灰 断 2.5Y 7/1 灰白	釘穴有り 縁に沈線を入れる。

金属製品

番号	地区	層位・遺構	種類	材質	法量(cm)	特徴	備考
69-270	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	燭台の蠟受け	銅	口径　3.9 器高　1.9 厚さ　0.1	底部に直径0.5cmの穴が開けられている。	
69-271	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	筒状製品 （花生？）	銅	残存高　4.65 幅　4.15 厚さ　0.1		
69-272	5区 1W-41 c-1	第2面 落込5－1 集石土坑5－10	飾状製品	銅	長さ　8.4 幅　0.4	上部にくびれ有り	
69-273	5区 1W-41 b-2	第2層	釘	鉄	長さ　5.1 幅　0.6 厚さ　0.7		下端部欠損
69-274	5区	第2層	鎌	鉄	長さ　14.5 幅　3.4		全体が錆に覆われている。
69-275	5区 1W-41 b-1	第2層 集石土坑5－3	鉛玉	鉛	長径　0.8 短径　0.55		
69-276	2区 1W-41 a-10	第2層	釘	鉄	長さ　4.9 幅　0.7		上下ともに欠損
70-277	2区 1V-41 f-8	第2層	貨幣 元豊通寶	銅	直径　2.4	初鋳年　1078年	宋銭 行書
70-278	2区 1V-41 f-7	第2層	貨幣 永楽通寶	銅	直径　2.5	初鋳年　1408年	明銭
70-279	2区 1V-41	遺状遺構	貨幣 寛永通寶	銅	直径　2.3	初鋳年　1636年	寛永通寶1期 （古寛永）
70-280	2区 1V-41 h-10	第2層	貨幣 寛永通寶	銅	直径　2.1	初鋳年　1697年	寛永通寶3期 （新寛永）
70-281	2区 1V-41 j-2	第2層	貨幣 寛永通寶	銅	直径　2.3	初鋳年　1697年	寛永通寶3期 （新寛永）
70-282	5区 1W-41 b-2	第2面 集石土坑5－3	貨幣 寛永通寶	銅	直径　2.1	初鋳年　1697年	寛永通寶3期 （新寛永）
70-283	2区 1V-42 f-1	第3面 溝2－2	貨幣 寛永通寶	銅	直径　2.5	初鋳年　1668年	寛永通寶2期 （新寛永文銭）
70-284	5区 1V-40 j-10	ピット5－5	貨幣 寛永通寶	銅	直径　2.3	初鋳年　1697年	寛永通寶3期 （新寛永）

石製品

番号	地区	層位・遺構	種類	材質	法量(cm)	特徴	備考
71-285	2区 1V-41 j-9	第2層	剝片	サヌカイト	長さ　6.7 幅　3.1 厚さ　0.85	片側に鞘面が残る。	加工面が風化している。

第７表　遺物観察表(12)

番　号	地　　区	層位・遺構	種　類	材　　質	法　　量(cm)	特　　徴	備　　考
71-286	H 77 区 1 U-39 g-10	第３層 ピット H 77－17	垂飾？	－	長さ　4.3 幅　1.6 厚さ　1.1	研磨している部分も有る。	淡緑色を呈する。
71-287	3区 1 V-41 j-9	第３層	小刀	サヌカイト	長さ　7.75 幅　2.05 厚さ　0.9		Ⅰ類

写 真 図 版

図版１　１区最終面検出状況

１．北半部（東から）

２．北半部（北東から）

３．南半部（東から）

４．南半部（南東から）

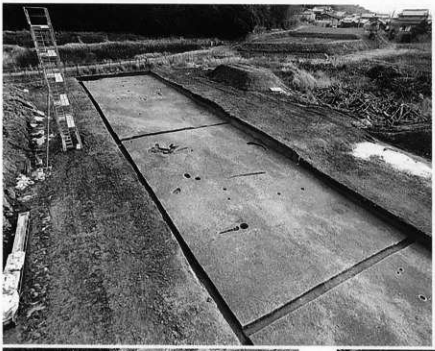
図版２　２区最終面検出状況

１．中央部（北から）

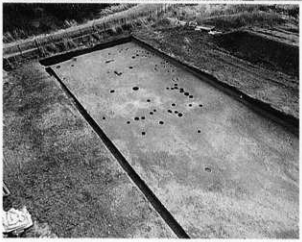
２．東端部（北西から）

３．西端部（北から）

図版３　７区最終面検出状況



１．東半部（北西から）



２．東半部近接（北西から）

３．中央部近接（北から）

４．西半部（北東から）

図版4　3区最終面検出状況

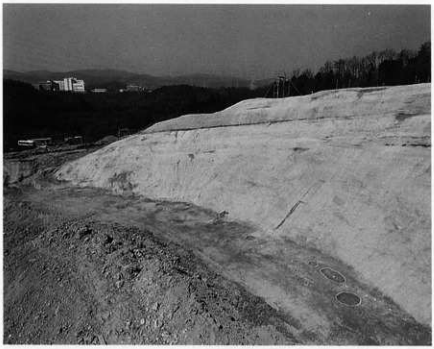
1．東半部（北東から）

2．東半部（北西から）

3．西半部（北東から）

4．西半部（北西から）

図版５　４区最終面検出状況

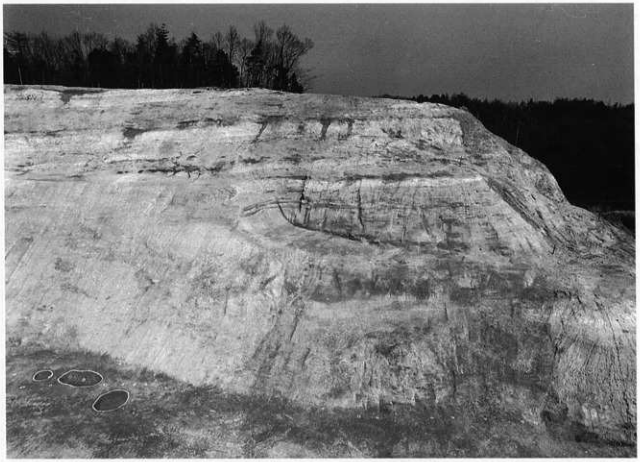


１．南側斜面（南東から）

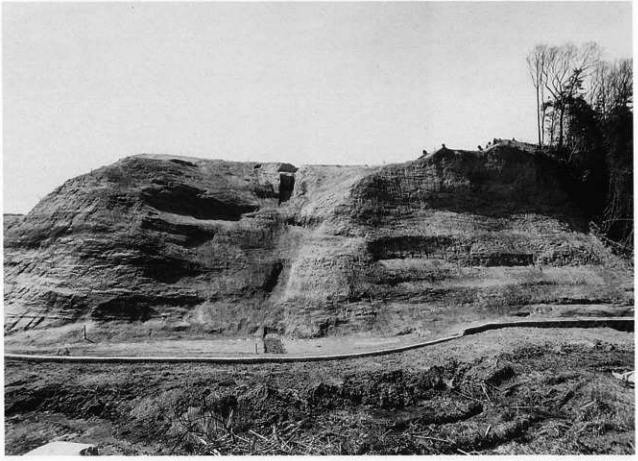
２．西側斜面（西から）

３．西側斜面棚田部分近接（東から）

図版6　4区・6区最終面検出状況



1．4区南東側斜面（南から）



2．6区東側斜面（東から）

図版７　５区最終面検出状況

１．東半部（北から）

２．東半部（北から）

３．西半部（北東から）

４．西半部（北東から）

図版8　H77区最終面検出状況

1．北半部（南西から）

2．北半部（北西から）

3．南半部（北から）

4．南半部（北から）

１．炭窯２－１完掘状況（南から）

２．溝２－２完掘状況（南から）

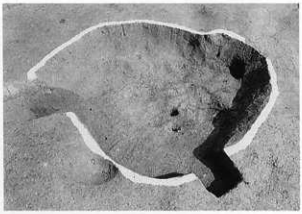
３．集石土坑２－３完掘状況（南東から）

４．ピット２－34 検出状況（東から）

５．ピット２－30 断面（西から）

図版 10　2 区遺構検出状況その他

1．土坑 2 － 7 断面（東から）



2．土坑 2 － 7 完掘状況（北東から）

3．現地説明会風景

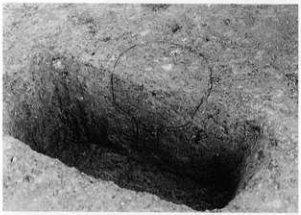
4．鋳造土坑切り取り作業

5．ポリウレタン吹き付け作業

図版 11　2 区鋳造土坑 2 － 1 周辺のピット

1．No. 1 断面（東から）

2．No. 3 断面（東から）



3．No. 2 断面（東から）

4．No. 4 断面（西から）

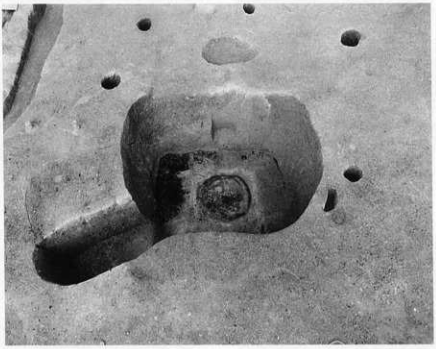
5．No. 5 断面（北から）

6．No. 6 断面（北から）

7．No.25 断面（東から）

8．No. 7・8 断面（西から）

図版 12　2 区鋳造土坑 2 － 1



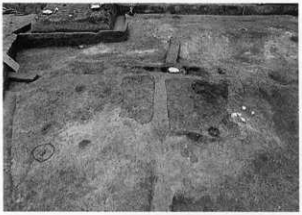
1．全掘状況（南から）

2．長軸方向断面（北東から）

3．緑釉陶器出土状況（東から）

4．底部近接（南から）

5．底部断ち割り状況（南から）



1．中心部の検出状況（南から）

2．落込3－2断面（西から）

3．No.11検出状況（北から）

4．No.11・12（南から）

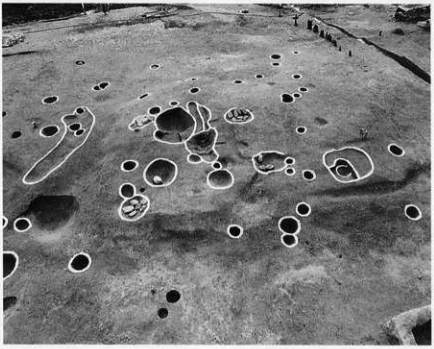
5．No.11炭化物層（南西から）

6．No.11断面（南から）

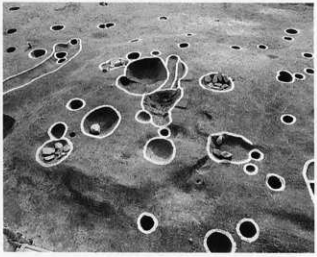
7．No.12断面（南西から）

8．No.10（北東から）

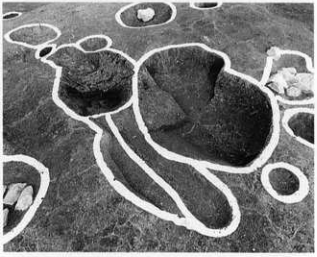
図版 14　3 区鍛冶炉 3 － 1



1．完掘状況（北から）



2．中央部近接（北東から）



3．No.11・12 完掘状況（南東から）

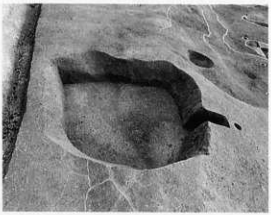
4．No.13 完掘状況（北西から）

5．No. 3・14 完掘状況（北から）

1．土坑３－３遺物出土状況（東から）

2．土坑３－３断面（北西から）

3．土坑３－12 完掘状況（北から）

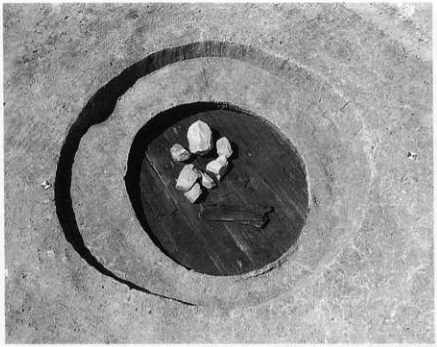


4．土坑３－３完掘状況（西から）

5．集石土坑３－３完掘状況（北から）

6．集石土坑３－１完掘状況（南から）

図版16　3区・4区遺構検出状況



1．土坑3－19桶出土状況（南から）

2．土坑3－19完掘状況（南から）

3．暗渠5－1（西から）

4．焼土坑4－1（南西から）

1．土坑 5 －80 完掘状況（東から）

2．土坑 5 －80 断面（東から）

3．土坑 5 －68 墓壙検出状況（東から）

4．土坑 5 －68 完掘状況（南から）

5．土坑 5 －58 完掘状況（東から）

6．土坑 5 －58 断面（南東から）

図版 18　5 区遺構検出状況

1．集石土坑 5 － 6 完掘状況（南東から）

2．土坑 5 －57 完掘状況（南東から）

3．集石土坑 5 －10 検出状況（南西から）

4．集石土坑 5 －10 断面（西から）

5．ピット 5 －28 完掘状況（南から）

1．ピット 5 －52 断面（東から）

2．土坑 5 －24 断面（東から）

3．土坑 5 －53・50（北東から）

．土坑 5 －53 完掘状況（北東から）

5．土坑 5 －50 完掘状況（北東から）

6．土坑 5 －60 完掘状況（北から）

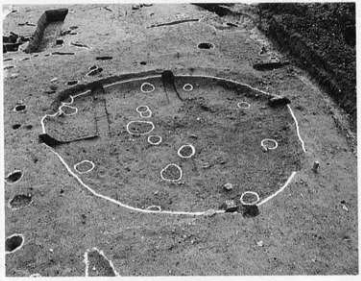
7．集石土坑 5 － 9 完掘状況（北から）

8．集石遺構 5 － 1（南西から）

図版 20　H 77 区住居址 H 77－1

1．住居址土層断面（北から）

2．ピット 1 断面（北から）



3．検出状況（北から）

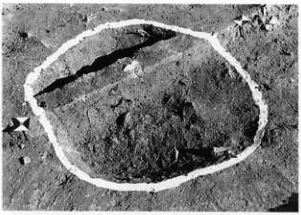
4．ピット 6 断面（南から）

6．ピット 8 断面（東から）

5．ピット 12 断面
（南から）

7．ピット 15 断面
（北から）

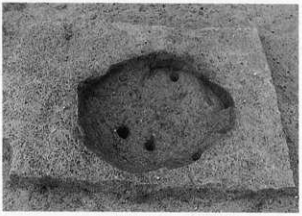
8．ピット 9・10 断面（東から）



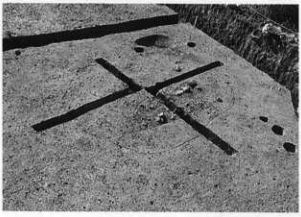
1．焼土坑 H 77－1 検出状況（西から）

2．石垣 H 77－1 検出状況（北西から）

3．焼土坑 H 77－2 断面（北西から）



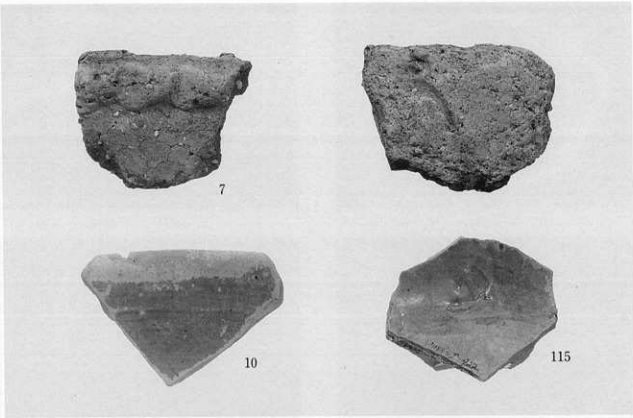
4．焼土坑 H 77－2 完掘状況（西から）

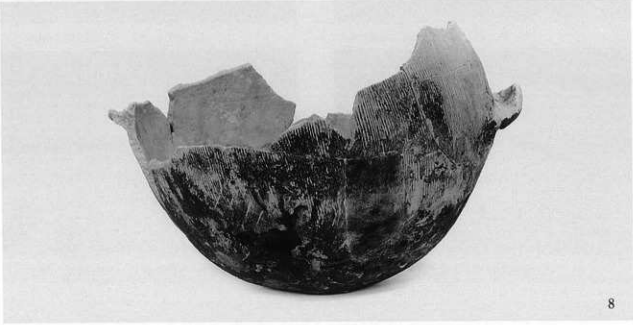


5．住居址 H 77－3 検出状況（北東から）

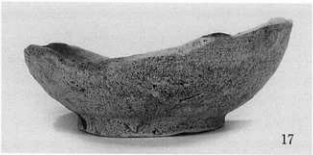
6．住居址 H 77－2 検出状況（北から）

図版 22　H 77 区住居址 H 77－1 他出土土器





図版 23　2 区鋳造土坑 2 － 1 他出土遺物


17

34

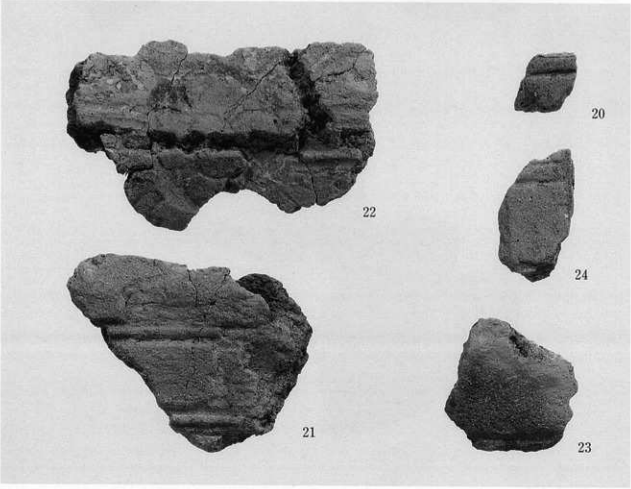
122

27

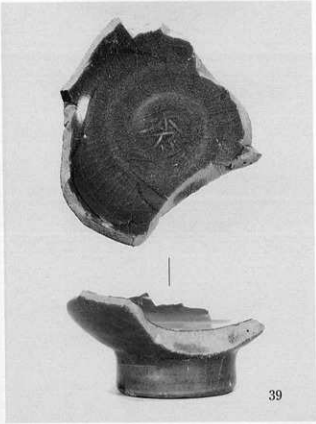
32

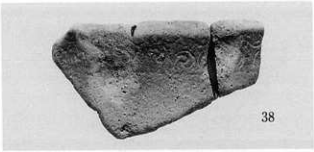
28

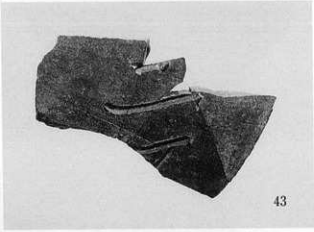
15

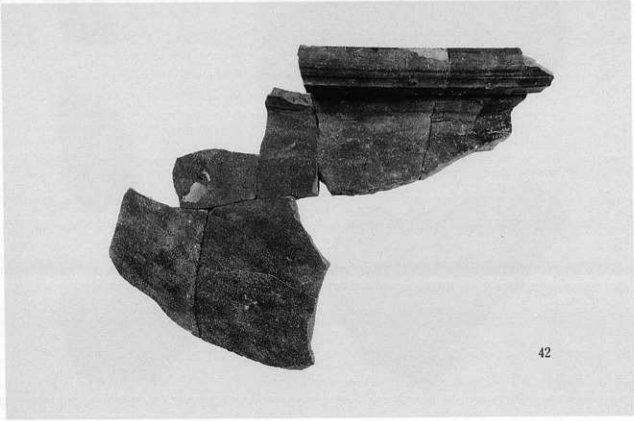


図版 24　3 区土坑 3 － 3 出土遺物

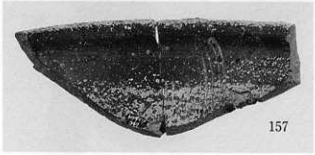


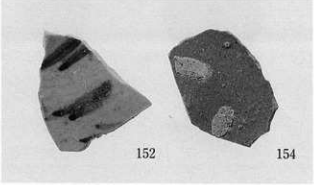




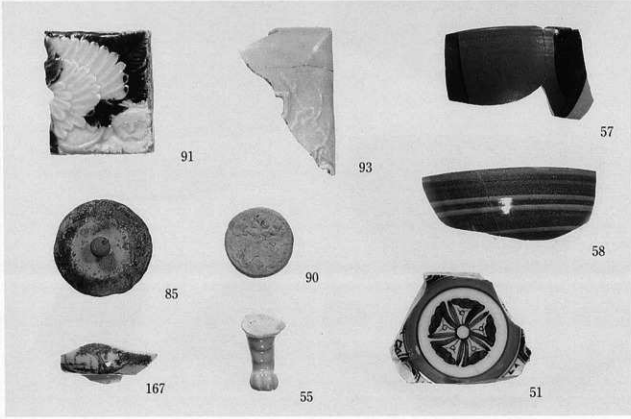


図版 25　包含層出土中世遺物

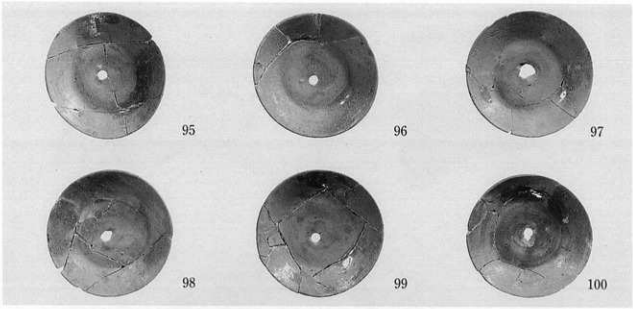


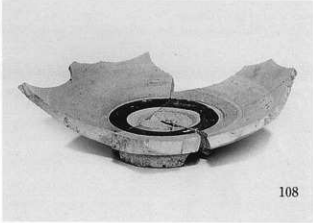


図版 26　集石土坑５－10・落込５－１他出土遺物

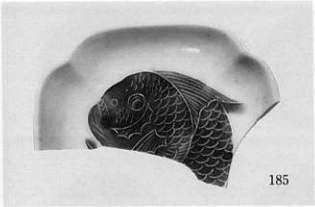


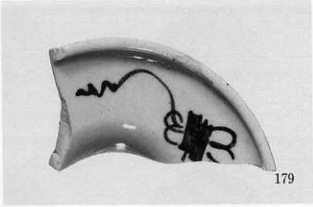
図版 27　土坑 5 －96 他出土遺物

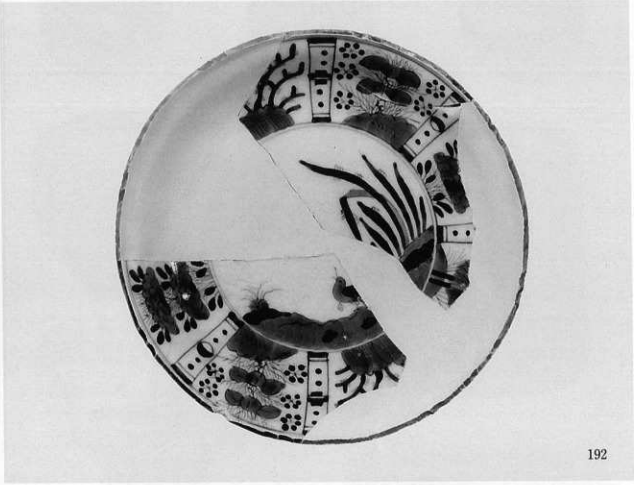




図版 28　包含層出土近世遺物 1


185


179

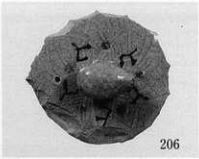

192

178

176

175

177


206

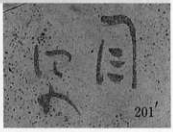
214

202

201

215

205


201′

161

図版 30　軒丸瓦・軒桟瓦

236

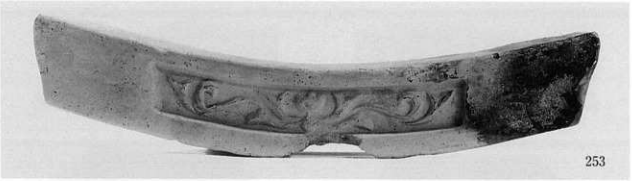
255

237

241

251

261


253

262

260

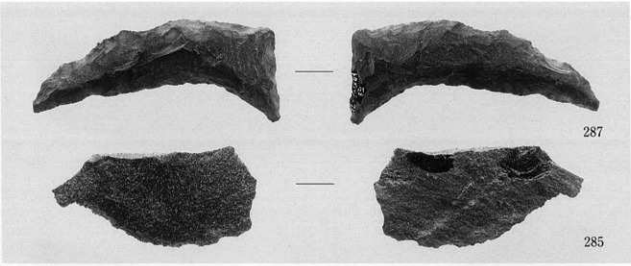
239

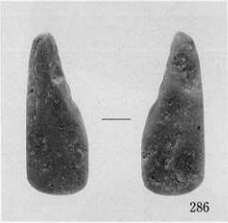
250

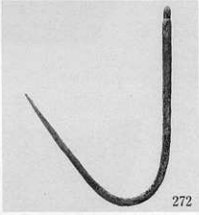
259

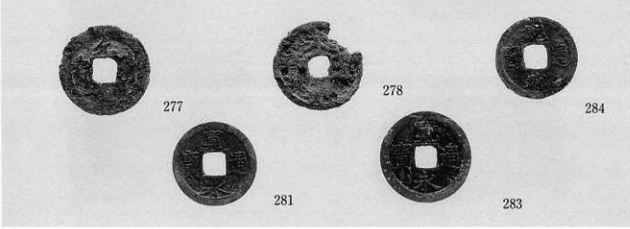
269

図版 32　石製品・金属製品









報告書抄録

ふりがな	とくだいじいせき
書名	徳大寺遺跡
副書名	国際文化公園都市整理事業に伴う発掘調査報告書
巻次	国際文化公園都市内遺跡群調査報告２
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第45集
編著者名	若林幸子　廣瀬時習　木村健明　前中一晃　吉田育代
編集機関	財団法人　大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536-0016　大阪府大阪市城東区蒲生２丁目11番３号　小森ビル４階　☎06－6934－6651
発行年月日	平成11年６月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とくだいじいせき 徳大寺遺跡	おおさかふしのおかし 大阪府箕面市 あかまだにひがし 粟生間谷東・ いばらぎしょうくのしょう 茨木市宿久庄	27220 27211	46	34°50′49″ ～ 34°50′49″	135°31′33″ ～ 135°31′40″	1996.6.3 ～ 1997.7.30	20.045m²	国際文化公園都市整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳大寺遺跡	集落	縄文時代	住居址	長原式土器	当地域における人の活動が縄文時代まで溯ることがわかった。
	鋳造遺跡	古代	鋳造土坑 鍛冶炉	緑釉陶器 鋳型	土坑底部の残存状況が良好な鋳造土坑が検出された。
	集落	中世		瓦質羽釜・青磁碗	
	寺院	近世	溝 集石土坑	染付、陶器 瓦	近世黄檗宗寺院関連の遺構・遺物を確認した。

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第45集

徳大寺遺跡

発行年　1999年６月30日
編集・発行　財団法人　大阪府文化財調査研究センター
〒536-0016　大阪府大阪市城東区蒲生２丁目11-３
小森ビル４階
TEL06－6934－6651　FAX06－6934－7029
印刷　株式会社　じんのう